

者、一本元、當衍

情者云何。氏人答云。天智天武持統此三代之天皇各生給之時。寂初之時御湯行水汲此地内井奉浴之由。俗詞語來。件井水依經三皇御用一號御井者。予問此緣起漸見地形宛如大唐青龍寺奉受付屬畢。別當西塔共還本山。別當共參内裏奏中山。勅急造唐坊佛像法門運移此寺。予改御井寺成一井寺。其山何者。件井水三皇用給之上。此寺爲傳法灌頂之庭。可汲井花水之事令繼彌勒三會曉。故成一井寺云々。

聖寶僧正十六にて出家して。始て元興寺にて三論の法文を學び。後に東大寺にて法相花嚴の法文を修學す。東大寺の東坊南第二の室は。本願の時より鬼神のすむとて内作もなく。荒室となづけて住人もなかりけるを。此僧正いまだ若かりける時居所のなかりければ。かの室に住けり。鬼神さまくのかたちをげんじけれ共かなはてつるにさりにけり。其後一門の僧相繼て居住して今にたえずとなん。

吏部王記曰。眞崇禪師述金峰山神通云。古老相傳之。昔漢土有金峯山。金剛藏王并住之。而彼山教移滄海而來。金峯山則是彼山也。山有捨身窟。號阿古谷。有八體龍。昔本元興寺僧有童子。名阿古。少而聰悟。試經之時師使阿古奉試。及已得幾代度他人。如是兩度。爰阿古恨恐捨身此谷。即得龍身。師聞捨身驚悲往看。于時已化龍頭猶人也。而先欲害師。菩薩冥護崩石壓龍。故師免害。貞觀年

眞、恐當作貞

八、據一、本補

也、一本元〇而、
一本作面恐非

中觀海法師爲見龍身往到彼谿。夢龍請之明朝將見也。頃天明興雲降電見龍舉首高二丈計。一頭八身。觀海祈龍云。奉寫八部法花經將救汝苦。勿害於吾。龍猶吐氣害將及身。觀海大恐心神迷惑。則歸命并須寫件經。於是雲霧冥失。龍所在。須臾雲霧即除。忽然身至御在所。觀海祈感如願寫經將供養之。請善祐法師爲講師。善祐法師固辭。夢菩薩告曰。我今請汝。勿苦辭。須至方便品。漢音讀之。善祐感悟起請如昔告。比至方便品。大風颺經不知所去。八部法花經今見一卷。

香隆寺僧正寬空は河内國の人也。神日律師入室。寬平法皇灌頂の御弟子也。天德四年炎旱のうれへ有けるに。五月九日より仁壽殿にて孔雀經法を修せられけるに。洛中に雨くだらざりけり。結願の日に成て卷數を奉る時。殿上に靈驗なきよしをせうじて執奏せざりけり。僧正そのよしを聞て法ふくをちやくし。かうろをさへけて庭中に立てふかくはんねんの時。かうろのけぶりたかくのぼりて大雨すなはちふる。たゞしきん闕ばかりふりて郭外にはくだらざりけり。人あやしみとしけり。寬忠僧都號龍上は寬平法皇の御孫。兵部卿敦固親王の子。法皇入室。石山内供奉法灌頂弟子也。行業つもり靈驗勝れたる人也。千日ごまを修し侍ける間は護法香の火を置けり。又度々孔雀經の法に靈驗を施せり。就中習星丈怪行功其光の山普く人口に

丈怪云々、恐有

有。

承平元年の夏の比。貞崇法師東寺の坊にて經を讀ける。大きな龜出來りて見えけり。非常の物と思ひて見ず。こゝろをもつばらにして經をよみけるに。しばし有て雷電してこの龜天に入けり。つぎの日火雷天神かたちをげんじ給て。貞崇にのたまひけるは。われきのふ物語せんと思ひしに我を見ざりし。ほいをそむけり。貞崇答へ申て云。きのふたゞ大なる龜を見る。崇神とは知奉らず。但あやしむ所は雷天に沖するとを。神のの給はく。我もとのあくしんによりて苦をうく。汝わがかたちを見るべしとて則げんじ給けり。貞崇見奉るに上の體雷公の圖に似たり。こしより下は火もゆるがごとし。六月に又内裏へ參らんと思ふなりとのたまひて則見え給はず。

淨藏法師はやんどなき行者也。かつらぎ山におこなひける比金剛山の谷に大きな死人のかばねありけり。かしら手足つゞきてふしたり。苦青くおいて石を枕にせり。手に獨鈷をにぎりたり。こんじきさびずしてきらめきたり。淨藏大きにあやしみて。其谷にといまりてこれなに入のかばねといふことをまらんと。本尊にきせいしけるに。第五日の夜夢に人告ていはく。是はなんぢがむかしの骨なり。すみやかに加持してかの獨鈷を得べきなりといふ。さめてかばねにむかつて聲をあげて加持するに。かばねはたらきうごきておきあがりて。たなごゝろをひらきて獨鈷を淨藏にお

こしより云々、一本朱書云異本の腰よりしもは銚のとし又神の給はく腰のしも常にゆるかとし

たり、一本作て

法、原作徳、據一本改

給ひ、據一本補○事、一本作夏

はく、一本作はし、下同

たへてけり。其後たきいをつみてはふりて。うへに石のそとばを立たりけり。くだんのそとば今にかの谷に有となん。爰に淨藏は多生の行人なりといふ事をしりぬ。又比叡山横川に三年こもりて。六道衆生のために毎日法花經六部をよみ。三時の行法を修し。六千べんの神拜をいたして廻向しけり。其時護法かたちをあらはして。花をとり水をくみて給仕し給ひけり。同住山の比の事にや。七月十五日安居の夜験くらべををこなひけるに。朗善和尚の弟子に修入といふやんとなき人を験者につがひけり。其頃は石に護法をばつけり。第六のつがひにて先淨藏出てある。次修入出てある。淨藏がいはいく。生年七歳より父母の懐を出て山林を家として雲霧をしき物とす。日々に身をぐたき夜々に心をついやす。ねん頃に肝たんをくだきて全く身命をおしまず。これあへて名利のためにせず無上ぼだひのため也。もし我をしらばはくの石わたすべしと云。其時はくの石とび出で。おちあがる事鞠のごとし。こゝに修入いはく。はくの石はなはだ物さはがし。はやくおちる給へと。ことばにしたがひて則しづまりぬ。大威徳呪を見て、しばらく加持するにあへてはたらかず。淨藏又云。衆命によりてかたむけなくも禪師につがひ奉る。禪下行業年ふかくしてくはんねんよはひかたむけり。其威徳を見るにすでに在世の摩訶迦葉に同じ。あへて験を尊者にあらそひ奉にあらず。たゞ三寶の證明をあらはさんがため也といひて。常在靈鷲山の

句をあぐ。其聲雲をひかして聞人心肝をくだく。其時はくの石又うごきをどりてつるに中よりわかれて兩人のまへにおち居ぬ。二人ともに座を立てたかひにおがみつ入にけり。見る人なみだをながさずといふ事なし。

念佛三昧修する事は上古にはまれ也けり。天慶よりこのかた空也上人すゝめ給ひて道場聚落この行さかんにて。道俗男女あまねくせうみやうをもつばらにしけり。これくだんの聖人化度衆生の方便也。市の柱に書付給ひける。

一たびも南無阿彌陀佛といふ人のはちすの上へのぼらぬはなし。

千觀内供は顯密兼學の人にて公請にもしたがひけり。空也上人のをしへによりて遁世したる人也。阿彌陀和讃をつくりて自他をしてとなへしめけるに。夢に人ありて語りけるは。信心是深。豈非極樂上品之蓮。菩提無量也。定期彌勒下生之曉云々。遷化の時手に願文をにぎり口に佛號を唱てをはりにけり。權中納言教忠いひけるは。大師命終の後夢の中にならず生所をしめし給へとけいやくしけるに。閻梨入滅していくばくならずして夢に蓮花のふねにのりて。むかしつくれる彌陀和讃をとなへて西へ行けり。

一乘院大僧都定照は法相宗兼學の人也。天元二年二月九日金剛峯寺座主に補して。同十二月廿一日大僧都に轉ず。四年八月十四日東寺長者興福寺・別當を辭し申ける

教忠、一、本作教忠

照、一本及下文別當、一本此上有等字

狀にいはいく。

興福寺東寺金剛峯寺別當職之事。

右定昭從若年之時。誦法花一乘。修念佛三昧。先年蒙往生極樂之記。而近曾夢中見可墮惡趣之由。定知依件等寺務。所示現也。如往年告爲往生極樂。謹辭如件。

天元四年八月十四日

大僧都定昭

枯、一本作朽

此僧都一乘院の庭前に一株の橘の樹あり。久しくして枯木と成にけり。大佛頂呪一反誦して加持の間すなはち花葉を出しけり。又船に乗て上洛しける時。天童十人出現して舟をになひて岸にちやくしけり。僧都は是十羅刹の我を救給ふぞと申ける。又不動明王も現形じて擁護したまひけるとなん。永觀元年三月廿三日入滅。右の手に五鈷をもち。左の手に一乘經をもつ。初は密印を結びのちには法花經を誦す。藥王品にいたつて。於此命終即往安樂世界乃至恒河沙等諸佛如來の文を兩三返誦して。弟子に告て云。我白骨なを法花經を誦してすべからく一切を渡すべしと云て。定印を結びて居ながらをはりにけり。其後墓内に經を誦する聲聞えけり。又すゞの聲なども聞へけるとなん。

性信二品親王は三條院の末の御子。御母は小一條大將濟時卿女也。むかし母後の御

東寺、據一本補之、一本无當

阿闍梨、一本此下有なんご三字

夢に胡僧來て君の胎内に詫せんともふと申けり。其後懷妊し給ひけり。たんじやうの日神光室をてらす。御法名性信也。大御室とぞ申侍ける。院御瘡病の時諸寺の高僧等そのあるしをうしなひけるに。此親王朝より孔雀經一部を持てまいらせ給て。御祈念有ける程に。已に御氣變じておこらせ給はんとしける程に。御室の御膝をまくらにして御やすみ有けるが。御氣色火急に見えさせ給ひければ。御室信心をいたして孔雀經をよませ給ふ。其御なみだ經よりつたはりて院の御顔につめたくかゝりけるに。御信心の程覺しめしえられける程に。速時に御色なをらせ給て。其日はおこらせ給はざりけり。勸賞には佛母院と云堂をたて、阿闍梨をおかれけり。又同御時參内せさせ給ひたりけるに。勅定に世間には以ての外に有驗の人と申なるに。我見るまへにて其あるしあらはさるべしと仰られければ。勅定そむきがたくまばらく念誦觀念せさせ給ひて。御念珠をなげ出されたりければ。弟子を足にして二三市ばかりはしりあゆみたりければ。いそぎ御障子をたて、入御ありけるとなん。すべて院宮開白を始め奉りて靈驗をかうぶる人その數おほし。さのみは事おほければしるさず。應徳二年九月廿七日つるに往生をとげさせ給にけり。堀河左大臣右大臣の時。紫雲をばまさしく見られけるとぞ。延曆寺僧慶覺は空中に音樂を聞けり。茶毗のとき御平生の間とかせ給はざりける御帶棺の中にてやけざりけり。ふしぎの事とぞ世の人申ける。

の、一本元〇て、一本元

式、一本元

我、原作家、據一本改、院、一、本此上有小一字

永觀律師は病者にて侍けるが。つねのことぐさに病者は善知識也。我依苦痛深求菩提とぞ給ひける。七寶の塔をつくりて佛舍利一粒を安置して。我順次に往生をとぐべくば此舍利かずをまし給ふべしとちかひて。後年にひらきて見奉けるに四粒に成給にけり。随喜渴仰してなく、一粒をとり。本尊のあみだ佛のみけんこめ奉りて。晝夜に瞻仰し奉られけり。又みづからあみだ講式をつくりて。十齋日とに修して薰修久しく成にけり。最後の時れいの講式を修しける間に律師異香をかかれけり。他人はこれをかかず。瞑目の夜頭北面西にして正念に住して。念佛たゆむことなくおほりにけり。年七十九也。弟子あじやり覺敷が夢に。一の精舎に衆僧ならび塵心たるに。覺敷も其列にて佛像を瞻仰するによく見れば此佛先師の律師なり。一句さづけて云。從我聞法往生極樂云々。平等院僧正行尊は。一條院御孫。侍從宰相子也。母の夢に中堂にまいたりたりけるに。三尺の藥師如來をいただき奉ると見て。いくほどをへずしてくわいにんありけり。すべからく台嶺の法師にてぞ有べかりけれども。流にひかれて寺法師に成給にけり。實相坊大あじやりに随逐して。三部の大法諸尊別行護摩秘法をうけ。秘密灌頂をつたへ給へり。出家の後住寺の間一夜も住房にとまらず。金堂の彌勒を禮拜して四

五更を送けり。十二歳の六月廿日より不動の供養法を勤修せられけり。十七にて修行に出で十八年歸洛せず。其間に大峯の邊かつらぎ其外靈驗の名地ごとくに歩をはこばずと云事なし。かく身命をすて、五十有餘にをよぶ。その行たいてんする事なし。その間に護摩をしゆする事小壇支度物等にあひぐしてあへてだんぜつする事なし。其日數をかぞふれば前後都合八千餘日也。又毎日數百へんのらいはいありけり。本寺の住房にしてはじめて不動の護摩をしゆせられける時。夢中に不動尊の仕者かたちをあらはして見え給けり。たけ三四尺ばかりなる童子の青衣のうへにむらさきなるをぞきたまひ・ける。左の手に劔并に索もち右の手に劔印をなす。壇上よりあゆみきたりて乳上にあたりて種々の事をしめし給ふ中に。やくそくのごとく護摩二千年勤行せらるべき也との給はせければ。僧正承諾せられにけり。其後大みねの神佛に五七日宿したる事ありけり。これまれなる御事也。同行一人もしたがはず。たゞひとり庵室にゐて經をよみ呪をみて、日を送り給ひけるに。陰雲驟雨滂沱庵室のうち河流のごとくして身をいるべき所なし。わづかに岩の上に躡居して存命ほとんどあぶなかりけり。高聲に經をよみ奉る。我不愛身命、但惜無上道の義也。夜ふけて夢ともなくうつゝともなく。容貌美麗なる總角の幼童左右におのゝ一人。僧正のあしをさしげたり。おどろきて幼童をもとむるにはじめて夢としりて感涙をさへ

たまひ、一本此下有たり二字

御、一本元

がたし。いよく本尊を念じてねぶれば又さきのごとく童子見えけり。麗景殿の女御僧正を御猶子にして憐愍の心ざし實子に過たりけり。僧正修行に出られて大みねにをこなはるゝ間。女御日來やまひわづらひ給ひて。存命たのみなくなり給ひけるとき。僧信禪をつかひとして今一度みたてまつらんがためにいそぎ歸洛し給ふべきよし申されけり。草庵の内にたゞ一人經をよみて。かげのごとくにおとろへて其人とも見えず。なみだにおぼれてしばし物もいはれず。あいかまへてかの仰のむね申ければ。僧正われ此行をくはだて、世の中を思ひすて。三寶の加護を頼み奉ればもろもろの怖畏なし。女御の御惱もをのづから除き給はんとて。柑子一つ、みを加持七てまいらせられけり。信禪かへり參てそのよし申されて。くだんの柑子を奉ければ。すなはちちふくせしめ給ひて御惱へいゆし給てけり。大峯に入られける日齋持の糲米白米七升也。其内四升は日來うせにけり。のこる所三升也。筥の岩屋にて疲極の山ぶしをもてなし大りやくのこる物なかりけり。其此の事にやかの岩屋にて。

草の庵なに露けしとおもひけんもらぬ岩やも袖はぬれけり。

又箕面山に三ヶ月こもられる時。夢に龍宮にいたりて如意寶珠をえたり。其間の奇異おほけれどもしるさず。浮ぐものごとくさすらひありき給て。和泉國槇尾山と云所にてかの山の住僧に奉仕せられけり。阿私仙に大王のつかへしがごとし。其時

村邑に産する女ありけり。いのらしめんがためかの住僧を請じけり。僧故障ありてゆかず。たゞしこのころより給仕する下僧有。件の僧をやるべしといひければ。産婦の夫それにもといひければ。すなはち僧正に其よしを申けり。僧正驗者にたへざるよしをしきりに給ひけれ共。あながちにいふ事なればおはしつゝ。しばらく念誦の間に平かに生まれにけり。家によるこびて牛を引たりけり。僧正これをえて彼住僧にたびければ感悦はなはだし。かゝる程に僧正の御姉梅壺女御このおはしますやうをきかせ給て。かの國司藤原のむねもと宗基におほせて。小袖以下の御おくり物有ければ。馬允某御つかひにてかの山に參向しけるに。はからざるに僧正に見あひ奉りにけり。地上にひざまづきておどろきあやしむ事かぎりなし。住僧これを見て貴人のよしをしりて。科を悔ておそれまどへるさまとはり也。僧正身の事しられぬと夜中に行方もしらずうせられにけり。むかし玄賓僧都の伊賀國の都司につかへて侍けるためしにおなじく侍り。

大原良忍上人。生年廿三よりひとへに世間の名利を捨てふかく極樂をねがふ人也。日夜ふだんに稱念していまだ睡眠せず。生年四十六しゆび廿四年にいたりて。夏月日中にたゞ佛力によつて自心にまかせずまどろみたるゆめに。あみだ佛示現云。汝行不可思議也。閻浮提之内。三千界之間。已爲有レ一。是可無双。雖然汝順次往生。

少、原作外、據一本改

滅、一本所感

矣、一本此下有天治元年四月九日十月三十一日、一本旁書云一乘佛子良忍

誠以難有之事也。所以者何。我土一向清淨之堺。大乘善根之國也。以少緣人難生。如汝行業雖經多生。未足往生之業因也。蓋可教速疾往生之法。所謂圓融念佛是也。以一人行爲衆人故。功德廣大。順次往生。已以易果修因。已以融通滅果。盡融通一人令往レ生衆人。阿彌陀如來示現粗如此。委細不遑毛舉レ矣。かくしるしおかれたり。此後あまねくはんじんの間。本帳に入所の人三千二百八十二人。早旦に壯年の僧の青衣きたる出きたりて念佛帳に入べきよしを自稱して。名帳を見てたちまちにかくれぬ。これ夢にもあらざうつゝにもあらず。上人あやしみて則名帳を見るにまさしく其筆跡あり。その字に曰。奉請念佛百反。我是佛法擁護者鞍馬寺毘沙門天王也。爲守護念佛結緣衆所來入也。五百十二人。如此入給へり。又上人天承二年正月四日。くらま寺に通夜して念佛の間。寅のおはりばかりに夢に。天に幻化のとくして。自身と驚覺しての給はく。汝如我身。又梵天王寺護正法。可奉加念佛帳中。我又護汝如影隨形。物冥衆入結衆。諸神又滿云々。夢さめてみれば眼前に其文あり。梵天王部類諸天以下一切諸王諸天九曜廿八宿物三千大千世界乃至微塵數所有一切諸天神祇冥道ひとつもれず各百反入給へり。不思議未曾有の事也。凡勸進帳に入所の人三千二百八十二人の内。日時を注して往生をとげたるもの六十八人也。爰上人同月春秋六十一にて七ヶ日さきだちて死期をしりて。つるに往生のそく

反、一本作遍

て、一本元

ミ、一本元

等、原作東、一本作木、今意改

はひをとげられにけり。入棺の時其身かろきこと如_ニ鵝毛_ニ云々。大原覺嚴律師ゆめに上人つけていはく。我遂_ニ本意_ニ在_ニ上品上生_ニ。偏に融通念佛力也と云々。

少將の聖も大原山の住人なり。三十餘年常行三昧を行せられける間に。毘沙門天王かたちをあらはして上人を守護し給けり。御影像を等身に圖繪していまに勝林院に安置せられたるなり。此上人臨終の時は。勝林院に常行三昧をこなひける時。西方より紫雲げんじて堂の内へ入とみるほどに。肉身ながら見えす。即身成佛の人にや。

往生傳にはかくはなし。委可_レ尋_レ之。

仁平二年七月二日。定信入道宇治左府にまいりたりければ。おと衣冠をたしくして禮拜し給ひけり。一切經をかきて供養をとげたる人なり。佛に同とて拜せらるるとぞ。かの日記には侍る。

攝津國清澄寺といふ山寺あり。村人きよし寺とぞ申侍る。其寺に慈心坊尊惠と云老僧有けり。本は叡山の學徒也けり。多年法花の持者也。住山をいとひて道心をこして此所に来りて年をおくりければ。人皆歸依しけり。承安二年七月十六日。脇足によりて法花經をよみ奉ける程に。夢ともなくうつゝともなくて。白張に立烏帽子きたる男のわら沓はきたるが堅文を持って來れり。尊惠あれはいつくよりの人ぞと問ければ。えんま王宮よりの御つかひ也。うけぶみ候とぞ立文を尊惠にとらせければ。披見

より、一本此下有_レり三字

るに。

願請

●閻浮提大日本國攝津國清澄寺尊惠慈心坊。

右來十八日於_ニ焰魔廳_ニ以_ニ十萬人_ニ之持經者_ニ可_レ被_レ轉_ニ讀_ニ十萬部法花經_ニ。宜_レ被_ニ參勤_ニ者。依_ニ閻王宣_ニ願請如_レ件と書れたりけり。尊惠いなみ申べき事ならねば。領狀の請文書て奉ると見て覺にけり。例時の程になりければ寺へ出ぬ。例時はて、僧ども出けるに。老僧一兩人に此夢の告をかたりければ。むかしもかゝるためしいひ傳へたり。その用意あるべしといひければ。房に歸りてつとめいよくをこたらず。寺僧等きおひ來てとぶらひけり。十八日の中のおはりばかりに。たゞ今心地少ししいにたがひて世中も心ぼそくおぼゆるとて打ふしけるが。酉の刻計に息たへにけり。扱次の日辰のおはり程にいきかへりて。若持_ニ法花經_ニ其心甚清淨の偈を四五くだりが程誦しけり。其後おきわがりて冥途の事共語る。王宮にめされて十萬人の僧につらなりて。法花經轉讀十萬部おはりて。法王尊惠をめしてしとねをまふけてすへらる。王は母屋の御簾の中におはしまして。尊惠あらはに冥官共は大床につらなり居たり。さまざまの物語し給ひしに。攝津國に往生の地五ヶ所あり。清澄寺その内也。汝順次の往生うたがふ事なかれ。太政入道清盛は慈惠僧正の化身也。敬禮慈惠大僧正

字、此上恐脫南

王、一本作皇

天台佛法擁護者。かくとなへ給て。すみやかに本國にかへりて往生の業をはげますべしとてかへされけりとかたりけり。きく人たうとみめてたがる事かぎりなし。其後一兩年をへて又法花轉讀のためめされたりけり。そのうち一兩年有てめてたく往生をとげたりけり。

西行法師大みねをとをらんとおもふ心ざしふかゝりけれども。入道の身にてはつねならぬ事なれば。おもひわづらひてすぎ侍けるに。宗南坊僧都行宗その事をきいて。何かくるしからんけちえんのためにはさのみこそあれといひければ。よろこびて思ひ立けり。かやうに候非人の山ぶしの。禮法たしうてとをり候はんとはすべてかなふべからず。たゞ何事をもめんじ給ふべきならば御供仕らんといひければ。宗南坊その事はみなぞんじ侍り。人によるべき事也。うたがひあるべからずといひければ。悦てすてに具して入けり。宗南房さしもよくやくそくしつる旨を皆そむきて。ことに禮法をきびしくしてせめさいなみて。人よりもとにいさめければ。西行涙をながして。我はもとより名聞をこのまじ利養を思はず。たゞけちえんのためにとこそ思つる事を。かゝる憍慢の識にて侍けるをしらて。身をくるしめ心をくだく事こそくやしけれとて。さめぐとなきけるを。宗南坊聞て西行をよびて云けるは。上人道心堅固にして難行苦行し給ふ事は。世もつてしれり人もつてゆるせり。其やんごと

是事、一本作茶、或

なきにこそ此事をばゆるし奉れ。先達の命に隨て身をくるしめて木をこり水をくみ。あるひは勘發カンハツのことばを聞或は枝木をかうぶる。是即地獄の苦をつくのふ也。日食すこしきにしてうへしのびがたきは餓鬼のかなしみをむくふ也。又おもき荷をかけてさかしきみねをこえ。深きたにをわくるは畜生のむくひをはたす也。かくひねもすに夜もすがら身をしぼりて。あかづき懺法をよみて罪障を消除するは。已に三惡道の苦患をはたして。早く無垢無惱の寶土にうつる心也。上人出離生死の思ありといへ共。この心をわきまへずしてみだりがはしく名聞利養の識也といへる事。はなはだおろかなりとはぢしめければ。西行たな心を合て隨喜の涙をながしけり。まことに愚癡にして此心をしらざりけりとてとがをくひてしりぞきぬ。其後はことにをきてすくよかにかひく敷ぞふるまひける。もとより身はしたゝかなれば人よりもこととにぞつかへける。此言葉を歸依して又後もとをりたりけるとぞ。大みね二度の行者也。

永萬元年六月八日とらのとき。蓮花王院の兵士がゆめに。うしろ戸のひつじさるのすみより北へ第四のまに。以ての外くろき山有けり。ふもとに承仕ありけるが。伴の山のみねよりやんとなき老僧出ていはく。抑此水をば何の料にほるぞと尋侍りければ。くだんの承仕こたへていはく。本より堀はしめてし水を堀といめさせ給ひて

歸依、原作きふ
く據一本改

制止給べきやう候はず。又かの僧の云。申所尤いはれたり。水の末をばながさんずる
 ぞとてほそき谷川をほりながしければ。水きはめてほそく落けるを。此水はほそく
 見ゆれども。八功德水甘露・利益方便水にてあらんずるぞ。よくく精進してくむ
 べき也といふと見て夢さめにけり。去ほどにくだんのうしろ戸のみぎりの下にうつ
 くに水有。貴賤くみけれ共つきざりけり。又くまざるるときもあまらずふしぎ成事也。
 當時其水見えす。いつ比よりうせにけるかおぼつかなし。

甘露、一本此下
 有含識二字○
 水據一本補

承安二年三月十五日。六波羅太政入道福原にて持經者千僧にて法花經を轉讀する事
 ありけり。件の經以下御布施まで諸院宮上達部殿上人北面迄も。藏人右少弁ちかむ
 ねが奉行にてすゝめけり。法皇御幸成て其一口にいらせおはしましけり。法印三人
 が御行道ありけり。諸國の土民結縁のために。あるひは針或は餅四五枚など引けり。
 法皇もうけさせ給けり。はまにかりやをつくりて道場にせられけり。佛は一千體ぞ
 おはしましける。又四十八壇の阿彌陀護摩も有けり。法皇も其中にくはらせ給け
 り。十七日迄三ケ日にぞ轉讀し奉りける。導師法印公顯勸賞に僧正になされにけり。
 公顯僧正上洛の後。師匠の法印公舜弟子にこえられながら。よろこびのためきた
 られぬ。公顯申されけるは。まづなしまいらせてこそ罷成べきに。内外について其お
 それ侍り。さりながらかみならせ給はば僧正の上にもまつらん事おどろくべきにあ

けり、一本此上
 有たり二字

らず。法印として僧正のてしもちて上にゐたらんこそ希代の事にて侍らめとしら
 へけり。法印歸る時庭中迄出ければ。僧正なくく謝せられけるとぞ。

高倉院の御時炎旱年をわたりけるに。承安四年内裏の宸勝講澄憲法印御願旨趣啓白
 のついでに。龍神に祈り申てたちまちに雨をふらして。たうざにその賞をかうぶり
 て權大僧都にあがりて。上臈權少僧都覺長が座上につきけり。其時の美談此事にあ
 りけり。俊惠法師よろこびつかはすとてよみける。

雲の上にはひくをきけば君が名の雨とふりぬるおとにぞありける。
 解脱房遁世の後。壺坂の僧正のもとに湯治のためしにのびて。湯の刻限をまち候は
 ば。或人の部屋に立かくれてゐたりけるに。法文宗義を談しけるに。解脱房忍びてお
 はするといひければ。すなはち此義をとひたりければ。返事に。

いにしへはふみ見しかどもしら雲のふかき道にはあともおぼえず
 かくよみてこたへたりけり。

鎌くらの右大將上らくの時天王寺へ參られたりける。其時は鳥羽宮別當にてなんお
 はしける。御對面有けるに幕下申されけるは。よりともが一期にふしぎ一度候き。善
 光寺のほとけ禮し奉る事二度なり。その内はじめは定印にておはしましき。次のた
 びは來迎のいんにておはしまし候。すべて此ほとけむかしより。印相さだまりたま

禮、一本作拜

はぬよしつたへてさむらへども。まさしく證を見たてまつりてさむらひしと申されけり。かの幕下はたゞびとにはあらざりけるとぞ宮仰せられける。

源空上人は一向專修の人なり。たゞ人にはおはせざりけり。彌陀如來の化身とも申。勢至菩薩の垂跡とも申すとぞ。其證あきらかなり。諸宗の奥旨さぐりきはめずといふ事なし。暗夜に經論を見給て燈明なけれども。光明家内をこらす事書のとし。久安六年生年十八にしてはじめて黒谷の上人の禪室に入て。難解難入の文を聞て易往易行の道におもむく。まのあたり宮殿宮樹を見化佛化井をげんじ奉る。元久二年四月一日月の輪殿へさんじて退出の時。南庭をとをりけるに頭光げんじたりければ。禪閣地におりて恭敬らい拜し給ひけり。建曆三年正月廿五日遷化。春秋八十。往生の瑞相一にあらざ。いまだ墓所を點せざるに。兩三人の夢に。其所にあたりて天童行道し蓮花開敷けり。三四年よりこのかた。老病身にまといて耳目蒙昧なりけるが。往生の期ちかづきては。ことに目も見え耳もきかれにけり。みづから上品極樂は我本國也。定てつるに往生すべし。觀音勢至の聖衆來現して眼前におはします。我往生はもろくの衆生のため也との給て。廿四日の酉のときより。高聲念佛體をせめて聞なし。廿五日平正に光明遍照の四句の文をとなへて慈覺大師の九條の袈裟をちやくして。頭北面西にしてねぶるかごとくにしてをはり給にけり。念佛音聲といまりて後もなを唇

等至、一本此下有
字、原作程、今從
林一本
正一本作生、或
當作旦

云、一本作旦

舌をうごかせる事十余反ばかり也。順次の往生うたがひなきもの也。

三井寺の公胤僧正。結縁のために四十九日の導師を望みて兩界曼陀羅并に阿彌陀の像を供養してけり。其後五ヶ年を経て。建保四年四月廿六日の夜僧正の夢に見侍りける。上人告云。

往生之業中。 一日六時利。 一心不亂念。 功德最第一。

六時稱名者。 往生必決定。 雜善不決定。 高修定善業。

源空物孝養。 公胤能說法。 感喜不可盡。 臨終先迎攝。

源空本地身。 大勢至菩薩。 衆生爲化故。 來此界度者。

かく示してさり給ひにけり。勢至菩薩の化身といふ事これより符合する所なり。

高弁上人おさなくては北院御室に候はれけり。文學坊まいりてその小わらはを見。此兒はたゞ人にあらずとさうして。まけて此ち文學に給はりて弟子にし侍らんと申て取てけり。法師になりて高雄に住せけるに。かくもんに心を入てあからさまにも他事もせざりけり。文學坊高雄をつくるとて。番匠をせさせてひしめきけると。高弁上人うるさき事に思ひて。聖教のもたるゝかぎりいだき持て山のおくへ入て。人もかよはぬ所にてたゞ一人見られけり。晝つがた番匠が食物を營みすへたる時。山の中よりはしりくだりて。其食七八人が分をやすゝととり喰て。又あらぬ聖

北、一本作喜多

教をもちて歸入ぬ。さて山中に二三日も居て出られず。かくする事二三日に一度かならず有けり。文學坊此事を聞てたゞ人のふるまひに非ず權者の所爲也とぞいひける。此上人暗夜に聖教を見給けり。大神チホカノミコトカミ基賢が子に光音といふ僧かの上人の弟子にて侍けり。年來給仕して侍けるがあたりけるは。さしもくらき夜火もともさずして聖教を見給とて。弟子どもに志かゞの所に有文取て給へといはれければ。くらまぎれにさぐりて來を見て。此文にはあらず志かゞの文などの給けるふしぎなりし事也。かた夕暮に光音をよびて。山寺のたゞ今程はよに心のすむもの也。いざ給へ月見にとて房を出て。清瀧川のはたをかみへ廿餘町計。山をわけ入給て大成石有。それのぼりて。此いしはいかにもやうある石也。伽藍などのたちけるいしずへにもやありけん。此石などやらんなづかしきなりとて。ふくるまでこゝろをすまして。さまゞの物語しつゝ座せられけり。寒くおはすらんとて。その石のいつくに有べしとも覺えぬに。圓座一枚を取出して光音に志かせられける。ふしぎにめづらかなる事也。彼石をば定心石とぞ名付られける。もろこしの悟真寺の石に摸せられけるにこそ。又繩床樹といふ松有。その松座禪にたよりありけり。正月の比松のもとに居てくはんねんせられけるに。あられのふりければ。

その、一、本作し

岩のうへ松のこかげにすみ染の袖のあられやかけしその玉。

廿、一本作卅

むれ、一本作染、下同

既、原作脱、據一本改、下同

釋尊の御遺跡おがみ奉らんとて。弟子十餘人をあいぐして天竺へわたり侍らんと思はれける比。春日大明神にいとま申さんとてかの御やしるへ參られけるに。鹿六十頭ひさをおりて地にふして上人をうやまひけり。其後生所紀伊國湯淺郡へむかはれたりけるに。上人の伯母之ける女房に付て春日大明神御詫宣有けるは。我佛法を守護せんがために此國に跡をたれり。上人我國をすていづくへかゆかんとするとの給ければ。上人申給ひけるは。此事信せられず。まことならばそのしるしをしめし給ふべしと申給へば。汝われをうたがふ事なかれ。我此山に來りし時六十頭の鹿ひさをおりてうやまひしは。我汝がうへに六尺あがりてかけりはなれざりしゆへに。われをうやまひしによりて。上人に向てひさを折し也。上人又申やう。それはまことにさるべき也。去ながら猶うたがひあり。すみやかに凡夫の振舞にはなれたらん事を示し給へと申されければ。この女房とびあがりて萱屋のむねに尻をかけて座せり。其顔の色瑠璃のとくに青くすき通。口より白き泡をたらす。その泡かうばしき事かざりなし。その時上人信仰して誠に此やうふかしき事。年比華嚴經の中にふしんおほかり。悉く解説し給へと申されければ。御領狀有けり。上人すゞりかみをとりに出して所々を書いてとひまいらするに。一々にあきらかに解説し給。上人涕泣隨喜して渡海の事も思ひとまり給けり。かの白泡のかうばしき事。他郷まで匂ひければ。人

所、一本引處

殿、原作天、據下文及一本改
一塵として、據一本補

あやしみつゝきほひあつまりて。拜みたうとぶ事かぎりなかりけり。三ヶ日迄をり給はてむねの上に御座有ける。嚴重ふしぎなりける事也。上人寛喜四年正月十九日入滅の時。手あらし袈裟かけ念珠とりて毘盧舍那五聖に向ひ奉て。宴座してみづからの頭上にして光明真言并五字陀羅尼左布字觀有けり。其後高聲に。所於第四兜率天四十九重摩尼殿晝夜恒説不退行無數方便度人天と唱て種々の述懐どもありけり。一切法門その大意を得て。玉鏡をかけて一念の疑滞なし。聖教を燈明として一塵として穢たる事なし。我名聞にまじはらず利養を事とせず。此身をもて一切の衆生を度して。しかしながら四十九重摩尼殿の御前へ参り侍らんずる也。必ず我を攝取せしめ給へとて。雙眼よりなみだをながして又高聲に云。此は大慈清淨智。利養母間慈氏尊。灌頂地中佛長子。隨順思惟入佛境と誦して。南無彌勒菩薩と兩三反となへて手をあげて信仰の念佛をすゝめらる。弟子三人は寶號をとらふ。不動尊左脇にげんじ給ひけるゆへに一人をして慈救呪を誦せしめけり。又五字文珠呪を誦せしむ。かくのごとく諸僧寶號をとらへ神呪を誦する間に。現供養の作法をもつて行法ありけり。行法をはりてとなへていはく。

我昔所造諸惡業。

皆山無始貪瞋癡。

從身諸意之所生。

一切我今皆懺悔。

諸、一本作語

と誦し終りて定印に住して入觀あり。やゝ久くして右脇にしてふし給ひぬ。入滅の儀端座右脇の二の様有。われ尺尊御入滅の義にまかせて。右脇にして滅をとるへし。今はかきおこすべからずとの給ひて。南無彌勒并となへて。巳の刻にねぶるがごとくにて終り給ひにけり。異香室にみち。すべて種々の奇瑞等つぶさにしるすにいとまわらず。

越後の僧正親嚴。わかゝりける時たび々大みねを通りけるに。年頃もち來りたりける小字の法花經を。香精童子其かたちはみえ給はて。聲ばかりしてしりさきにつきてこひ給けり。様あるらんと思ひて奉りにけり。そのうち日にしたがひて名譽ありて。東寺一の長者法務大僧正御持僧牛車宣旨まできはめられたりし。たうとかりし事也。

後鳥羽院聖覺法印參上したりけるに。近來專修のともがら一念多念とてわけてあらそふなるは。いづれか正とすべきと御たづねありければ。行をば多念にとり。信をば一念にとるべき也とぞ申侍ける。

南都高天寺にすむ僧ありけり。長谷へ參て通夜してさぶらひけるに。常よりも人おほく参りて侍けるに。此僧あかつき下向せんとまけるに。たれともあらぬ俗來りて珠を持って僧にさづけていひけるは。この珠准后へまいらせて給はるべしとてすなは

天、一本作問、同
一本與此同

ちさりにけり。珠の色むらさきにて其勢たちはなの程なりけり。かのをしへのごとく准后へもて参て奉りにけり。其まへの夜准后の御夢に長谷の観音より寶珠を給はらせ給ふと御覽せられけるを。御心の中ばかりにおぼしめして仰出さるゝ事なかりけるに。其後朝に此珠をもちて参りたりけるふしぎなる事也。件の珠醍醐の僧正實賢あづかり給はりて。たびく寶珠法おこなはれけるとなん。

神祇權少副大中臣親守。年來大般若一筆書寫の心ざしありけれども。むなしくてやみにけり。常のことぐさに。此願を心にかけて。一日に二枚計づゝ書奉る共十余年にしてなん。口おしくも思ひたらぬかなといひけるを。前權大副同長家聞て。たちまちに智發して此願を思ひ立て。終に一筆書寫の功を終てけり。供養の後隨喜のあまりに親守がもとに行ていひけるは。此事はもと我思よりたるにあらず。仰せられしむねをきしてをのづから發願して大功をなしたる。まかしながら御恩也。かつは其事謝せんがためにことさらまうできたるなりといひて對面したるをみれば。ちいさき鬼三人長家にまたがひて有。そのたけあか子ばかりなりけり。縁をのぼりける時は三人庭にひざまづきて畏りけり。頓て二人はまたがひてうへのぼりて有。一人は下に有。皆長家を守護するさま也。かやうの事は夢などにこそ見る事もあれ。まさしくうつしに見たる事はふしぎの事也。大般若書寫によりて十六善神の立そひて加護

終、原作へ、據一本改

發願、原作おこ、今從一本

十日、一本作十四日

し給けるにや。たうとくめでたき事也。かの親守は五部大乘經自筆に書奉たるもの也。まさしく正直のものにてながく虚言などせざりしもの也。かゝるふしぎこそありしかと親守かたりしをきいてゑるし侍る也。

使廳のけちえん經は。長保元年三月十日はじめておこなひて。其後年とにをこなはれけるが。絶て久しく成にけるを。建久年中別當兼光卿かたのごとくおこなひけり。其後建保六年五月廿日別當顯俊卿雲林院にておこなひたりけり。左の佐經兼いげ着座あたりけり。此度はじめて前右大臣公繼を始て別當經たる人々に法花經并に涅槃經一卷づゝけちえんせさせられたりけり。其外別當のさたにてもみづから書れたりけり。開結の二經は左佐經兼右佐頼資けちえんし侍りけり。尉いげは尊勝陀羅尼をぞ奉ける。みな捧物をぐしけり。寶治六年五月廿八日別當定嗣卿靈山の堂にて又行れしは。建保の例をうつされけり。ふるきためしの有けるとかやとて。ゆるしものなん侍りけり。又金光明經をも別當のさたにてそへられけり。今度法花經品々をば詩につくらせ。金光明經の品々をば哥によませられけり。

爰かして修行する僧有けり。名をば生智といふ。度々渡唐したりけるもの也。建長元年の比渡唐しけるに。悪風にあひて已に船くだけんとかければ。ことうといふ小船に乗うつりにけり。ふねせばくして百餘人ぞ乗たりける。残りのともがらはもとの

と、一本作た、下同

死、一本此上有
うへて三字○
巖、原作岡、據一
本改

波ぎし、一本作
彼岸

櫻、一本作梅、似
是

船に残りて有ける。心の内をしはかるべし。ことうに乗て十餘日有けるに。水つきて
既に・死なんと云ける時。行術坊巖淨といふ上人の乗たりけるが云やう。各同じ心に
観音經を卅三卷よみ奉るへし。我も祈請しこゝろみるべしとて。左の手の小指に燈
心をまとひておぶらをぬりて。火をともして燈明として同しく經をよみけり。卅三
卷のおはり程に成て。南のかたより淡のどく成もの。海のおもてに一段ばかりまら
みわたりて見えけるが。此舟のもとへ流れくるあり。あやしと思ひて杓をおろして
くみてみれば。少も鹽の氣もなき水のめでたきにて有けり。人々是をくみのみて命
いきにけり。是件の観音の利生方便也。世の末といひながら。大聖の方便ふかしぎの
事也。大舟にすてのせられたりけるもの共すてにかぎりなりけるに。いづくより共
まらぬ小船出來て。此ともがらをうつしのせて。ことゆへなく波ぎしへつけてけり。
是もくわんちんの御たすけ有けるにや。
湛空上人嵯峨の二尊院にて涅槃會をおこなはれける時。人々五十二種の供物をそな
へけるに。花をうへにたてゝ哥をよみて付けるに。西音法師水瓶に櫻を立ておく
るとよみける。
きさらぎの中のいつかの夜半の月入にしあとのやみぞかなしき。
返し湛空上人。

如、一本作妙○
王、據一本補

關路をばみだのひかりにまかせつゝ春のなかばの月はいりにき。
又一首をそへられける。
會をてらす光のもとをたづぬれば勢至ぼさつのいたゞきのかめ。
いつ比の事にか書寫上人みづから如法如説に法花經かき給けるに。炎魔王宮より
官をもて中あくりけるは。自業自得果の衆生の業をむくはんがためにみな我所にき
たる。そのむくひいまたつくさるるに。上人の寫經のあひだ。罪報の衆生みな人中天
上にむまれ或は淨刹にまうづる間。罪惡の地悉く荒廢せり。ねがはくは上人經を書
給ふ事なかれとうたへ申たりければ。上人の給けるは。此事わか進退にあらず。はや
く釋迦如來に申さるべしとぞこたへ給ひける。

古今著聞集卷第二終

(一本奥書云)
此一段以竹園御本追而書加之了
定昭僧都次性
信親王上有之

古今著聞集卷第三

政道忠臣第三

延喜以下、一本
爲別行、宜從

治世之政。萬法靡然。是則君以仁使臣。臣以忠奉君。君者愛國臣者忘家。君臣合體上下和睦者也。延喜聖主位に即せおけしまして後。本院右大臣菅家定國朝臣季長朝臣長谷雄朝臣此五人其心をしれり。顧問にもそなはりぬべしとて寛平法皇注申させ給ひける。かくおぼしめしとらせ給ひけるやんごとなき事也。神泉苑正殿を乾臨閣となづけて。近衛次將を別當になして。天子つねに遊覽有て。風月の興管絃の遊有けり。又宴飲も待けるを。延喜御時天神の臣下にておはしましける時。いさめ奉られければとまりにけり。寛平の遺訓にも。春風秋月若無實事。幸神泉北野。且翫風月。且調文武。不可一年再幸。又大熱大寒慎之と侍り。村上御時南殿出御ありけるに。諸司の下部の年九けたるが。南階の邊に候けるをめて。當時の政道をば世にはいかし申すと御尋有ければ。目山度候とこそ申候へ。但主殿寮に松明多入候。率分堂に草候と奏たりければ。御門大きにはち思召てけり。させる公事の日にはあらざりけるにや。松明のいると中は公事の夜に入山にて侍り。率分堂に草のしげれるとは諸國のみつぎ物の參らぬ由成べし。いみじく申たりけるもの也。

昔は人の装束もなへくとしてぞ有ける。されば齋院の大納言の消息に。先代之時節會袍借献など書れたんなるは。節會の袍とてほのくとある物の入にかすなどが

院、一本作信、
或是

左、當據上下文
作右
の一本无

だに、據一本補

有けるとぞ。

後朱雀院の御時旬に參たりける上達部を御覽じて。次日資房卿の藏人頭也けるを召て。昨日公卿の装束を御覽せしかば以外に袖大に成にけり。かくては世のついでなるべし。いかせんずると右大臣實資。のもとへいひあはすべしとみことりの有ければ。則申されければ。おとし申給けるは。みな公卿に此よしを承りて畏り申さば。さすがに左大臣御氣しきかうぶりたりと聞えは。人もなをり侍なんとはからひ申されければ。そのさだめに披露有て。右府閉門して畏のよしをせられければ。人みな聞おそれて装束の寸法すへられけり。

小野宮殿九條殿御同車にて出仕させ給ける時。御車のしりに公卿一兩人などはのせらるゝありもありけり。又閑院の大將小一條大將左右大將にて同車してあそばされけり。此比は父子同車の事だににもまれ也。

寛元二年賀茂臨時祭の時。二條前殿關白。一條前殿左大臣にてまいりあひ給ひたりしに。暮て事はてにしかば御同車にて二條室町にたてられて御見物ありけり。其後法成寺の御入講に參らせ給ひけり。左府の御車をむなぐるまにて法成寺へやらせられけり。道の程關白の御隨身は御車のさき。左府の御隨身は御車の後にぞ打たりける。前驅はあひまじはりたりけり。興有事にぞ世の人申侍し。

後三條院御時。隆方が權左中弁にて侍りけるを越て實政を左中弁になされにけり。あしたに隆方陪膳つとめて候ければ。御膳にもえつかせおはしまさいりけり。はぢさせ給ひけるにこそ。

同院律令式格にたがはずと宣命にかへさせ給はせけるを。資仲卿これより後をこそ中させたまはめ。前にすてにたがひたる事共をば。いかてかかくは申させ給ぞと制しまいらせけるに。程なくうせさせおはしましにければ。その宣命のゆへにやとぞ人申ける。爲輔中納言口傳にかゝれて侍なるは。人は屏風のやうなるべき也。屏風はうるはしうひきのべつればたふるゝなり。ひだをとりてたつればたふるゝ事なし。人のあまりにうるはしくなりぬればえたまたず。屏風のやうにひだあるやうなれど實にうるはしきがたもつなりと侍るとかや。

匡房中納言は太宰權帥になりて任に赴かれたりけるに。道理にてとりたる物をは舟壹艘につみ。非道にて取たる物をは又一艘につみてのぼられけるに。道理の舟は入海してけり。非道の舟は平かにつきければ。江帥いはれけるは。世は早く末になりたり。人いたく正直なるまじき也とぞ侍ける。それを悟らんが爲にかくつみてのぼられけるにや。むかし中比だにかやうに侍けり。末代よくく用心あるべきと也。

寛治八年十月廿四日亥時計に内裏焼亡有けり。中御門右府右中弁にて侍けるが宿侍

けり、一本元

せられたりけり。いそぎ御前へ参りて御劍匣の箱は候やらんとたづねまいらせければ。みづからもちたるぞと勅答ありけり。其外の寶物どもをも一々にたづねまいらせて分明の勅答を承けり。事急になりて腰輿すてに南殿によせられたるほどになりける中に。心はやく一々に分明に申けるいみじかりける事也。

徳大寺左府。中院右府を越て右大將に成給ひにけり。保延五年十二月十六日實能任。右大將。同年十一月二日内大臣辭。左大將。十二月七日雅定任。左大將。宇治左府内大臣左大將にておはしけるが。中院右府のれうに左大將を辭申されたりけるに。崇徳院徳大寺左府を左に轉せさせんとおしめしてしばらくおさへられけり。中院右府の事をば鳥羽院しきりに執申させ給けれ共猶事ゆかさりければ。保延六年十一月廿五日に院近衛烏丸の陣口に御幸なりて。仰下さるゝ山を承て罷歸べきよしを申させ給ければ。ちからちよばせ給はて其夜召仰有けり。やんごとなかりける事也。

光方廷尉佐にて着駄政につきたりけるに。雨の降たりけるに扇をさし。けり。晴日夕陽にむかひてこそさす事にて侍るに。思ひわかざりけるにや。父大納言見物しけるが。かへりて光方が辭狀をかきて奉りけり。前途有まじき也とぞいはれける。はたしてとくうせにけり。

治承四年六月二日福原にみやこうつり有けるに。同十三日帥の大納言隆季卿新都に

駄、當作鈔〇さし、一本旁書云かさし駄、此下同、本有たり二字

うつり、原作かへり、據一本改

て、一本作たり
○たれ、一本作
けられ

也、一本元
世、一本作廿、同
本與此同

て夢に見侍りけるは。大なる屋のすきたるうちに。我るたるひさしのかたに女房あり。ついがきのとに頻になく聲あり。あやしみて問に女房の云やう。これこそみやこうつりよ。太神宮のうけさせ給はぬ事にて候ぞといひけり。すなはち驚ぬ。又ねたりける夢に同じやうに見てけり。おそれおのゝきて次日の朝院に参じて前大納言邦綱別當時忠卿などに語てけり。太政入道傳へ聞かれたれ共いと承引なかりけり。去程に同人の夢に還御ありと邦綱卿長絹の狩衣きて新院の御供に候ふ。頭亮重衡朝臣よろひきて御供に候と見てさめぬ。乍去一日の夢用ゐられねば申出ざりけり。十一月廿六日平の京に還御有けるは彼夢にはよらざりけり。山僧のうたへ又東國の亂などの故とぞ聞え侍ける。治承四年秋の頃より。伊豆國の流人前右兵衛佐頼朝謀叛の聞え有けり。追討使少將惟盛朝臣。薩摩守忠度。參河守知度等下されたりけれども。源家の兵次第に數添ければ。追討使等皆道より歸にけり。かゝる程に世中靜ならざりければ。十一月卅日新院の殿上にて東國謀叛の事評議有けり。中御門左大臣(源朝)。頭左大將(源朝)。帥大納言(源朝)。新大納言(源朝)。春宮大夫(源朝)。左大辨(源朝)。參られたりけり。頭辨經房朝臣論言の旨を仰けるに。左大辨發言して申けるは。偏に可被行徳政。漢高被掠六國。承平年中。有將門謀叛。和漢雖存。先蹤。於今度者。四ヶ月。中十餘國皆反。當時之政。若不叶天意。歟。以之思之。法皇四代帝王父祖也。無故不知。食

同、據一本補

天下。如元可。聞食政務一歟。又入道關白被浴歸朝之恩。者可爲攘災之基。哉と申たりけるを。諸卿聞て皆色をうしなはれけり。他入は只徳政を行はるべきおもむきをぞ申されける。彼兩事には同せられざりけり。法皇去年の冬より政に御口入もなく。殿下ゆへなくながされさせ給ひし事は。しかしながら平太政入道の張行にて侍りけるに。左大辨おそるゝ所なくさだめ申されけるありがたき事也。入道もさすが道理をばはぢ思はれけるにや。其後程なく十二月八日より法皇の御事もなだめ申。同十六日入道殿下もびせんの國より歸洛させ給けり。

公事第四

正朔の節會より除夜の追儺にいたるまで。公事の禮一にあらざ。おこなひきたる儀まぢくにわかれたり。凡恒例臨時の大小事。西宮記北山抄をもて其龜鏡に備へたり。小野宮九條殿の兩流口傳故實そのかはりめおほく侍とかや。有職の家に習ひ傳へて今は絶る事なし。いみじき事なり。宇治殿侍従にならせ給ひて後。能通臨時祭の舞人を辭たりける時。其かはりに宇治殿いらせ給にけり。祭同車にのりて見物まけるを。人長兼時能通を見て。かれはこゝろある人の見物せらるゝかといひたりける。いみじくぞ侍りける。

一條院御時。束帯にて殿上の日給にはあふべきよし起請有けるに。堀川右大臣殿上

同、一本作日、同
本與此同

人にておはしけるが。片足に鞆をはきて身をば殿上のまへの立部にかくして。鞆はきたる片足ばかりを指出て。藏人に見せられたりければ。かやうの事嘲哂に似りて起請やぶられにけり。

萬壽二年蹈哥節會に。右大臣内弁にて陣に付て宣命見參を見給ける間入御有けるに。三位中將師房卿をおきながら大納言齊信卿警蹕をせられければ。人々あやしみにあへりけり。權大納言行成卿その失錯しつごを扇にゑるして臥内にうちおかれたり。曆にゑるさん爲に先扇には書たりけるにや。其子息少將隆國朝臣參りあひて。我扇に取かへて見られければ此失禮を記したりける。それよりやがて披露有けるを。齊信卿ふかくうらみにけり。もとよりよろしからざる中なりければ。かゝりけるとぞ世の人いひける。

宇治大納言隆國卿中將になりたりける年。臨時の祭陪従つかうまつるべきよし催されければ。腹だちて裝束うけとらず。衣ひきかつぎて直廬にふされたりけるに。宇治殿公武をもちて御馬をたまはせたりければ。あきあがりてしやうぞくきつとめられ侍けり。

いづれの年にか白馬節會に進士判官藤原經仲參りたりけるに。雜犯たすべき物なかりければ。ちからあよばて檢非違使ども退出せんとしけるに。なにがし僧正とか

失錯、原作失借、
據一本改○た
り、一本此下有
けり二字

りけ、據一本補

祭、據一本補

かき、原作る、據
一本改

手、原作斗、據一
本改

また、一本作い
また、一本作内
外、一本作内

り、一本作る

やの見沓をはきながら木のまたにのぼりて見物しけるを。經仲が下部をもてめしとりてたゞしける詞に。長大垂髪にて皮の沓をはき。たかき木にのぼりて宮闕をうかがふ。一身をもつて師のをかしをなせるしかるべしや。いかんと勘問したりける。時にのぞみていみじかりけり。殿感ありて女房の衣をたまはせけりとなん。

寛治八年正月二日殿の臨時客有けるに。左大臣左大將(源)。右大臣(源)。内大臣(源)參りたり。事はて、各御馬ひかれければ三公地に下て拜し給ひけり。殿下左府隨身府生下毛野敦久。右府前駈參河權守盛雅を南階の前に召て御衣をぬきてたまはせけり。内大臣中納言中將左右よりすゝみより給て。くれなるのうちあこめ御ひとへおくり出されけり。中納言中將つたへとりて。御單物をば敦久に給ひ。打衣をば盛雅に給ける。先規あれども時にのぞみて面目ゆゝしくぞ侍ける。次に中宮御方臨時客に人々參り給けり。催馬樂朗詠などはて。散手新鞋鞆其駒などにおよひける。淵醉の興ためしなくや侍らん。

久安三年十一月廿日豊明節會。内大臣(源)内辨をつとめ給ひけるに。また膝突をしかぬに無_ニ左右_一大外記めされけり。左近將曹大名久季まづひざづきをしきてめしたりけり。稱美する事かぎりなし。後におと久季をめして感じ給ひけるとなん。

仁平元年正月一日院拜禮有けり。八條太政大臣七十二にてたち給ひたりけり。一た

ら、原作拜、今従一本

び拜してふたゝびちし給ひけり。此事禮記に見えたるとかや。同二年にも又かくぞ有ける。

天永以下五十六字、恐當接于前章○、疑、一本、仁平二年云々、恐當爲別行

天永四年正月一日御元服。理髮堀河左大臣の一蹉再致し給ひけるためしにや。寶治元年院拜禮に。後久我大相國(輝)もかくし給たりけり。仁平二年五月十七日最勝講行はれけるに。中山内府藏人左衛門佐にて奉行せられけるに。廿一日結願日左大臣まゝいり給ひて。御装束をみさせ給ひけるに。九條大相國大納言にておはしけり。資信中納言の左大辨とて参られたりけるが。講談師座のたてやう例にたがひたるよし申されけるにつきて。左府奉行の職事に仰られてなをされにけり。左府後に日記を見させ給ひけるに。本の御装束たがはざりければ。僻説にてなをされつる事をくいたまひて。怠状を書て職事のもとにつかはしける。正直なりける事かな。

人、披一本補

内宴は弘仁年中にはじまりたりけるが。長元より後たえておこなはれず。保元三年正月廿一日におこしおこなはるべき由きた有ける程に。其日は雨ふりて廿二日におこなはれけり。次第の事共ふるきわとを尋ておこなはれけり。法性寺殿開白にておはしましけるをはじめて。人々おほく参りあひたりけるに。前太政大臣は必ず詩を可奉人にておはしけり。太政大臣は管絃の座に必候べき人にておはしけるに。座敷うちなかりければいかゞ有べきとかねてきた有けるに。太政大臣しもとつくべき

周、一本作用○詩、一本作侍

日、原作目、披一本改

よし進み申されけれども。殿下ゆるし給はざりけり。つゝに前太政大臣まづ参て詩を奉る。披講はてゝいで給ひて後太政大臣かはりて座につき給ひけり。有がたかるへき事也。御遊の所作人。太政大臣(輝)等。左大臣(伊)柏子。内大臣(公)ふへ。按察使重通琵琶。左京大夫隆季朝臣。上總介重家朝臣。宮内卿資賢朝臣和琴。前備後守季兼筆築。主上御付哥有けり。有がたきためし成べし。呂安名尊。二反。席田。二反。賀殿急。美作。二反。律伊勢海。萬歳樂。青柳。五常樂。更衣。これらをぞ奏せられける。抑大監物周光は近き比の詩學生の中にきこえ有ものにて参りたりけるが。歳八十ばかりにて階をのぼる事かなはざりけるを。大藏卿長成朝臣春宮大進朝方弟子にて有ければ。前後にあひしたがひて扶持したり。ゆゝしき面目とぞ世の人申ける。周光もことに自讃しけり。此度ぞかし俊憲宰相藏人左少辨右衛門權佐東宮學士にてかきひかして侍けることは。そのとし二條院位につかせおはしまして。次の年式日におこなはれけるに。主上玄象ひかせおはしましけり。上下耳をおどろかさずといふ事なし。内大臣拍子。按察使重通笙。新三位季行卿篳篥。中將俊通朝臣等。實國朝臣笛。安名尊。鳥破。美作。賀殿急。伊勢海。萬歳樂。更衣。三臺急。五常樂急。このたびの御遊とにももしろかりければ。主上興に入せおはしましけり。按察笙を閣て時々唱哥せられけり。興ある事也。永曆よりおこなはれず成にけり。くちおしき事也。

後白河院御熊野詣に藤代の宿につかせおはしましたりけるに。國司松煙をつみて御前におきたりけり。花山院左府中山太政入道殿其時右大將にて御前に候はせ給たりけるに。此墨いか程の物ぞ心みよと勅定有ければ。おと右大將にすゝめ申されければ。硯を引よせて墨をとりてすらせ給けり。その様除目の執筆の定成けり。左府見とがめてしきりに感歎のけしき有けり。

建久の頃。月輪入道攝録にて公事どもをこし行はれけるに。近代節會などにも上達部物をくはぬ事いはれなき事也。ふるきにまかすべきよしきた有けるに。三條左大臣入道の内辨の時さつにとりてめしたまひたりけるを。職者のし給ことなればやうぞ侍らんとや思はれけん。諸人みな同じ物を食せられけり。次に又内辨かちぐりをとりにめすよしして懷中し給ひければ。人々皆また同じていにせられけり。殿下たちのぞかせ給て。何となく内辨のせらるゝ事を。かゝるべきしきぞと心得て。人々まねぶ事見ぐるしとて。其後此きたとまりにけり。

建久の頃。中山太政入道殿大納言右大將にて。縣召除目に三箇夜出仕せさせ給ひて。管文の三の説を夜ごとにかへてとらせ給ひけるを。人々めてたがりのじりわりけるに。頭中將忠季朝臣あまりにいみじがりて繪にかきて持れたりけるとかや。中將はゆゝしき繪かきになん侍ける。

さ、一、本作き

三の、據一本補
○り以下廿一
字、據一本補
れ、原作せ、據一
本改

硯、據一本補

に、一本元

度、一本元

公事以下十九
字、據一本補

重、一、本作童

も、一、據一本補

ひ、原作の、據一
本改

ふかく、一本作
ふかう

承元二年十二月九日、京官除目行はれけるに。或大納言硯管を第二の大臣の前におかれたりけるを。光明峯寺入道殿中納言左大將にて一管おかせ給ふとて。さきの人の置たがへられたる硯管ながら。北へをしあげさせ給たりける。人々ほめ奉る事かぎりなかりける。その時御年十六に成給ひにけるとかや。みなし子の御身にてあはれに目出度御事かなと時の人申けるとなん。

後鳥羽院公事の道をふかく御さたありけるに。菩提院入道殿下に内辨の作法をならはせおはしきさんとて。瀧口殿に御幸なりて門みなさしまはされけり。入道殿下墨染の御衣はかまに笏たしくして。院の御下重の尻をたまはらせ給て。御腰にゆひてもゆきはきてねらせ給ひたりける。目も心もおよばずめてたかりける。おさなき殿上人一二人。上北面には重輔朝臣一人ぞ候ける。

後鳥羽院ひそかに大内に御幸なりて白馬節會の習禮有けり。院は大臣の大將とて内辨をつとめさせおはしませしけり。官人坊門大納言忠信。番長家季朝臣にてぞ侍ける。右大將にて後久我太政大臣おはしけるに。番長には造酒正信久をなされたりけり。大納言に信久ふかくかしこまりたりけるを。大納言見て隨身に隨身のかくばかりするやうやあるといはれければ。隨身も隨身にこそよれといひたりける。いと興有事也。此日の事ぞかし。禪正少弼國章内侍となりて。下名をもちて東のはしらのもとへ

村上の、原爲傍書、今從一本其、據一本補

おもみ出たりけるに。陣につきたる諸卿たへかねてみなわらひたりけるとなん。
天慶五年五月十七日。内裏にて蕃客のたはぶれ有けり。大使には前中書王の中將にておはしましけるをぞなし奉られける。其外諸職皆その人を定られける。主上村上の聖主の親王にておはしましけるを。其主領にてわたらせ給ひけり。かゝるむかしのためしも侍る故にや。

道、一本作通、同
一本與此同

に、一本元、恐衍
間、一本作ま

順徳院の御位の時賭弓をまねばれける。左京大夫重長朝臣六位の青色袍をかりてきて。白木の御倚子につきて主上の御まねをぞしける。時正卿いまだ五位にて侍ける。關白に成たりけり。其外大將以下皆殿上人をぞなされける。重長朝臣御倚子につきて御前にそなへたる菓子并鳥のあしなどを取てくひたりける。比興の事なりけり。勝負の舞を奏する時木工権頭孝道一鼓をうち。藏人孝時大鼓を打けり。まことの義にもおとらずぞ侍ける。猪熊殿の關白にておはしましける。光明峯寺入道殿の左大臣にておはしましけるに。召に應じて參らせ給て御覽せられけり。後鳥羽院御熊野詣の間なりけり。御よろこびの後此事きこしめして。主上の御まねしかるべからず。あまさへ食する事狂々也とて逆鱗有て。按察光親卿を御つかひにて内裏へ申されたりければ。ことにかくなりけるとなん。

古今著聞集卷第三終

号、一本元、當
衍

又、一本作亦○
一本作道

皇、一本作王

幽、原作悉、據一本改、○吟、一本作元○誦、一本作

る、一本作り

古今著聞集卷第四

文學第五

伏犧、分、氏の天下に王として。はじめて書契を作りて。繩をむすびし政にかへ給しより文籍なれり。孔丘の仁義禮智信をひろめしより此道さかり也。書曰。玉不琢不レ成、器。人不レ學不レ知道。又云。弘風導俗。莫尚於文。敷教訓民。莫善於學。文學の用たる蓋かくのごとし。

應神天皇十五年に百濟國より博士經典を相具して來り。しかうして後經史我國にまなびつたへたり。抑詩は志のゆく所也。心にあるを志とす。言にあらはすを詩とすといへり。天武天皇第三御子大津皇子始めて詩賦をつくり給ふ。それよりこのかた春風秋月の幽靜也。皆吟誦の心をもよほし。詞花言葉の聯翩也。悉錦繡の色を裁するものなり。

天曆六年十月十八日。後江相公の夢に白樂天きたり給へりけり。相公悦びてあひ奉りて。そのかたちをみれば白衣を着給ひたり。面の色あかぐろにぞおはしける。青き物着たるもの四人あひしたがりけり。相公都卒天より來り給へるかと問奉られければ。しかなりとぞ答へ給たりける。申べき事有て來れるよしの給けるに。いまだ物語に及ばずして夢さめにければ。口惜き事限なかりけり。

て、一本无

天曆の御時。朝綱文時に仰せて文集第一詩をらびて奉るべきよし勅定有ければ。

送蕭處士遊黔南。

能文好飲老蕭郎。

身似浮雲鬢似霜。

生計拋來詩是業。

家園忘却酒爲鄉。

鴻從巴峽初成字。

猿過巫陽始斷腸。

不醉黔中爭得去。

摩圍山月正蒼々。

この四韵をとものにえらびたてまつりたりけり。一句すぐれたるはちほけれど。四句體ことなるによりてありがたき事にや。兩人同心のほど興ある事也。

安樂寺作文序を相規が書けるに。王子晋之昇仙。後人立祠於候嶺之月。羊大輔之早世。行客墜淚於峴山之雲。この句ことにすぐれたりけるを。後に月のあかりけるに。安樂寺にて直衣の人詠じたるは。天神御感のあまりあらはれ給けるにや。

蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一聲。此句は橘直幹が秀句にて侍るを。奮然上人入唐の時わが作なりと稱じけり。但雲千里と侍を霞千里とあらため。鳥一聲をば虫一聲となをしたりけるを。唐人ききて佳句にて侍る。をそらくば雲千里鳥一聲と侍らばよかりなましとぞいひける。さしもの上人のいかにそらごとをばせられけるにか。この事もばつかなし。

鴻、原作江、據一本改

輔、原作轉、今從一本

盡、一本此下有の字

川、據一本補○
清、一本作濁、恐非

囊、原作象、今從一本、下同

日、一本无

く、據一本補

前途程遠。馳思於廬山之夕雲。後會期遙。霧縷於鴻臚之曉淚。と。後江相公が書たるを。渤海の人感涙をながしける。のちに本朝人にあひて江相公三公の位にのぼれりやと問ひけり。えからざるよし答へければ。日本國は賢才をもちある國にはあらざりけるとぞはぢしめける。

都良香竹生島に参りて。三千世界眼前盡。と案じ侍て。下句を思ひわづらひ侍りけるに。その夜の夢に弁才天。十二因縁心裏空とつけさせ給ひける。やんごとなきことなり。

時後山川清といふ事を。以言つかうまつりけるに。歸嵩鶴舞日高見。飲酒龍昇雲不殘とつくりて。以言すなはち講しにてよみあげたるを。爲憲朝臣其座に侍けるがききて。土囊に頭を入れて涙をながしけり。見る人或は感じ或は笑ひけり。彼爲憲は文塙ごとに囊に抄物を入れて隨身しけるを土囊とは名づけたりけり。

後徳大寺左大臣前大納言にておはしける時。人々をともしなひて。嘉應二年九月十三日夜。寶莊嚴院にて當座の詩哥有けるに。式部大輔永範卿月の影に立出て抄物を見て。樓臺月映素輝冷。七十秋闈紅淚餘といふ秀句を作たりける。むかしはふところに抄物など持くるしからぬ事也けり。近代は不覺の事に思ひてもたぬ事に成はてにけり。

盛、一本此下有
て字 據一本補

さ、或行〇間、原
作向、據一本改
波、一本作浪

白、據一本補〇
曲、一本作蕪
或是 陰、集覽本作吟

不_二是花中偏愛_一菊。此花開後更無_レ花。これは元稹か秀句也。隱君子琴を弾じ給ける。空よりかげのやうなるものきたりていひけるは。我此句をあはず宿執あるによりてその感にたへず。たゞし後の字をあらためて盡_・とあるべしと云てうせにけり。いづれの年に_か天下に疫病はやりたりけるに。或人の夢に文時三品の家のまへを。おそろしげなる鬼神どもみな拜してとをりけるを。あれは何といふことにてかくはかしてまるぞと問ければ。瀧山雲晴。李將軍之在家とつくりたる人の家をば。いかてかたも無禮にて過べきとこたへけり。鬼神は心たしかにて。かく禮義もふかきによりて。文をもうやまふにこそ。一道に長たる人はむかしも今もかやうのふしぎおほく侍り。

大内記善滋保胤と八條の宮に參じて。下問の時事時輩の文章におよびけるに。親王命云。匡衡如何。答曰。敢死之士數騎被_二介冑_一。策_二驪騮_一似_レ過_二淡津之渡_一。其鋒森然少_二敢當者_一。又命云。齊名如何。答曰。瑞雪之朝。瑤臺之上。似_レ彈_二箏柱_一。又命云。以言如何。答曰。白_二砂庭前_一。翠松陰下。如_レ奏_二陵王_一。又命曰。足下如何。答曰。曲上達部駕_二毛車_一。時々似_レ有_二陰聲_一と申ける。いと興ある事也。大かた自_レ漢至_レ魏。文體三段とこそ文選には侍なれ。白樂天の作をば東坡先生はかたぶけしるかや。されば和漢の風情時にしたがひて改まるやうに侍ども。彼保胤が詞古今序のごとくばさまよくなる體い

一本頭書云十訓
抄上第一可定心
操振舞事醫師雅
忠の事なり
狀心原作條に、
據一本改

八月以下廿七
字、一本脱

内、據一本補
才、一本作弟、同
一本與此同
に、一本无

芥、一、本作芬〇
信、原作倍、據一
本改
一、一本作四
指、當作脂

づれもすつまじきこそ侍れ。一隅をまもりて善惡をさだめん事は。口をしかるべきことなり。諸道同事なるべきにや。

白河院御時。高麗國より醫師を申たりけるに。つかはすべきよし沙汰有けるに。殿下御夢想の事有てつかはすまじきになりけり。返狀を匡房卿かきけるに。雙魚難_レ達_二鳳池之波_一。扁鵲豈入_二鶴林之雲_一。この句ことなる秀句にて。よの人ほめのしじりけり。

江中納言匡房。承徳二年都督に任じてくだりけるに。同康和三年に都督夢想の事ありて。安樂寺の御祭をはじめて。八月廿一日翠花を淨妙寺にめぐらす。此寺は天神の御事をとめし地也。治安の都督。惟憲卿彼跡をかなしびて。一伽藍を其所に修復して法花三昧を修す。同廿三日宰府に還御。僚官社司みな馬にのりて供奉す。廟院の南に順宮あり。神輿をその_内にやすめて。神事をその前におこなふ。翌日に宴をはりて。夜に入て才子ひきて宴席をのぶ。是をまつりの竟宴といふ也。神徳契_二遐年_一と云題をはじめて。講せられけるに。序を都督かゝれけるに。桑田縱變。日祭月祀之儀長傳。芥城縦空。配_二天掃_一地之信無_レ絶。况亦崑崙萬歲三寶之桃矣。便充_二粉榆之珍羞_一。陸峒一却一熟之瓜焉。更代_二蘋蘩之綺饌_一。とかゝれて侍る故にや。此祭禮年をへてたゆる事なく。いよく指粉をぞ添へられ侍る。同序云。社稷之臣政化雖_レ高。朝闕萬機

姫靈、一本傍書
作孤雲、一本補
推、原作推、據一
本改

倡、原作倡、據一
本改、○に、據一
本補、○に、據一
ける、一本作ら
る、三字

女、據一本補○
女、原作如、據一
本改、○松、據一
本補

な、一本作は

未_レ必充_二姫靈。風月之主才名雖_レ富。夜臺一掩未_レ必類_二祖宗。彼蕭蕭暮雨。花盡_二巫女之
臺。嫋々秋風。人下_二伍子之廟。古今相隔。幽哥惟同。匡房五稔之秩已滿。待_レ春漸熾。
江湖之舟。併觀之期難_レ知。何日復列_二廟門之籍。とか_レれたりける。詩にいはいはく。蒼茫
雲雨知_レ吾否。其奈_レ將_レ歸_二於帝京。となん作られたり。此序を講じける時。この中の
句を御殿のかたに人の詠ずることの聞えけるは。うたがひなく神感のあまりに天神
御詠吟有けるにこそと人々申ける。今年都督秩滿のとしにあたり。明春歸洛せん
ずる事を神も名残おほくおぼしめして。かく倡吟有ける_二に_一や。同四年都督已に花洛
におもむくとて。曲水宴に参りて序をか_レれけるに。夢の中に人來て告げるは。此序
の中にあやまりあり。なをすべしといふと見てさめぬ。其後伴の序を沉思有けるに。
柳中之景色暮。花前之飲欲_レ罷と云句ありけり。柳中は秋の事也。春の時にあらずと
覺悟して則なをされにけり。同序に潘江陸海。玄之又玄也。暗引_二巴字之水。洛妃漢
女。如_レ夢而非_レ夢也。自動_二魏年之塵。堯女廟荒。春竹染_二一掬之淚。徐君墓古。秋_二松
懸_二三尺之霜。右軍既醉。蘭臺之席稍卷。左驂頻顧。桃浦之駕欲_レ歸。かやうの秀句共を
書出されたりけるに。尊廟のふかくめてさせ給にけるにこそ。講ぜらる_レ時御殿の
戸なりたりけるを。滿座の府官僚官一人も残らずみな是をき_レけり。そのこそ雷の
ごとくになん侍りける。此卿嘉承二年又都督になりたりける。これも神の御はから

履、一本作履

ひにこそ。かたじけなき事也。

從、原本及一、本
作沒、今從一本
○に、據一本補
○に、據一本補
論、原作論、據一
本改、原作論、據一
本改

是、據一本補○
是非老之幸哉、
一本作是北辰三
字、辰、一本作居

尙齒會は唐の會昌五年三月廿一日。白樂天履道坊にしてはじめておこなひ給ひけ
る。我朝には貞觀十九年三月十八日。大納言年名卿小野山荘にしてはじめておこな
はれけり。又安和二年三月十三日。大納言在衛卿粟田口山荘にておこなはれける。其
後天承元年三月廿二日。大納言宗忠卿白河山荘にして被_レ行けり。七叟算三善爲康。
年八十三。前左衛門佐藤原基俊。七十六。前日向守中原廣俊。七十。亭主。七十。式部大輔藤原
敦光朝臣。六十九。右大弁實光。六十三。式部少輔菅原時登。六十二。此中に基俊は病により
て詩ばかりを贈りけり。時登序をば書たりけり。垣下に中納言師時以下侍けり。詩披
講以前に。朗詠少_レ從_二樂天二三年の句を_一となへて四五反におよぶ。右大弁式部大輔
ぞ詠ける。又岸風論_レ力之句。蓬鬢商山之句。醉對_レ花之句等再三詠じて。すでに幽興
に入けり。昔は此座にして盃酌有て。或は詩をつくり。或は管絃を命じて。心にまか
せて遊戯しける。今ぞかやうの事も絶え侍ぬる。口おしきかな。
永久三年七月五日。式部大輔在良朝臣御侍讀にて。始めて御前へ参たりけるに。先朗
詠をしける。幸逢_二堯舜無爲化德。是非老之幸哉。大公望遇_二周文二等之句也。次古事
をかたり申けり。聞もの感せずといふ事なし。次に管絃ありけり。主上御笛をふかせ
給ふ。更闕て在良朝臣罷出けるに。藏人朝隆指燭さしておくりけり。ゆ_レしくぞ侍け

一本頭書云作者部類云惟宗隆頼尾張國入勸學院學頭六位詞二

甲子、此上恐脫字○唯、原作准、據一本改、同

論語、一、本此下有疏字○も、據一本補○も、一、本元、當衍、據一本補、同

る。

勸學院の學生どもあつまりて酒宴しけるに。おの／＼議しける。年齢座次をいはず才の次第に座には着べしと定めけり。然るを隆頼すゝみてつきてけり。傍輩共左右なくはいかにつくぞといひければ。隆頼こたへけるは。文選三十卷四聲の切韻暗誦のものあらばすみやかに隆頼のくだるべしといひたりけるに。傍輩共皆口を閉てあへて云事なかりけり。此隆頼は無雙の才人也けり。學頭に成たりけり。學問料を心にかけて望みけれ共。つるにかなはざりけり。申文に對_三夏曆_一・甲子老_レ自_三唯陽之一_一老_一取_三明鏡一見_三鬢眉_一。皓_レ自_三商山之四皓_一と書たるもの也。此句ことなる秀句にて人口にあるものなり。

康治三年甲子にあたりけり。例にまかせて革命のさだめ有べかりけるに。宇治左府前内大臣にておはしけるが。周易をまなばずして此定にまいらん事あしかるべしとおぼして。よませ給ふべきよしおぼしだめてけり。しかあるを此事を學ぶ事師有よしひつたへたり。又五十以後まなぶべしともいへり。おと／＼おぼしけるは此事更に所見なし。論語_・には小年にて_三も學ぶべし_一とこそ見えたれ。さりながら_三も俗語_一はいかりあれ_三ば_一とて。二年十二月七日安倍泰親をめして。河原にて泰山府君をまつらせて。みづから祭庭にむかはせ給ひけり。都帖にその心ざしをのべられけり。成佐

ぞ草したりける。そのとしちといは廿四にぞならせ給ひける。文道をおもんじ冥加を恐給ひてかくせさせ給ひける。やさしき事也。

仁平の比。宋朝商客劉文冲。東坡先生指掌圖二帖。五代記十帖。唐書九帖。名籍をそへて宇治左府に奉りたりける。返事は文章博士茂明朝臣草して。前宮内大輔定信ぞ清書したりける。尾張守親隆朝臣が奉書にぞかきたりける。砂金卅兩をたまはせけり。又要書目六をもつかはしけり。

萬壽三年に周良史といひけるもの名籍を宇治殿に奉りたる事あり。其たびは書をばたてまつらざりけり。

仁平三年五月廿一日。院宣によりて宇治左大臣東三條にて。學問料の試をおこなはれけり。藤原敦經。菅原登宣。同在清。藤原敦綱。同光範。菅原在茂等を中島の座にすへられにけり。式部大輔永範朝臣。文章博士茂明朝臣。式部權大輔公賢をめして。左傳禮記毛詩を分たびて。題をえらばされけり。みな紙切に書わけて。頭弁朝隆朝臣をめしてくじにとらせられけり。禮以行義といふ事をとりけり。家司盛業をもて試衆にたまふ。作り出すに隨てぞもてまいりける。其後評定ありけり。後に院より通憲入道にもおぼせおはせられけるとぞ。つるに光範登宣ぞ給はりける。保元二年四月廿八日。藏人所にて直講の試ありけり。重憲。師直。師尙。おの／＼屏風

仲、一本作仲、同
本與此同
たりける、據一
本補○茂明、原
作義明、一本作
義時、據本朝世
紀及下文改、本
朝臣、今從一本
補之

宣、一本作信、蓋
依別誤者
大、據本朝世紀
當作少

試、原作式、據一
本改

暗、原作噴、據一本改○たり

此一章、據一本補○衣鉢、據一本作衆、恐當作衣鉢

をへだて候けり。頭弁範家朝臣。藏人左少弁雅頼。藏人勘解由次官親範所につきたりけり。式部大輔永範朝臣。毛詩尙書左傳禮記の中に十の事をしるしいだして奉りたりけるを尋下されけり。師直は三事に通し。重憲師尙は二事に通じたりけり。次日親範仰をうけたまはりて。助教師光師尙父頼業。直講康季を藏人所にめして評定せられけり。師直傍輩にすぐれたるによりて。五月二日つるになされにけり。少納言入道信西が家にて人々あつまりてあそびけるに。夜深催管絃と云題にて當座の詩を作りけるに。皆人は作いだしたりけるに。敦周朝臣案じ出さぬけしきにて程へければ。満座興さめてけり。あまりにすみて侍ければ。有安が座のすゑに有けるに。入道朗詠すべきよしをすゝめければ。第一第二絃索々といふ句を詠じたりけり。此心自然に此題によりきたりけるにや。敦周朝臣やがて作りいだしたりけり。龍吟水暗兩三曲。鶴唳霜寒第四聲とつくりたりける。殊その興有て人々感歎しけり。彼朗詠のこゝろいと相違なきにや。

後徳大寺左大臣納言之時。昇進といこほり給ける程に。治承元年の冬左大臣に成給て。二年春釋奠にまいりて。豈圖再接杏壇宴。衣鉢遂歸四十春と作り給たるを。永範卿感歎にたへずなみだをながしけり。おほかた風月の才人にすぐれ給へるにや。

頭、據一本補○脱字、一本云此下

ま、據一本補○の、一本元當衍○む、以下廿一字、據一本補

堂原作、據一本及補任改、心、原作、一本作押、今意改

か、原作承、據一本改

殿、原作取、據一本改

治承二年五月晦日。内裏にて密々に御作有けり。題云。詩境多修竹。左兵衛督成範卿已下參られたりけり。御製落句に。豈忘一字勝金徳。可慙白頭卷・師。かくつくらせ給たるを承りて。宮内卿永範卿。左大弁俊經卿ともに御侍讀にて候けるが。感涙をのこひて兩人東臺の南階をおりて二拜。左大弁舞蹈しけり。左大弁は左兵衛督の笏をぞかりうけらる。まことにゆゑしき面目にこそ。

高倉院「の」風月の御才はむかしにもはぢぬ御事とぞ世の人申ける。さればこのみ御沙汰も有けり。治承二年六月十七日。延久のふるき跡を尋て。中殿にて御作文有けり。妙音院太政大臣。師。左大將。實定。中宮大夫。隆季。藤中納言。實長。權中納言。實綱。右宰相中將。實守。式部大輔。永範。左大弁。俊經。中將雅長朝臣。通親朝臣。權右中弁親宗朝臣。藏人左少弁兼光。藏人勘解由次官基親。藏人右衛門佐藤原家實をめされけり。式部大輔題の事をうけ給て。禁庭催勝遊としるして奉りけり。勸盃はてぬれば御遊をはじめらる。太政大臣玄象を弾じ給。但まへにあきて弾じたまはざりけり。唱歌をぞし給ける。絃のきれたりけるにや。中宮大夫笙をふく。笛は主上ふかせおはしますべきよしかねて聞えけれども。さもなくて藤大納言ぞつかうまつられける。中御門中納言宗家拍子をとる。六角宰相家通等をしらぶ。頭中將定能朝臣篋策をふく。少將雅賢朝臣和琴を弾じけり。呂安名尊。鳥破。席田。賀殿急。律伊勢海。万歳樂。五常樂急。

式、原作民、據一本及上文改
類、原作頂、據一本改

ぬ、據一本補

も、原作ぞ、據一本改
も、原作〇も、原作さ、據一本改

さて、原作こそ、據一本改
ぞ、一本元

御遊はてし詩をおく。兼光をめして講せられけり。そのうち太政大臣御製を給はりて文臺の上にひらかれければ。式部大輔ぞ講じ奉りける。
禁庭月下勝遊成。有管有絃有頌聲。
宴席愁追延久跡。詞花猶異昔風情。
發句下七字中宮大夫の詩にあひて侍ければ。大夫おどろきさはぐけしきあり。人々感じけるとぞ。大臣御製をとりて懷中に入給けり。延久に土御門右府はかくもし給はざりけるに。いと興ありとぞのじりける。座にかへり給て後數反詠じ給ひけり。まことに道にたへたる御事もあらはれてめてたくぞ侍ける。左大將左大弁も同詠じけり。其後令月德是なども詠じ給けり。かゝる程に御製に作りあはせたる人勅詠を給はる事式部大輔申出たりけれども。紀納言のためしも年月さだかならずとて。大夫すなはち作りなをしてかさねられたりける。ゆゑ敷ぞ侍ける。抑今度の文人目出度えらびめされたるに。右大弁長方もれにける事人々あやしみあへり。いかなる事にかちぼつかなき事也。右大弁此事を恨みて病と稱じて。參議大弁兩職を辭申けり。實にはやまざりけるにや。天氣不快なりけるとぞ。
文治三年九月七日曉。秀才長官爲長夢に權右中弁定長朝臣北野宮寺にて臨時作文をおこなふと見てけり。爲長このよしをか弁に告げれば。おどろきて人々をすしめ

上、原作下、據一本改

餘、一本元

ふけらせ、一本作ふけられ

有、一本此下有たり二字

て。同十月六日作文をとげおこなひけり。題は廟庭歲月長。源中納言通親卿已下參られたり。序は大内記長守ぞ書ける。披講のち新中納言兼光卿。式部大輔光範朝臣。大學頭在茂朝臣。文章博士光輔朝臣等朗詠しけり。むかしの御餘執猶おはしますすにや。近比もかく文にはふけらせおはします事おほく侍り。或人連句のたびごと。想像花陽洞と定まれることはいひけり。或日人々よりあひたりけるに。かの人案のごとく又此句をいひたりけるを。素俊法師とりもあへず左存松子亭といひたりける。滿座興に入て腸をきりけるとぞ。この素俊は連句の上手なりけり。

春調 春鶯囀。

琵琶 稱牧馬。

これらも素俊が秀句とぞ申侍る。

村上帝かくれさせ給ひて後。枇杷大納言延光卿あさゆふ戀しく思ひ奉りて。御かたみのいろを一生ぬぎ給はざりけり。ある夜の夢に御製をたまひける。

月輪 日本雖相別。

兜率 最高歸内院。

大納言夢さめておどろきて是に和したてまつる。

古聞 古鳥蘇。
鞍鼓 習泉狼。

温意 清凉昔至誠。

如今 於彼語卿名。

奉、一本作奏、一本與此同

再拜聖顏一寢程。 恩言芳處奉中情。 雖盡一生豈空驚。

後三條院東宮にておはしましける時。學士實政朝臣任國にももむきけるに。餞別のなごりをおしませ給て御製かゝりけるとかや。

州民縱作廿棠詠。 莫忘多年風月遊。

此心は毛詩云孔子曰廿棠莫伐邵伯之所宿也といへる事也。

中納言顯基卿は後一條院ときめかし給ひて。わかくよりつかさくらるにつけてうらみなかりけり。御門におくれ奉りければ。忠臣は二君につかへずといひて。天台楞嚴院にのぼりてかしらおろしてけり。御門かくれ給ひける夜。火をともしさうりければ。いかにと尋るに。主殿司新主(兼)の御事をつとむとてまいらぬよし申けるに。出家の心もつよく成にけり。此人わかくより道心おはしまして。つねのことごとくに。

古墓何世人。 不知姓與名。

化為路邊土。 年々春草生。

菅丞相昌泰三年九月十日宴に。正三位の右大臣の大將にて内に候はせ給ひけるに。

君富春秋臣漸老。 恩無涯岸報猶遲。

と作らせ給ければ。えいかんのあまりに御衣をぬぎてかつげさせ給ひしを。同四年

正月に本院のおとこの奏事不實によりて俄に太宰權帥にうつされ給しかば。いかばかり世もうらめしく御いきどをりもふかゝりけり共。猶君臣の禮はわすれがたく。魚水の節もしのびえずやおぼえさせ給けん。みやこのかたみとてかの御衣を御身にそへられたりけり。扱次のとしの同日かくぞえいせさせたまひける。

去年今夜侍清涼。 秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。 捧持毎日拜餘香。

後江相公(綱)の澄明におくれてのち。後世をとぶらはれける願文に。

悲之亦悲。莫悲於老後子。 恨而更恨。莫恨於少先親。

とかけるこそ前後相違の恨。げにさこそはとさりがたくあはれにおぼゆれ。

橘正通が身のしづめる事を恨て異國へ思ひたちけるありふし。具平親王家の作文序者たりけるに。是を限りとやあもひけん。

齡亞顏駟。過三代而猶沉。 恨同伯鸞。歌五噫而欲去。

とぞかけりける。源爲憲其座に候けるが此句をあやしみて。正通あもふこゝろ有てつかうまつれるにやと申ければ。さすが心ほそくや思ひけん涙をながしける。さて罷出るまゝに高麗へぞ行にける。世をあもひきらむにはかくこそ心きよからめといみじくあはれなり。かしこにて宰相になされにけりとぞ後に聞えける。

やまん、一、本作
過さん

念、一、本作念、
恐非

の、一本作を

間、原作簡、據一
本改

東三條院關白前太政大臣(繼)。九月十三夜の月に東北院の念佛に參給へるに。夜もうちふけて世の中もまづかなるほどに。齊信民部卿をめしてこよひたゞにはいかゞやまん。朗詠有なんやと仰られければ。いとかしこまりてまばし煩ふけしきなるを。人々みゝをそばだてゝいかなる句をか詠せんずらんと待程に。極樂の尊を念する事一夜とうちいだしたりける。たぐひなくめてたかりけり。此句かきたる齊名やがて御供にさぶらひけり。我句をしもさばかりの人の朗詠にせられたりける。いかばかりこゝろの中のすゝしかりけん。此句は勸學會の時攝念山林を賦する序なり。

念極樂之尊。一夜山月正圓。

先句曲之會。三朝洞花欲落。

これは三月十五夜の事也。九月十三夜に詠せられけるいかにとおぼゆ。但念佛の義ばかりにとりよれるにや。古人申所作仰而可レ信歟。

天曆御時。橘直袴が民部大輔を望み申ける申文の草をは自らかきて小野道風に清書せさせけり。御門獻覽ありければ。

依人而異事。雖似偏頗。代天而授官。誠懸運命。

など述懐の詞を書すぐせるによりて御氣色悪かりけり。人是を恐れ思ふ所に。其後内裏焼亡有て。俄に中院へ御幸せさせ給けるに。代々の御わたりもの御倚子時簡玄

々、一本元

象鈴鹿以下とて参りたるを御覽じて。直袴が申文は取出たりやと御尋有ける。時の人々いみじき事にぞ申ける。

古今著聞集卷第四終

古今著聞集卷第五

和歌第六

和哥は素盞鳥の古風よりおこりて久しく秋津洲の習俗たり。三十一字の麗編をもて數千萬端の心緒をのぶ。古今の序にいへるがとく。人の心をたねとしてよろづのことのはとぞなりにける。これによりて神明佛陀もすて給はず。明主賢臣も必賞し給ふ。春の花の下秋の月のまへ。これをもて豫遊のなかだちとし。これをもて賞樂の友とす。

嵯峨天皇玄寶上人の徳をたうとび給ひて僧都になし給けるを。玄寶位記を木の枝にさしはさみて和哥をかきつけてうせにけり。

外都國は水草きよしことまげきあめのしたにはすまぬまされり。

さて伯耆國にすみ待けり。天皇歡感ありて勅をくだして施物有けり。うけとりける

が、據一本補
主原作王、據一
本改

にやおぼつかなし。

弘徽殿女御哥合に。花かうしをらまゆみといへる文字ぐさりを。哥の句のかみにすへて折句の哥によませられける。めづらしかりける事也。おほかたの題には四季戀をこそもちゐられ侍れ。

花山院御ぐしおろさせ給て後。叡山よりくだらせ給ひけるに。東坂本の邊に紅梅のいと面白う咲たりけるを。たちといまらせ給ひてまばし御覽せられけり。惟成弁入道御供に候けるが。王位をすて、御出家ある程ならば。これていのたはぶれたる御ふるまひはあるまじき御事に候と申侍ければ。よませ給ひける。

色香をばおもひもいれず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る。

同院東院にわたらせ給ける比。彈正宮のうへおなじくすみ給ひけり。十首の題を給はせて人へに哥よませせてつかはせ給たるに。橘をよませ給ふける。

宿ちかく花橘はうへてみ昔をこふるつまとなりけり。

なを昔をおぼしける御心のほどおはれなり。又祝の哥に彈正宮のうへよみ給ける。

萬代もいかでかはてのなかるべき佛に君ははやくならん。この祝こそ誠にあらまほしきことなれ。松竹にたどへ鶴龜によせて。千年をいはひ萬代を契りてもいかでかはてはなからん。まことに佛の道にいらんのみぞまめやか

ひ、一本作ふ

た、原作は、今従一本〇ふ、一本元

た、據一本補

つ、原作は、據一本改

につきせぬ御いはひなるべき。

東三條院皇太后宮と申ける時。七月七日撫子おはせさせ給けり。少輔内侍少將のおもとと左右の頭にておまたの女房かたをわかたれけり。うすものふたあひがさねのかさみきたるわらは四人。なでしこのすはまかきて御前にまいれりとして。風流さまへになん侍ける。なでしこに付たりける。

なでしこのけふは心をかよはしていかにかすらんひこぼしの空。

時のまにかすと思へど七夕にかつおしまるゝなでしこのはな。

すはまにたちたるつるに付ける。

敷しらぬ眞砂をふめるあしたづはよはひをきみにゆづるとぞみる。

瑠璃のつぼに花さしたる臺にあしてにてぬひ侍ける。

七夕やわきてそむらんなでしこのはなのこなたは色のまさされる。

むしをはなちて。

松虫のしきりにこゑの聞ゆるは千世をかさぬることろなりけり。

右のなでしこのませにはひかりたるいもつるの葉にかきつけ侍る。

萬代に見るともあかぬ色なれやわがまがきなるなでしこのはな。

すはまのころばにみつてにて。

とこなつのはなもみぎはに咲ぬれば秋までいろはふかく見えけり。
久しくも匂ふべきかな秋なれど猶とこなつの花といひつゝ。

七夕まつりしたりけるかたあり。すはまのさきにみつてにて。

ちぎりけん心ぞながきたなばたのきてはうちふすとこなつの花。

ぢんのいはほをたてゝ。くろほうを土にてなでしこをうへたるところに。

代々をへて色もかわらぬなでしこのけふのためにぞ匂ひましける。

此哥共は兼盛能宣ぞつかうまつり侍ける。これを見る人々おのがひきく心く
にいひつくとて左の人。

かちわたりけふぞしつべき天の川つねよりことにみぎはをとれば。

右の人。

天の川みぎはとなくまさるかないかにしつらんかさぎのはし。

此あそびいと興ありてこそ侍れ。

一條院の御時正暦四年五月五日。帶刀陣に十番の哥合ありけるに。第十番の戀のう
たに。

逢事の夢はがりにもなぐさまばうつゝにものはおもはざらまし。

思ひつゝこひつゝはねじ逢と見る夢もさめてはくやしかりけり。

は、原作か、據一
本改

き、一本作し

と、原作歌、據一
本改

第一、一本元

このつがひをみてたれかしたりけん。哥をよみて帶刀陣に送りける。
さはべのもみぎはのかたもあやめ草おなじ心にひくとしらずや。
返事。

あり立てひくとしりせばあやめ草ねたくみぎはになにまさるらん。

いつの比の事にか殿上の人々哥よみ侍けるに。泰憲民部卿参りあひたりければ。各
興有て思へりけるに。いそぎのことありて退出すべきよし申されけるを。人々ゆる
さいりければ。さらば和哥をまいらせをきて身のいとまをば給はらんと申されけれ
ば各承諾ありけり。則哥をかき封じてをきて退出せられにけり。披講の時これをひ
らき見るに。位署并題ばかりをかきて奥書に。於和歌者追而可進と書たりけり。
人々感歎してかつはやすからぬよしをいひけり。大かた名をえたる人は中くな
る事はあしかりぬべければのがるゝ一の事也。秀歌にはをとりの返しせずといふも
故實なるべし。

白紙を置事は作法ある事也。題位署ばかりをかきて。諸人の哥をきて後。これを置て
逐電して。講席の座にゐざるとかや。寛平法皇宮瀧御覽の時。源井朝臣友于朝臣白紙
を置たりけり。

堀河院御時和哥御會に。京極大殿御位署に散位従一位藤原朝臣某とかゝせ給たりけ

いそぎ、原作も、
恐急字、今従一
本

承諾、原作別路、
據一本改

晦、一本作卅
もさ、一本作し
た〇た、一本元

る。希代の位署なりかし。人目をあどろかしけり。
嘉保三年正月晦日。殿上人船岡にて花を見けるに。齋院選子より柳の枝を給はせけり。人々これを見ればいとのもとはとかしけり。他人その心をしらざりけるに。雅通たましく古歌の一句をさととりて返事を奉りけるにこそ。人々の色もなをりにけれ。紙のなかりければ直衣をやりて書侍りける。

散りぬべきはなをのみこそ尋つれ思ひもよらずあをやぎのいと。

に、一本元

其夜の事にや殿上人齋院へ参りたりける。御用意なからんことをはかり奉りけるにや。さる程に寢殿より打衣きたる女房あゆみ出て。笙をもちて殿上人に給はせけり。雪にて管をつくり。たるひにて竹を作たりけり。すなはち内裏へもちて参りて御覽せさせければ。ことに御感有て大宮へ奉らせ給ける。人々後朝に齋院へかへりまいりたりければ。酒肴をぞまうけられたりける。用意ありける事にや。

み、一本作び

平等院僧正諸國修行の時。攝津國住吉の渡りにいたり給て。齋料のつきにければ。神主國基が家におはして經をよみて立給ひたりけり。其聲微妙にして聞人たうとみあへりけり。國基御齋料奉るとて。いつかたへすぎさせ給ふ修行者ぞ。御經たうとく侍り。今夜ばかりはこゝにとままり給へかし。御經の聽聞仕らんといはせたりければ。とかくの返事をばの給はず哥をよみ給ける。

〇に、一本元、當行
〇に、據一本補

世を捨て、宿も定めぬ身にしあればすみよしとてもとまるべきかは。

かくいひてとをり給ひぬ。其後天王寺別當になりて彼寺におはしましける時。國基参りて天王寺と住吉との境の間の事申入けるに。まばし候へとてあやしく御前へめされければ。かしこまりつゝ参りたりけるに。僧正明障子引あけさせ給て。あの住吉とてもとまるべきかは「と」いかにと仰られたりけるに。國基あきれまどひて申へき事も申さず。とりはかましてにげにけり。いと興有事也。

基俊城外まける事有けり。道に堂あるにむくの木有。その木に六歳ばかりなる小童のぼりてむくをとりにくいけるに。こゝをば何といふぞと尋ければ。やしる堂と申とこたへけるを聞て。基俊なにとなくくちずさみに童にむかひて。

この堂は神か佛かおぼつかな。

といひたりければ。此わらはうち聞てとりもあへず。

ほうしみこにぞとふべかりける。

といひけり。基俊あさましくふしぎに覺えて。この童はたゞものにはあらずとぞいひける。

或所に佛事有けるに。唐人二人來て聽聞しけるに。磬に入葉の蓮を中にて孔雀の左右に立たるを文に鑄つたりけるを見て。一人の唐人。捨身惜花思といひけるを。

有、一本作ま

いひ、一本作い
へり

今一人聞てうちうなづきて。打不立有鳥といひけり。きく人その心をしらす。ある人のどかにあなじつらねければ連哥にて侍りけり。

身をすて、花をおしとや思ふらんうてどもたぬ鳥もありけり。

かくおもひえてけり。わりなくぞ思ひつらねける。

天永元年齋宮群行有けるに。八條太政大臣權右大弁にてくだられけるが。かへりのぼるとて齋宮に参りて日來つかうまつりつる御名殘など。もし運侍らば公卿勅使にて又参る事も侍なんと申てのぼり給けり。去程に其次の年正月廿三日に藏人頭に補して。永久三年四月廿八日に参議にのぼり給にけり。保安三年十二月六日参議右衛門督にて勅使承りてくだり給ひけるが。齋宮へもまいらてのぼられければ。宮よりつかはしける。

昔せしあらしごとの變らぬをうれしとみしはいはましものを。

御返し。

伊勢の海しほひのかたへいそぐ身をうらみなはてそ末もはるけし。

久壽元年二月十五日。法皇美福門院御同車にて鳥羽の東殿より勝光明院へ御幸有て庭の櫻を御覽せられけり。先阿彌陀講を修せられける。法皇少納言入道信西を御使にて。御哥を内大臣新大納言等に給はせけり。檀紙に書てさくらの枝に付られたり。

られ、一本此下有たり二字

て、據一本補

し、一本作事

美、原作徵、據一本改、東、原作車、據一本改、明、原作門、據一本改

内府に給はせける御哥。

心あらば匂ひをそへよさくら花のちの春をばいつかみるべき。

大納言に給はせける御哥。

各御かへしをよみてもとの枝につけて奉りける。内府。

心ありてさくてふやどの花なれば末はるくと君のみぞみん。

大納言。

君が代の末はるくとにさくらばなにほはんこともかぎりあらじな。

大相國このことを聞給て二首を法皇に奉り給ひける。

櫻花ちづかのかずをかぞふればかすもしられぬのちのはるかな。

限りありてつねならぬ世の花のみはちとせの後やにしになるべき。

保元の亂によりて新院讃岐國にうつらせおはしましけり。和哥の道すぐれさせ給ひたりしに。かゝるうきこと出きたれば。此道すたれぬるにやとかなしく覺えて。寂念法師がもとへよみてつかはしける。西行法師。

返し寂念法師。

給、據一本補〇を、據一本補

給ひ、一本无

かへし、一本作返事

しきしまやたえぬる道もなくも君とのみこそ跡をしのばめ。

西行法師法勝寺の花見にまかりけるに。其日上西門院の女房おなじくみける中に。兵衛局ありと聞て。昔の花見の御幸おもひいで給らんなどいひて。その日雨のふりたりければ。かくぞ申つかはし侍りける。

みる人に花もむかしをおもひ出て戀しかるらんあめにしほるし。
返し兵衛局。

いにしへをしのぶるあめとたれかみん花にむかしの友しなければ。

平治元年二月廿五日。御方違の爲に押小路殿に行幸ありけり。透廊にて夜もすがら御遊ありけるに。女房の中より硯蓋に紅の薄様をしきて。雪をもちて出されたるに和哥をつけたりける。

月影のさえたるちりの雪なればこよひは春もわすれぬるかな。
返し。

くまもなき月の光のなかりせばこよひのみゆきいかでかはみむ。

應保二年正月の比。殿下女御殿の御方の女房をともなはせ給て禁中をみめぐらせ給ひけるに。雪月いとあもしろかりける。内の女房の中より藏人の兵衛尉通定をして。女御殿の女房の中へ申あくりける。

蓋、原作爲、今従一本

申べし、一本作いへば、恐非是御、據一本補

月はれて雪ふる雲のうへはいかに。

通定左衛門陣のかたへたづねまいりてこのよしを申ければ。はやく返事を申さるべきよしを殿下仰られければ。

たちかへるべき心地こそせね。

長寛の比。六角左衛門督家通中將にて侍りけるに仰られて。承香殿の梅をあらせられて。中宮の御かたへまいらせられて内侍にたまはせけり。ゆきてみねとありてみるよしを申べしと仰られければ。則もて参りてそのよしを申ければ御返し。

色もかもえならぬ梅の花なれや。

家通朝臣かへり参りて此よしを奏しければ。やがて御かへしつかうまつるべき由おほせられければ。

にほひは千代もかはらざらん。

永萬元年九月十四日。五更におよびて。頭亮の書札とてかみやがみにたてぶみたる文を。頭中將家通朝臣のもとへもて來りけり。ひらきて見れば紅のうすやうに哥を書たり。

は、一本作が

名にたかきすぎぬるよはにてりまさるこよひの月を君はみじとや。

筑前内侍。伊豫内侍などのしはざにや。その使返事をとらてにげかへらんとしける

を。侍どもさとりて門をさしていださす。やがて紅のうすやうにかへしを書てたまはせける。

いかでかはふせやにとてもくまもなきこよひの月をながめざるべき。

かくなんかきて。もとのごとくかみやがみにたてぶみて使にかへしたびて。月をも御覽せて。御よるなれば此御ふみまいらするにおよばず。もし急事ならばあすもてまいれといはせてかへしければ。使しふるけしきながらもて歸り^にけり。いと興あることなりかし。

同御時の事にや。いろはの連哥ありけるに。たれとかやが句に。

うれしかるらん千秋萬歳。

としたりけるに。此次句にるもじにやつくべきにて侍る。ゆゑしき難句にて人々あんじわづらひたりけるに。小侍従つけける。

るはこよひあすは子日とかぞへつし。

家隆卿の家にてこの連哥侍けるに。

ぬれにけり鹽くむあまのふぢ衣。

大進將監貞慶といふ小さぶらひつけ侍ける。

なきゆく風にほしてけるかな。

急、原作兼、據一本改、據一本補

て、據一本補

人くどよみてなき行風をわらひければ。さも候はずとよ。ぬもじのつぎはなもじにて候へばかくつかうまつりて候。なにの難か候べきとちんじたりけるに。いよいよわらひけり。小侍従がもときの句といひつべし。
馬助敦頼出家の後。すなはち大納言實國のもとへまうでたりけるに。扇にかきつけられ侍ける。

紫の雲にちかづくはし鷹はそりてわかばにみゆるなりけり。

返し道因法師。

はし鷹のわかばにみゆと聞にこそそりはてつるはうれしかりけれ。

祭主神祇伯親定。伊勢國いはてといふ所に堂をたてし。瞻西上人を請じて供養をとげけり。其布施にてぞ雲居寺をば造畢せられける。かの上人哥をこのまれければ。時の哥よみつねによりあひて和哥の會ありけり。和哥の曼陀羅を圖繪して過去七佛を書奉り。又卅六人の名字を書あらはせり。又諸惡莫作衆善奉行の文を銘にかゝれたり。色紙形あり。義房公清書し給ひける。また件曼陀羅は本寺の重寶にてあるべきを。いかなりけることにか。神祇大副親仲造宮之時。子息土佐權守親經がもとよりきたれりけるを。錢廿貫にて買とめてけり。相傳して親守入道がもとにあり。建長元年九月外宮遷宮に予參向の時。この曼陀羅をこひ出しておがみ奉りて記之なり。

大、據一本補

嘉應二年十月九日。道因法師人くをすゝめて住吉社にて哥合しけるに。後徳大寺左大臣前大納言にておはしけるが。此哥をよみ給ふとて社頭月といふことを。

ふりにける松物いはとひてましむかしもかくや住の江の月。
かくなんよみ給ひけるを。判者俊成卿ことに感じけり。よの人くもほめのゝざりける程に。其比彼家領筑紫瀬高の庄の年貢つみたりける船攝津國に入らんとしける時。悪風にあひてすてに入海せんとしける時。いづくよりか來りけん翁一人出きて。こぎなをして別事なかりけり。舟人あやしみ思ふ程に。おきなはいひけるは。松物いはの御面白う候て此邊にすみ侍る翁の參つると申せといひてうせけり。住吉大明神の彼歌を感ぜさせ給ひて。御體をあらはし給ひけるにや。ふしぎにあらたなる事かな。

同二年。此哥合の事を廣田大明神海上よりうらやませ給よし。兩三人おなじやうに夢に見奉りけり。道因そのよしを聞て。又人くの歌をこひて合けり。題社頭雪。海上眺望。述懐。かくぞありける。是も俊成卿判じけり。述懐の歌に二條中納言實綱卿左大弁のとき。宰相教長入道につがひて。

位山のぼればくだるわが身かなもがみ川こぐ舟ならなくに。
彼卿四位五位の間顯要職をへず。舍弟二人にこゑられて沈淪せられけるが。仁安元

八日、據補任當作十八日〇十二日、據補任當作十一日、據補任及十月、據補任正月、據補任當作同、據補任當作承安二字

越、恐此下脱られ二字、據一本改

出、原作いで、今從一本

年十一月八日藏人頭に補して。同二年二月十二日參議に任じ右大弁を兼ず。同三年八月四日從三位に叙す。嘉應二年十月八日左大弁に轉ず。昔の沈淪の恨も散ずる程に。かく打つゝき昇進せられたるに。此哥よまれたるはいかに思はれたるにか。かゝる程に同三年正月六日實守中納言宰相中將にておはしけるが。坊官賞にて正三位せられけるに左大弁越られにけり。此哥の故にやと時の人沙汰しけるとぞ。誠に詩哥の道は能々思慮すべきこと也。むかしもかやうのためしおほく侍にや。同哥合に社頭雪を女房佐よみ侍ける。

今朝見れば濱のみなみのみやづくりあらためてけり夜半のしら雪。
この後又濱南宮焼給にけり。これも哥のしるしにや。彼實綱中納言はちとうとの實房實國などに越給ひけるときは。

いかなればわがひとつらのみだるらん浦やましきは秋のかりがね。
かやうによみ給ひける。いとやさしくて恨はさこそふかりけめども。誠信の舍弟齊信に越られて。目のまへに惡趣の報をかため給ひけるにはにずや。

伊通公の參議の時。大治五年十月五日の除目に。參議四人師頼。長實。宗輔。師時等中納言に任ず。是みな位次の上臈なりといへども。伊通その恨にたへず。宰相右兵衛督中宮大夫三のつかさを辭して。檳榔毛の車を大宮おもてにひき出してやぶりたきて

後。褐水干にさよみの袴きて馬に乗て。神崎の君がもとへおはしけり。今はつかさもなきいたづらものになれるよし也。又年ごろかりおかれたりける詩繪の弓を。中院入道右府のもとへかへしやるとて。

八年まで手ならしたりし梓弓かへるをみてもねはなかれける。返し。

なにかそれ思ひすつべき梓弓又ひきかへすありもありなん。

かへりければ此返事哥のごとく。程なく長承二年九月に前参議より中納言になられにけり。宇治大納言隆國前中納言より大納言になられける例とて。其後打つべき昇進して太政大臣までのぼり給にき。是は世も今少あがり人も才能いみじかりける故なり。かやうのためしはまれ事なればいまのうちあるたぐひ學びがたかるべし。大かたは二條院讃岐が歌を。

うきも猶むかしのゆへとおもはずばいかに此世をうらみはてまし。とよめることほりにかなへるにや。

御堂關白大井川にて遊覽し給ふ時。詩哥の舟をわかちて各堪能の人々をのせられけるに。四條大納言に仰られていはく。いづれの舟に乗べきぞやと。大納言いはく。和哥の舟にのるべしとてのられける。さてよめる。

右府、一本作雅定、雅定于時權中納言也、久安六年任右大臣、久壽元年出家

な、原作け、據一本改、一本作し、亦是

おこり、集覽本作おこり、亦或

朝まだき嵐の山のさむければちる紅葉葉をきぬ人ぞなき。

後にいはれけるは。いづれの舟に乗べきぞと仰られしぞ心おどりせられしが。詩の舟に乗て是程の詩を作たらししかば名をあげてましと後悔せられけり。此哥花山院拾遺集をえらばせ給ふとき。紅葉の錦とかへて入べきよし仰られけるに。大納言しかるべからざるよし申されければもとのまゝにて入にけり。

圓融院大井川逍遙の時三の舟に乗者ありけり。帥民部卿經信卿又この人におとらざりけり。白河院西河に行幸の時詩哥管絃の三の舟をうかべて。其道の人々をわかちてのせられけるに。經信卿遅参の間との外に御けしきあしかりけるに。とばかりまたれて参りけるが。三事かねたる人にてみぎはにひざまづきて。やゝいづれの舟にてもよせ候へといはれたりける。時にとりていみじかりける。かくいはんれうに遅参せられけるとぞ。さて管絃の舟に乗て詩哥を獻せられたりけり。三舟に乗とはこれ也。

後三條院住吉社に臨幸ありける時に經信卿序代を奉られけり。その哥にいはく。沖津風吹にけらしな住吉の松のしづえをあらふしらなみ。

當座の秀哥也けり。彼卿のちに俊頼朝臣をよびていはれけるは。古今集にいれる躬恒哥に。

社、據一本補

すみよしの松を秋風ふくからに聲うちそふるおきつしら涙。
此哥を任大臣の大饗せん日。わが所詠の沖津風の哥中山の内に入て史生の饗につきなんやと。俊頼云。此仰如何。彼御哥全くおとるべからず。然れ共古今の哥たるよりてかぎり有て先任大臣候はんに。御作は一の大納言にて尊者として。南階よりねり上りて對座に居なんとこそ存候へといふ。帥のいはく。さらばさもありなんや。いかが有べきとて感氣ありけり。

興、一本作豆、原
本似是補任云
承安三年藤
實綱任伊與權守

能因入道伊與守實綱に伴ひて彼國にくだりたりけるに。夏のはじめ日久しくてりて民のなげき淺からざるに。神は和哥にめてさせ給ふもの也。心みによみて三島に奉るべき由を國司しきりにすめければ。

あまの川苗代水にせきくだせ天くだります神ならば神。

とよめるをみてぐらにかきて。神司して申あげたりければ。炎旱の天俄にくもりわたりて大なる雨ふりて。かれたる稻葉をしなべて縁にかへりにけり。忽に天災をやはらぐる事。唐の貞觀の帝の蝗をのめりける故事をもとらざりけり。能因はいたれるすきものにてありければ。

都をば霞とともにしたしがと秋風ぞふく白川の關。

とよめるを。都にありながら此哥をいださん事念なしと思ひて。人にもしられず久

ありければ、一
本元

しく籠居て。色をくろく日にあたりなしてのち。陸奥國みちのくにのかたへ修行の次によみたりとぞ披露し侍ける。

待賢門院の女房に加賀といふ哥よみ有けり。

待、一本作持

かねてより思ひしことよふし柴のこるばかりなるなげきせんとは。

といふ歌を年比よみて侍たるを。おなじくばさるべき人にいひちざりて忘られたらんによみたらば集などに入たらん。おもても優なるべしと思ひて。いかゞしたりけん花園のおとくに申そめてけり。おもひのごとくにやなりけん此哥を參らせたりければ。おとといみじく哀におぼしにけり。さてかひくしく千載集に入にけり。ふししはの加賀とぞいひける。能因がふる舞に似たりけるにや。

中比なまめきたる女房有けり。世中たえくしかりけるが。みめかたちあいぎやうづきたりけるむすめをなんもたりける。十七八ばかりなりければ。これをいかにもしてめやすきさまならせんと思ひける。かなしさのあまりに入幡へむすめともになくく参りて。夜もすがら御前にて。わが身は今はいかに候なん。此むすめを心やすきさまにて見せさせ給へと。ずいをすりて打なきく申けるに。此娘まいりつくより母のひざを枕にして。おきもあがらずねたりければ。曉がたになりて母申やう。いかばかり思ひたちてかなはぬ心にうちより参りつるに。夕様に夜もすがら神

て、據一本補

も哀とおほしめすばかり申給ふべきに。思ふ事なげにねたまへるうたてさよとくど
きければ。むすめ驚きてかなはぬ心地にくるしくててといひて。

身のうさを中くくなにと石清水おもふ心はくみてしるらん。

とよみたりければ。母もはづかしくなりて物もいはずして下向する程に。七條朱雀
の邊にて世中にときめき給ふ雲客かつらよりあそびて歸り給ふが。此むすめをとり
て車に乗せて。やがて北方にして始終いみじかりけり。大井この哥を納受ありける
にや。

和泉式部おとこのかれくくに成ける頃。貴布禰に詣てたるにほたるのとぶを見て。

ものおもへば澤のほたるも我身よりあくがれいつる玉かとぞみる。

とよめりければ。御社の内に忍びたる御聲にて。

おく山にたぎりてをつる瀧つ瀬の玉ちるばかりものなおもひそ。

其しるしありけりとぞ。

同式部がむすめ小式部内侍この世ならずわづらひけり。限になりて人の顔なども見
しらぬ程になりてふしたりければ。いつみ式部かたはらにそひるて。ひたひををさ
へて泣きけるに。目をわづかにみわけて。母が加ほをつくくくとみていきのしたに。
いかにせん行べきかたもおもほへず親にさきだつみちをしらねば。

り、一本作る

とよはりはてたるこゑにていひければ。天井のうへにあくびさしてやあらんとお
ぼゆる聲にて。あら哀といひてけり。扱身のあたゝかさもさめてよろしくなりてけ
り。

江舉周和泉の任さりて後病おもかりけり。住吉の御たゝりのよしを聞て。母赤染衛

門。大隅守源時用
女。或順女云々。

かはらんといのる命はおしからてさてもわかれんことぞかなしき。

とよみてみてみてぐらに書て彼社に奉りたりければ。其夜の夢に白髪のお翁ありて。こ
の幣をとると見て病いへぬ。

鳥羽法皇の女房に小大進といふ哥よみ有けるが。待賢門院の御方に御衣一重うせた
りけるをおひて。北野にこもりて祭文かきてまもられるに。三日といふに神水を
うちこぼしたりければ。檢非違使これに過たる失やあるべき。いで給へと申けるを。
小大進なくく申やう。おほやけの中のわたくしと申はこれなり。今三日のいとま
をたべ。それにしるしなくばわれをぐしていで給へと打なきて申ければ。檢非違使
も哀に覺えてのべたりける程に。小大進。

思ひいづやなき名たつ身はうかりきとあら人神になりしむかしを。

とよみて。紅の薄様一重にかきて御寶殿にをしたりける。夜法皇の御夢に。よにけだ

みて、據一本補

な、一本元、下同

り、一本作る

かくやんごとなき翁の束帯にて御枕にたちて。やゝとちどろかしまいらせて。われは北野右近の馬場の神にて侍り。目出たき事の侍る。御使給はりてみせ候はんと申給とおぼしめして。うちちどろかせ給ひて。天神の見へさせ給へるいかなる事のあるぞ。見て参れとて。御廐の御馬に北面の者をのせて馳よと仰られければ。馳参りて見るに。小大進は雨しづくなきて候けり。御前に紅の薄様にかきたる哥をみて。これをとりに参るほどに。いまだ参りもつかぬに。鳥羽殿の南殿の前にかのうせたる御衣をかつぎて。さきをは法師跡をば敷島とて。待賢門院のさうしなりけるものかつぎて。師子をまいて参りたりけるこそ。天神のあらたに哥にめてさせ給たりけると。目出度たうとく侍れ。則小大進をばしけれ共。かゝるもんかうをおふも心わろきものにおぼしめすやうのわれはこそとて。やがて仁和寺なる所にこもりゐてけり。力をもいれずしてと古今集の序にかゝれたるは。これらのたぐひにや侍らん。

元永元年六月十日。修理大夫顯季卿六條東洞院亭にて柿木大夫人丸供をおこなひけり。くだんの人丸の影兼房朝臣あたらしく夢みて圖繪する也。左の手に紙をとり。右の手に筆をとつて。とし六旬ばかりの人なり。そのうへに讚をかく。

柿下朝臣人麿書讚一首。并序。

大夫姓柿下。名人麿。蓋上世之歌人也。仕持統文武之聖朝。遇新田高市之皇子。吉野

兼房朝臣、一本爲小書分注○夢みて、一本脱さつて、一本作握て、一本爲小書分注

山之春風。從仙駕而獻壽。明石浦之秋霧。思扁舟而瀝詞。誠是六義之秀逸。萬代之美談者歟。方今依重幽玄之古篇。聊傳後素之新様。因有所感。乃作讚焉。其詞。

和 詞 之 仙。 受 性 于 天。 其 才 卓 爾。 其 鋒 森 然。
 三 十 一 字。 調 花 露 鮮。 四 百 餘 歲。 來 葉 風 傳。
 斯 道 宗 匠。 我 朝 前 賢。 涅 而 無 緇。 鑽 之 彌 堅。
 鳳 毛 少 彙。 麟 角 猶 專。 既 謂 獨 步。 誰 敢 比 肩。
 ほのく、とあかしの浦の朝ざりに鳥がくれゆく舟をしぞおもふ。

此讚兼日に敦光朝臣つくりて前兵衛佐顯仲朝臣清書しけり。當日影の前に机をたてて。飯一坏菓子やうくの魚鳥等をすへたり。但ものにてつくりて實物にはあらず。前木工頭俊頼朝臣。加賀守顯輔朝臣。前兵衛佐顯仲朝臣。大學頭敦光朝臣。少納言宗兼。前和泉守道經。安藝守爲忠等也。次に饗膳をすゆ。次柿下初獻侍人等鸚鵡の盃小銚子をもちて簀子敷に候けり。亭主顯季申されけるは。初獻は和哥の宗匠つとめらるべし。満座一同しければ。俊頼朝臣座をたちて影前にすむ。顯輔盃をとりて人丸の前に置。道經小銚子をとりて盃に入て机のうへにおく。各座にかへりつきて勸盃あり。二献の程に式部少輔行盛來くはゝる。右中將雅定朝臣又來られり。亭主の云。先

守、據一本補○柿下初獻侍、原作相下初獻詩、今暫從一本、按當作初獻、垣下侍

退、原作温、據一本改、美○細、原作津、據一本改、少彙、原作美彙、今從一本

詞、此下恐脱曰、字、原、作、餘、據、一、本、改

人丸の讃を講ずべきなり。人々所存不同。亭主猶讃を前に講ずべきよし申されければ。机のまへに文臺を置いて圓座をしく。件讃を白唐紙二枚に書たり。右兵衛督又來らる。讃をひらきて文臺に置て是を講せらる。次に和歌を講ず。題云。水風晚來。敦光朝臣序をかきけり。講じ終るほどに敦光朝臣朗詠をいだす。新豊酒色云々。次に亭主同句を出す。又詠吟せられて云。保能々々と明石の浦の朝霧に。次敦光朝臣詠吟して云く。多能めつゝ不來夜數多爾。衆人興に入て各後會を約しけり。

夏日於三品將作大匠水閣同詠水風晚來

和哥一首。并序。

大學頭敦光

我朝風俗。和歌爲本。生於志。形於言。記一事。詠一物。誠爲諷諭之端。長者君臣之美。是以將作大匠每屬觀天之餘閑。擬詞露於六義。叶賞心者。花鳥草虫之逸興。應嘉招者。香杉細馬之羣英。今日會遇。只是一揆。方今流水當夏兮。賈冷風迎。晚兮來。蘆葉戰以淒々。渚煙漸暗。杉標動以颯々。沙月初明。情感不盡。聊而詠吟。其詞曰。

風ふけば浪とや秋のたちぬらんみぎはすしきなつの夕ぐれ。

於梯下大夫影前詠水風晚來和歌。修理大夫顯季

夕づくよむすぶいづみもなけれども志賀の浦風すしかりけり。

序以下十七字、
據一本補○酒、
據一本補

同、據一本補

諷、據一本補○
歌、或當作諷○
長者、或有誤、不
對上句、或爲字
賈、據一本補
晚、據一本補

おほぬさや夕浪たつる風ふけばまだきに秋といはれの池。
右兵衛督實行

夕ざれば河風すし水の上に浪ならねども秋やたつらん。
内藏頭長實

夕まぐれなにはほり江に風吹ばあしの下葉ぞ浪にあらる。
右馬頭經忠

楳ながすあなしの河に風吹て此夕ぐれぞ浪さやにたつ。
右近中將雅定

夕まぐれなにはほり江に風吹ばあしの下葉ぞ浪にあらる。
源俊頼

夕日さす野守のかみかひもなくふれけるかぜにかけしそはねば。
中務權大輔顯輔

まだきより秋はたつたの川風のすしきくれに思ひしられぬ。
散位道經

手にむすぶいづみもがはのまし水にたもとすししく夕かせぞふく。
式部少輔行盛

水のあやをふきくる風の夕月よ浪のたつなる衣かさなん。

いざし、原作い
ざら、據一本改
○お、一本作せ

す、一本作れ、更
抹之亦作す

夕ざればなつみの川をこす風のすゞしきにこそ秋もまたれず。

散位顯仲
少納言宗兼

谷川の北よりかぜのふきくればきしも浪こそすゞしかりけれ。

皇后宮少進藤原爲忠

あかねさすひのくま河の夕かけに瀬くくふかぜは秋ぞきにける。

むかし夫婦あひ思ひて住けり。男いくさにしたかひてとをく行に。其妻おさなき子をぐして武昌の北の山までおくる。男の行を見てかなしみたてり。男かへらず成ぬ。女其子を負てたちながら死ぬるに。化して石となれり。其かたち人の子を負てたてるがごとし。是によつて此山を望夫山と名づけ。其石を望夫石といへり。くはしくは幽明録に見えたり。しらゝといふものがたりに。しらゝの姫公おとこの少將のむかへにこんと契りて遅かりしをまつとてよめると有は此こゝろなり。

たのめつゝきがたき人をまつほどに石にわが身ぞなりはてぬべき。

我國の松浦佐夜姫といふは大伴狹手麿が女也。おとこみかどの御使に唐へわたるに。すてに舟に乗りて行時。其わかれををしみてたかき山のみねにのぼりて。はるかににはなれゆくを見るに。かなしびにたへずして領巾をぬきてまねく。見るもの涙

磨、當作彦○女、
一本作娘

領、原作頭、一本
作頭、據和名抄
改下同

その、一本作此、
似是
へ、原作つ、據一
本改

をながしけり。それより此山を領巾磨のみねといふ。此山肥前國にあり。松浦男神とて今におはします。かのさよ姫のなれるといひつたへたり。此山を松浦山といふ。磯をば松浦がたともいふ也。萬葉にその心の歌あり。

とをつ人まつらさよひめつまどひにひれふりしよりあへる山の名。……
むかし大納言なりける人の。みかどに奉らんとてかしづきける女を。うとねりなるものぬすみてみちの國にいにけり。あさかの郡あさか山に庵結びて住ける程に。男外へ行たりける間に。立いで、山の井にかたちをうつして見るに。ありしにもあらず成にける影をはぎて。

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかば。

と木に書つけてみづからはなくなりけりと。大和物語にしるせり。

小野小町がわかくて色を好みし時。もてなし有様たぐひなかりけり。壯衰記といふものには。三皇五帝の妃にも。漢王周公の妻もいまだ此おどりをなさずとかきたり。かゝりければ。衣には綿繡のたぐひを重ね。食には海陸の珍を調へ。身には蘭麝を薫じ。口には和哥を詠じて。よろづの男をばいやしくのみ思ひくだし。女御后に心をかけたりし程に。十七にて母を失ひ。十九にて父におくれ。廿一にて兄にわかれ。廿三にておとゝをさきだてしかば。單孤無頼のひとり人になりてたのむかたなかり

かゝり、據一本
補

無頼、原作無頼、
今從一本

き。いみじかりつるさかへ日ごとにおとろへ。花やかなりし貌としぐにすたれつ
つ。心をかけたるたぐひもうとくのみなりしかば。家は破て月ばかり空じくすみ。庭
はあれてよもぎのみいたづらにまげし。かくまで成にければ。文屋康秀が參河の掾
にてくだりけるにさそはれて。

わびぬれば身を浮草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ。

て、一本元

とよみて次第におちぶれ行ほどに。はてには野山にぞさそらひける。人間の有様こ
れにて知るへし。

和泉式部。保昌が妻にて丹後に下りける程に。京に哥合ありけるに。小式部内侍哥よ
みにとられてよみけるを。定頼の中納言たはぶれに小式部の内侍に。丹後へつかは
しける人は参りにたるやといひ入て。局のまへを過られけるを。小式部内侍御簾よ
りなかばいでし。直衣の袖をひかへて。

大江山いくの路の遠ければまだふみもみずあまのはしだて。

とよみかけし。思はずにあさましく。こはいかにとばかりいひてかへしにもあよ
ばず。袖をひきはなちてにげられにけり。小式部是より哥よみの世におぼえいでき
にけり。

匡房卿わかしりける時。藏人にて内裏によるぼひありきけるを。さる博士なれば女

し、一本作事

房達あなづりて。みすのきはによびてこれひき給へとて。和琴をあし出したりにけ
ば。匡房よみける。

あふ坂の關のあなたもまだ見ねばあづまのことはあられざりけり。
女房達かへしえせでやみにけり。

伏見修理太夫俊綱家にて人々水上月といふことをよみけるに。田舎よりのぼりた
る兵士中門の邊にてこれを聞て。青侍をよびて今夜の題をこそつかうまつりて候へ
とて。

水や空そらや水とも見えわかずかよひてすめる秋のよの月。

侍このよしをひろうしければ大に感じあへり。その夜これほどの哥なかりけり。
同人播磨國へ下りけるに。高砂にて各哥よみけるに。大宮先生義宣といふものが哥
に。

我のみと思ひこしかどたかさごの尾上の松もまだいてりけり。

人々感じあへり。良暹其所にありけるが。女牛に腹つかれぬるかなといひけり。
ある人の家に入てものこひける法師に。女の琴ひきてるたるが。このねをけふの布
施にてかへりねといひければよめる。

ことゝいはあるじながらもえてし哉ねはしらねどもひき心みん。

て、原作け、據一
本改

宣據一本補

是智、一本作知、似

此乞者は三形の沙彌なりとある人いひけり。

中納言通俊卿の子に世尊寺阿闍梨仁俊とて。顯密智法にてたうとき人おはしけり。鳥羽院にさぶらひける女房。仁俊は女心あるもの、そらひじりたつるなど申けるを。阿闍梨かへり聞て口惜く思ひて。北野に參籠して此耻すゝぎ給へとて。

あはれとも神くならば思ひしれ人こそ人のみちをたつとも。

と讀たりければ。かの女房あかきはかまばかりをきて。手に錫杖をもちて。仁俊にそらごといひ付たる報よとて。院の御前に参りて舞くるひければ。あさましと覺しめして。北野より仁俊を召出して見せられければ。神恩のあらたなることに涙を流して。一たび慈悲救呪をよみてければ。女房もとの心地になりけり。院いみじくおぼしめして。うすいみといふ御馬をたびてけり。

天曆の御時。月次御屏風の哥に。擣衣の所に兼盛詠て云。

秋ふかき雲井の鴈のこゑすなり衣うつべきときや來ぬらん。

紀時文件の色紙形をかく時。筆をおさへていはく。衣うつを見てうつべき時やきぬらんと詠ずるいか。兼盛にやがてたづねらるゝ所に。申ていはく。貫之が延喜御時同屏風に駒迎の所に。

逢坂の關のし水にかけ見えていまやひくらん望月の駒。

て、一本作に

と詠ず。此難ありやいかい。時文口をとつ。しかも時文は貫之が子にてかくなんそしりける。よくく淺かりけり。

左京大夫顯輔新院に参りたりけるに。百首よむやうはならひたるかと仰とありければ。ならひたる事候はず。顯季も教へ候はずと申ければ。まことや百首にはおなじ五文字の句をばよまざるなるはとはせ給ひければ。顯輔いかい候はん。百首までよむものにて候へばよみもやし候覽と申ければ。公行がよまぬよしを申也と仰と有ければ。顯輔かへり堀川院御百首をひきて見るに。春宮大夫公實卿哥に。薄刈萱の兩題に秋風といふ第一句さしならびて有ければ。兩首をたとう紙にかきて。九月十三夜の御會にもちて参りて。公行卿にこれ御覽候へといひたりければ。閉口せられにけり。公行は公實の孫なり。用意あるべきことにや。

花園左大臣(有)家にはじめて参りたりける侍の名簿のはしがきに。能は哥よみと書たりけり。ちと秋のはじめに。南殿に出てはたをりのなくを愛しておはしましけるに暮ければ。下格子に人まいれと仰られけるに。藏人五位たがひて人も候はぬと申て此侍参りたるに。たいさらば汝おろせと仰られければ参りたるに。汝は哥よみなと有ければ。かしこまりて御格子おろしとして候に。此はたをりをばきくや。一首つかうまつれと仰られければ。あをやぎのとはじめの句を申出したるを。さぶらひ

にや、一本作也

や、據一本補

ける女房達折にあはずと思ひたりげにてわらひ出したりければ。物を聞はてずして
わらふやうやあると仰られて。とくつかうまつれとありければ。

おをやぎのみどりの糸をくりおきて夏へて秋ははた織ぞなく。

とよみたりければ。おとゝ感じ給て。萩ありたる御ひたれおし出して給はせけり。

寛平哥合に。はつ鴈を友則。

春がすみかすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧の上に。

とよめる。左方にて有けるに五文字を詠じたりける時。右方の人こゑくくわらひ
ける。さて次句に霞ていにしといひけるにこそ。をともせずなりにけれ。おなじ事に
や。

公任卿家にて三月盡の夜。人くあつめて暮ぬる春をおしむ心の哥よみけるに。長
能。

心うき年にもあるかなはつかあまりこゝぬかといふに春の暮ぬる。

大納言うちきして思もあへず。春は卅日やはあるといはれたりけるをきして。長能

披講をも聞はてずいにけり。人をつかはしたりければ。悦て承り候ぬ。此病は去年の

三月盡に。春は卅日やはあると仰られしに。心うき事かなと承りしに。病になりて其

後いかにものくはれ侍らざりしより。かくまかりなりて侍也と申けり。さて又

文人、此上恐有脱

に、據一本補

の日うせにけり。大納言ことの外になげかれけり。是はさうなく難せられたりける
故にや。

別當惟方卿は二條院の御めのとにて。世におもく聞へけるが。あしく振舞けるによ
りて。後白河院御いきどをりふかゝりければ。出家して配所へおもむかれけり。其後
同じくながされし人くゆるされけれども。身ひとり猶うかびがたきよしをつた
へ聞て。

この瀬にもしづむときけば涙川ながれしよりもぬる、袖かな。

とよみて故郷へおくられたりけるを。法皇傳へ聞しめして。御心やよはりけん。さし
も罪深くおぼしめしけるに。此哥によりて召かへされけるとかや。

後鳥羽院御時。定家卿殿上人にておはしける時。いかなる事にか勅勘によりてこも
りゐられたりけるが。あからさまと思ひけるに。其年も空しく暮にければ。父俊成卿
此事をなげきて。かくよみつゝ、職事につけたりけり。

あしたづの雲井にまよふ年くれてかすみをさへやへだてはつべき。

職事此哥を奏聞せられければ。御感ありて定長朝臣に仰てご御返事有ける。

あしたづは雲井をさしてかへるなりけふ大空のはるくけしきに。
やがて殿上の出仕ゆるされにけり。

涙、原作波、據一
本改、草、藤相、涉
而誤者
や一本元

や、據一本補

ける女房達折におはずと思ひたりげにてわらひ出したりければ。物を聞はてずして
わらふやうやあると仰られて。とくつかうまつれとありければ。

あをやぎのみどりの糸をくりおきて夏へて秋ははた織ぞなく。

とよみたりければ。おとし感じ給て。萩ありたる御ひたしれおし出して給はせけり。
寛平哥合に。はつ鴈を友則。

春がすみかすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧の上に。

とよめる。左方にて有けるに五文字を詠じたりける時。右方の人こゑくくにわらひ
ける。さて次句に霞ていにしといひけるにこそ。をともせずなりにけれ。おなじ事に
や。

公任卿家にて三月盡の夜。人くあつめて暮ぬる春をおしむ心の哥よみけるに。長
能。

心うき年にもあるかなはつかあまりこゝぬかといふに春の暮ぬる。

大納言うちきして思もあへず。春は卅日やはあるといはれたりけるをきして。長能
披講をも聞はてずいにけり。人をつかはしたりければ。悦て承り候ぬ。此病は去年の
三月盡に。春は卅日やはあると仰られしに。心うき事かなと承りしに。病になりて其
後いかにもものくはれ侍らざりしより。かくまかりなりて待也と申けり。さて又

人、此上恐有脱

に、據一本補

の日うせにけり。大納言ことの外になげかれけり。是はさうなく難せられたりける
故にや。

別當惟方卿は二條院の御めのとにて。世にもく聞へけるが。あしく振舞けるによ
りて。後白河院御いきどをりふかへりければ。出家して配所へおもむかれけり。其後
同じくながされし人くゆるされけれども。身ひとり猶うかびがたきよしをつた
へ聞て。

この瀬にもしづむときけば涙川ながれしよりもぬる、袖かな。

とよみて故郷へおくられたりけるを。法皇傳へ聞しめして。御心やよほりけん。さし
も罪深くおぼしめしけるに。此哥によりて召かへされけるとかや。

後鳥羽院御時。定家卿殿上人にておはしける時。いかなる事にか勅勘によりてこも
りゐられたりけるが。あからさまと思ひけるに。其年も空しく暮にければ。父俊成卿
此事をなげきて。かくよみつゝ職事につけたりけり。

あしたづの雲井にまよふ年くれてかすみをさへやへだてはつべき。

職事此哥を奏聞せられければ。御感ありて定長朝臣に仰てぞ御返事有ける。

あしたづは雲井をさしてかへるなりけふ大空のはるけしきに。
やがて殿上の出仕ゆるされにけり。

涙、原作涙、據一本改、草、林相渉、而誤者、一本元

壬生二位家隆卿。八十にて天王寺にてをはり給ける時。七首の哥をよみてぞ廻向せられける。臨終正念にてその志むなしからざりけり。かの七首の内に。

契あればなにはの里にやどりきて涙のいりひをおがみけるかな。

宗家大納言とて。神樂催馬樂うたひてやさしく神さびたる人おはしき。北方は後白河法皇の女房。右衛門佐と申ける。宗經の中將をうみなどして。後かれくになりてとをさかり給けるに。

あふことのたえばいのちのたえなむと思ひしかどもあられける身を。

とよみてやられたりければ。返事はなくて車をつかはしてむかへとりて。又とし比になりけるもやさしくこそ。

徳大寺右大臣。うちまかせてはいひ出がたかりける女房のもとへ。師子のかたをつくれりける茶碗の枕を奉るとて。うすやうのながへをやりて此哥を書いて。思ひがけぬはさまにかくしていれられたりける。

わびつゝはなれだに君にとこなれよかはさぬよはの枕なりとも。

女房此枕たゞにはあらしとて。とかくして此哥を求いだされける。いみじく色ふかし。これらは哥をつかはして心中をあらはせるなり。世をうきものに思ひ入

參河守定基。心ざしふかゝりける女のはかなく成にければ。世をうきものに思ひ入

師、一本作卿
碗、一本作院、恐
坑字之誤
く原作へ、據一
本改

び、一本作み

年、一本作事
公、據一本及下
文補

たりけるに。五月の雨はれやらぬ比。ことよろしき女のいたうやつれたりけるが。か
がみをうりてきたれるをとりてみるに。そのかゝみのつゝみ紙にかける。

けふのみと見るになみだのます鏡なれにしかげを人にかたるな。

これを見るに涙とまならず。かゝみをばかへしとらせて。さまゝにあはれびけり。
道心もいよく思ひさだめけるは此事によれり。出家の後寂照上人とて入唐しけ
る。かしこにては圓通大師とぞいはれける。清涼山のふもとにてつるに往生の素懐
をとげられけり。

醍醐の櫻會に童舞あもしろき年ありける。源運といふ僧その時少將公とてみめも
すぐれて舞もかたへにまさりてみえけるを。宇治宗順阿闍梨見て思ひあまきけるに
や。あくる日少將公のものとひひやりける。

昨日見しすがたの池に袖ぬれてしほりかねぬといかてしらせん。

少將公返事。

あまたみしすがたの池のかけなればたれゆへしほる袂なるらん。

といへりける。時にとりてやさしかりけり。中院僧正見物し給ひけるが。これを聞て
いみじとおぼしめして。同入道右府に對面し給ひけるつるにて此事をかたりいて給
て。やさしくこそおぼえ侍しかと有ければ。入道殿哥はおぼえさせ給はじとの給ひ

る、一本作り

あまた、一本此
下有まいり三字
波、一本作丹

び、一本作り

けるを。そればかりはなどかとして。少將公がもとへ宗順阿闍梨つかはし侍りし。昨日
みしにこそ袖はぬれしかとよめるに。少將公荒涼にこそぬれけれとぞ返して侍りし
とかたり給けるに。堪がたくおかしくおぼしけれど。さばかりのいき佛の念比にい
ひ山給けることなれば。忍び給けるなんすぢなくおはしけり。和哥の道は顯密知法
にもよらざりけると。中くいとたうとし。昔の遍照今の覺忠慈圓などには似たま
はざりけるにや。

亭子院鳥養院にて御遊有けるに。とりかひといふことを人くによませられける
に。あそびあまた。集まれり。其中に歌よくうたひて聲よきもの、有けるをとほるゝ
に。丹後守玉淵がむすめ白女シロメとなん申ける。みかど御舟めしよせて。玉淵は詩哥にた
くみなりしもの也。其むすめならば此哥よむべし。さらばまこと、おぼしめすべき
よし仰らるゝに。程へずよみける。

ふかみどりかひある春にあふときは霞ならねど立のぼりけり。
みかどほめあはれび給ひて。御うちぎ一重給はせけり。其外上達部殿上人。あのみ
きぬゝぎてかづけられければ。二間ばかりにつみあまりけるとなん。
河内重如をば山次郎判官代と申けり。その品のやしきものなりけるが。我より高き
女房をおもひかけて。艶書を手づから持て行せんけり。

侍、據一本補

かた、一本作ま

し、一本作事

人づてはちりもやすると思ふまにわれがつかひにわれはきつるぞ。
女めでゝまたがひけり。此人河内より夜ごとに住の江に行て夜をあかしけり。いみ
じきすきものにてぞ有ける。死ぬるとても哥をよみてんけり。

たゆみなく心をかくるあみだ佛人やりならぬちかひたがふな。
和泉式部忍びて稻荷へ参りけるに。田中明神の程にて時雨のま侍けるに。いかす
べきと思ひけるに。田かりける童のあをといふものをかりてきてまいりにけり。下
向の程にはれにければ此あを、かへしとらせてけり。さて次日式部はしのかたをみ
いだしていたりけるに。大やかなる童の女もちてたゞみければ。あれは何者ぞと
いへば。此御ふみまいらせ候はんといひてさし置たるを。ひろげてみれば。

時雨するいなりの山のもみぢは、あをかりしより思ひそめてき。
と書たりけり。式部あはれと思ひて此わらはをよびて。おくへといひてよび入ける
となん。

宇治入道殿にさぶらひけるうれしさといふはしたものを。顯輔卿けさうせられける
に。つれなかりければつかはしける。

われといへばつらくもあるか嬉しさは人にしたがふ名にこそありけれ。
入道殿きかせ給ひて。秀哥に返しなし。とくゆけとてつかはしけり。

是王、一本无、恐非

承安二年三月十九日。前大宮大進清輔朝臣。寶莊殿院にて和歌の尙齒會を行ひけり。七叟散位敦頼四。八十神祇伯顯廣王八十日吉禰宜成仲宿禰七十式部大輔永範七十右京權大夫頼政朝臣九十清輔朝臣六十前式部少輔維光朝臣六十清輔朝臣假名序かきたりけり。敦頼衣冠に櫻のあつぎぬ三をいだして。鳩杖をつきて久利皮の沓をはきたり。清輔朝臣は布袴をぞきたりける。進退の間大貳重家卿裾をとり。皇后宮亮季經朝臣沓をはかせけり。兩人清輔朝臣が弟なれども座次の上臈にて有けるに。このかみをたうとみてふかく此禮有けり。悦にたへず。後日に父顯輔卿子孫の中に此道にたへたりとて。清輔朝臣に傳へたりける人丸影破子破ワカを。重家卿子息中務權大輔經家朝臣にゆづられけり。和哥の文書季經朝臣に譲てけり。すべて尙齒會おほくは詩會にこそ侍に。和哥はめづらしき事也。上古に一度ありけるよし。其時も沙汰有けれども。慥ならぬことにや。其日の日記に侍けるは。池の水ちとせの色をたへへ。いはの苦萬代をへたるけしき也。梢の花おちつきければ。庭の面には春なをのこれりとみゆるばかりありて。清輔朝臣誦じける。

かぞふればとまらぬものを年といひて今年はいたく老ぞしにける。
又誦云。
老ぬとてなどか我身をせめきけんおひすばけふにあはまじものか。

に、一本无

宮内のかみ又敦頼こそをたすけり。敦頼主。
をしてるやなにはのみづに焼鹽のからくも我はおひにけるかな。

又宮内のかみ。
かみ山いざ立よりて見てゆかん年經ぬる身は老やしぬると。

又清輔朝臣。
老らくのこんとしりせば門さしてなしとこたへてあはざらましを。

いづれをも人へあひとりに誦じけり。次に七叟の哥を講じけり。講師成仲宿禰。讀師頼政朝臣也。序者清輔朝臣。

ちる花はのちの春ともまたれけり又もくまじきわがさかりかも。
散位藤原敦頼一座。

まてしばし老木の花にことへはんへにける年はたれかまされる。
大常卿顯廣王。

年を経て春のけしきはかはらぬにわが身はしらぬおきなとぞなる。
前石州別駕祝部成仲。

なれそぢによつあまるまで見る花のあかぬは年はさきやますらん。
李部侍郎永範。

迎原作、據一本
改〇列讀本作別
意今改

維、一本作惟、上
文與此同、惟維
相通也

之、原作て、今意
改、一本无

いとひこし老こそけふはうれしけれいつかはかゝる春にあふべき。

予爲三代之侍讀。迎三句之願。位
昇三品。今列三七。故有此二句矣。

右京權大夫源賴政。

むそちあまり過ぬる春の花ゆへになををしまるゝわがいのちかな。

散位大江維光。

年ふりてみさひおふてにしづむ身の人なみくゝにたちいづるかな。

垣下座につく人々。重家卿。季經朝臣。盛方。仲綱。政平。憲盛。光成。尹範。頼照。おのゝみな哥あり。別紙に注之。此日左馬權頭隆信さはり有てござりけり。又の日をくれりける。

よはひをも道をもしたふわがこゝろゆきてぞともに花をながめし。

返事。

おもひやる心やきつゝたはれけんおもかけにのみみえし君かな。

大貳下襲のしりをとり。皇后宮亮香をはかするを感歎して。弁阿闍梨おくりける。

つるのかみかしづくことはいにしへのかせぎのそのゝふるごとぞこれ。

返事。

つるのはねかきつくるひしうれしさはしかありけりな鹿の園にも。

の、一本无
び、一本作み

經家子、據一本
補、按傍書挿入
家衡子、據一本
補、按傍書挿入
歟

似是、一本作る、亦

彼清輔朝臣の傳へたる人丸の影は。讃岐守兼房朝臣ふかく和哥の道をこのみて。人丸のかたちをしらざる事をかなしびけり。夢に人丸來りて。われをこふる故にかたちをあらはせるよしを告げり。兼房畫圖にたへずして。後朝に繪師をめて教へて書せけるに。夢にみしにたがはざりければ。悦て其影をあがめてもたりけるを。白河院此道御好みありて。かの影をめて勝光明院の寶藏におさめられにけり。修理大夫顯季卿近習にて所望しけれども御ゆるしなかりけるを。あながちに申てつめに寫しとりつ。顯季卿一男中納言長實卿。一男參議家保卿この道にたへずとて。三男左京大夫顯輔卿にゆづりけり。兼房朝臣の正本は小野皇太后宮申うけて御覽じける程に焼にけり。貫之が自筆の古今も其時おなじく焼にけり。口惜事也。されば顯季卿本が正本に成にけるにこそ。實子なりとも此道にたへざらんものにはつたふべからず。寫しもすべからず。起請文あるとかや。件本保季卿つたへとりて成實卿にさづけられけり。今は院にめしおかれて。建長の比より影供など侍にこそ。供具は經家子家衡卿のもとにつたはりけるを。家衡子家清卿傳へとりて。うせてのち其子息のもとに有けるも。同院にめしおかれにけり。長柄橋の橋柱にて作りたる文臺は。俊惠法師がもとよりつたはりて。後鳥羽院の御時も御會などに取出されけり。一院の御會に。彼影の前にて其文臺にて和哥披講せらるなどいと興有事也。

養和二年の春。賀茂神主重保。又尙齒會行たりけり。七叟成仲宿禰。八十勝命法師。七十俊惠法師。七十片岡禰宜家能。六十祐盛法師。六十重保。六十敦仲。六十勝命法師假名序書たりけり。此たびはことなる事なかりけるにや。抑七叟の中に僧まじはりたることおぼつかなし。

高倉院の御時。八月廿日比に人々神樂をし侍けるが。いとあもしろくてなごりおほかりければ。なが月の十日あまりの比。隆信朝臣のもとより實國大納言のもとへおくりける。

あかぼしのあかて入にしあかつきをこよひの月におもひ出ずや。返し。

たいこゝにたゞにとこそは思ひしににげしは月のかひもなかりき。建春門院皇太后宮にておはしましける時。公卿殿上人女房どもさそひて大井川の紅葉見にむかはれけるに。三位中將實定卿さはる事ありてとままれければ。中納言實國卿よみてつかはしける。

もろともに君とみぬまのみみぢばは心のやみのにしきなりけり。返し。さそはれぬ身こそつられれもみぢばはなにかはやみの錦なるべき。

ける原作侍、今
従一本、或當作
侍ける三字

同卿左衛門督にて侍ける時。家に哥合し侍けるに。頼政朝臣立春の哥に。

めづらしき春にいつしかうちとけてまづものいふは雪のした水。とよみ侍けるが面白く聞へければ。又の朝亭主彼朝臣のもとへ申つかはしける。

さもこそは雪のした水うちとけめ人にはこへてみえし涙かな。少將隆房賀茂祭使つとめけるに。車の風流よく見えければ。又の朝大納言實國父の大納言隆季のもとへ申おくりける。

いろふかき君が心のはなちりて身にしむ風のなかれとぞみし。返し。子を思ふこゝろの花の色ゆへやかせのながれもふかくみえけん。

治承の比。人々安藝のいづく島へ参られけるに。風あらくて高砂の邊にありと聞て。修理大夫經盛實國大納言のもとへ申おくり侍ける。

とまりする湊の風もけあしきに涙たかさごの浦はいかにぞ。返し。たかさごの浪のかしらぬありならば風のつてにもとはれまじやは。

仁和寺佐法印。成海法。わかくて醍醐の櫻會見物の次に寺中巡禮しけるにや。山吹衣きたる童二人おなじすがたにて花見て侍けるは。いづれもいみじくえんに覺えけ

にて、據一本補
は、一本无、恐

れば。たへかねて哥よみかけしる。

山吹の花色衣みてしより井手の蛙のねをのみぞなく。自らかくいひかねてにげしる袖をとらへて。ちとあんどて則返し侍ける。

山吹のはな色衣あまたあればるてのかはづはたれとなくらん。

圓位上人昔よりみつからがよみをきて侍る哥を抄出して。三十六番につがひて御裳濯哥合と名づけて。色くの色紙をつぎて慈鎮和尚に清書を申。俊成卿に判の詞をかへせけり。又一卷をば宮河哥合と名付て。是もあなじ番につがひて。定家卿の五位侍従にて侍ける時判せさせけり。諸國修行の時もおひに入て身をはなたざりけるを。家隆卿のいまだわかくて坊城侍従とて。寂蓮が聲にて同宿またりけるに尋行ていひけるは。圓位は往生の期既に近付侍りぬ。此哥合は愚詠をあつめたれども秘藏のもの也。末代に貴殿ばかりの哥よみはあるまじき也。おもふ所侍れば付屬し奉る也といひて。二卷の哥合をさづけけり。げにもゆしくぞうしたりける。彼卿非重代の身なれども。よみくち世おぼえ人にすぐれて。新古今撰者にくはしり。重代の達者定家卿につがひて其名をのこせるいみじき事也。まことにや後鳥羽院始めて哥の道御さた有ける比。後京極殿に申合参らせられける時。彼殿奏せさせ給けるは。家隆は末代の人丸にて候也。かれが哥を學ばせ給ふべしと申させ給ひける。これらを思

抄、一本作揃

合は、一本无

そう、一本作さ

定家以下廿一字、一本脱

ふに上人の相せられける事おもひ合せられて。目出度おぼえはべる也。かの二卷の歌合小宰相局のもとにつたはりて侍にや。御裳濯哥合の表紙にかきつけ侍なる。

藤なみをみもすそ川にせきいれても、枝の松にかけよとぞ思ふ。

かへし俊成卿。

藤なみもみもすそ川の末なればしづえもかけよ松のもと葉に。

又二首をそへて侍ける。同卿。

契りをきしちぎりの上にそへあかん和哥のうらぢのあまのもしほ火。このみちのさとりがたきを思ふにもはちすひらけばまづたづねみよ。

かへし上人。

和哥の浦に塩木かさなる契をばかけるたくものあとにてぞしる。さとりえて心のはなしひらけなばたづねぬさきに色ぞそふべき。

解脱上人のもとに信濃といふ僧ありけり。いましくしきふせものにてなん侍けれど。上人慈悲によりておかれたりけれども。思ひあまりてやすりのふたに哥をかかれたりける。

おそろしや信濃うみけんは、木くのそのはらさへにうとまじき哉。

此僧此哥をみて。あからさまに立出る様にてながくうせにけり。さすがにはぢはあ

る、一本元
せ、一本元

りけるにこそ。

鳥羽宮天王寺別當にて。かの寺の五智光院に御座ありける時。鎌倉前右大將參せられたりけり。三浦十郎左衛門義連。梶原景時ぞ供には侍ける。御對面の後退出の時。庭弱の尼一人いで來り。右大將に向てふところより文書を一枚とり出して云。和泉の國に相傳の所領の候を。人におしとられて候を御こし候へども。身の庭弱に候によりて事ゆかず候。適君御上洛候へば申入候はんと仕候へども。申つぐ人も候はねばたゞ直に見參に入候はんとて參りて候とて。その文書をさへげたりければ。大將みづからとりて見給ひけり。文書のごとく一定相傳のぬしにて有かとはれければ。いかでか偽をば申上候べき。御尋候はんに更にかくれあるまじと申ければ。義連に視たづねて參れと仰られて。尋出して參たりければ。墨おしすりて筆染てうちおんじて。わが持給ひける扇に一首の哥を書給ひける。

いづみなるしのだの森のあまさきはもとのふるすにたちかへるべし。

かく書て。義連にこれに判くはへて尼にとらせよとてなげつかはしたりければ。義連判くはへて尼にたびてけり。年號月日にも及はず。右大將殿自筆の御書下なれば子細にやをよぶ。もとのごとくかの尼領知しけると也。其後右大臣家の時。件の尼がむすめこの扇の下文をさへげて。沙汰に出て侍りけるに。年號月日なき由奉行いひ

給ひ、一本此下有たり二字
ふるす、原作古葉、據一本改
な、原作さ、今從一本

打、據一本補

けれども。かの自筆そのかくれなきによりて安堵しにけり。件扇檜骨ばかりは悉りて。其外は細骨にてなん侍ける。まさしくみたるとて人のかたり侍しなり。同大將もる山にて狩せられけるに。いちごのさかりにありたるをみて。ともに北條四郎時政が候けるが連哥をなんしける。もる山のいちごさかしくなりけり。大將とりもあへず。

むばらがいかにうれしかるらん。

あるなま侍がもとに草をうりて來りけるを。只今かはりなかりければ其草かしおけ。かはりは後にとれといひけるを。草賣打聞て。

あさましやかりとはいかに朝ごとに草にかけたる露のいのちを。

土御門院はじめて百首をよませおはしまして。宮内卿家隆朝臣のもとへみせにつかはされたりけるが。あまりに目出度不思議に覺えければ。御製のよしをばいはてなにとなき人の詠のやうにもてなして。定家朝臣のもとへ點をこひにやりたりければ。合點して褒美の詞など書付侍とて。懷舊の御うたをみはべりけるに。

秋のいろをあくりむかへて雲の上になれにし月も物わすれすな。

此御哥にはじめて御製のよしをしりて。おどろきおそれて裏書にさまぐの述懐の

な、原作る、據一本改

詞どもかきつけてよみ侍る。

わかざりし月もさこそはあもふらめふるき涙もわすられぬ世に。

誠にかの御製は。およばぬもの、目にもたぐひすくなくめてたくこそ覺侍れ。管絃のよくしみぬる時は。心なき草木のなびける色までもかれにしたがひてみえ侍なるやうに。何事も世にすぐれたる事には見しり聞しらぬ道のことも。耳にたち心にそむはならひ也。當院の御製も昔にはぢぬ御ことにや。そのゆへはそのかみ御めのことの大納言のもとにわたらせおはしましける比。はじめて百首をよませおはしましたりけるを。大納言感悦のあまりに。密く壬生二品のもとへ見せにつかはしたりけり。二品御百首のはし春の程ばかりをみて。見もはてられずまへに打置てはらはらとなかれけり。やゝ久しくありて涙を拭ひていはれけるは。あはれに不思議なる御事かな。故院の御哥に少しもたがはせ給はぬとて。ふしぎの御事に申されけり。其時は未だむげにおさなく渡らせ給ける御事也。まして當時の御製さこそめてたき御ことにて侍らめ。彼卿未だ存せられたらましかば。いかに色をも添へてめてたがり申されましとあはれに覺え侍り。

松殿僧正行意。赤痢病を大事にして存命殆わぶなかりけるに。ちとまどろみたる夢に。志貴の毗沙門へ参りたりける。御帳の戸をおしあけて。よにおそろしげなる鬼神

御、據一本補

出て。僧正をやゝとよび申ければ。おそろしながら見むきたりければ。鬼神一首の和哥を詠じかけゝる。

長月のとをかあまりのみかの原川なみ清くすめる月かな。

詠吟の聲たへに目出た。心肝にそみて覺えける程に夢さめぬ。其後病忽やみて例のごとくになりけり。此哥建保元年九月十三夜内裏の百首の御會に。河の月を家隆卿つかうまつれる也。彼卿の哥は諸天も納受し給ふにこそ。不思議の事也。

陰明門院中宮の御時。六事の題をい出して人々におもふ事をかゝせられけり。定家卿家隆卿なども同じくめしけるに。古哥に。

有明のつれなくみえしわかれよりあかつきばかりうきものはなし。

此うたを兩人同じく書て参らせたり。同じ心の程いとゆふに興あるよし其沙汰ありけるとぞ。

後鳥羽院御時。木工権頭孝道朝臣に御琵琶をつくらせられけるを。世かはりにける時。やがて其御琵琶を彼朝臣にあづけられたりけるを。程へて御尋ありければ。御琵琶に付て奉りける。

ちりをこそすへじと思ひし四の緒に老のなみだをのどひつるかな。

順徳院御位の時。當座の哥合有けり。作者の名をかくして衆議判にて侍けるに。古寺

を、原作の、據一本改

據一本補

月といふことを。知家朝臣つかうまつりける。

むかし思ふたかの、山の深き夜にあかつきとをくすめる月かげ。
此哥叙慮に叶ひて頻に御感有けり。厚紙を懸物につまれたりけるに。事はて、人々
罷出けるに。藏人左兵衛權少尉橘親季を御使にて。知家朝臣出けるにおひつかせて。
古寺の月の哥殊叙感あり。勅祿を給也とて。重ねて紙を給はせけり。知家朝臣申け
るは。忝く勅祿に給はる紙いかでか私用仕るべき。明日やがて住吉の御幣に奉るべ
きよし。披露すべきよし申て罷り出にけり。

西音法師は。昔後鳥羽院の西面に平時實とておさなくより候しもの也。世かはりて
後嘉禎比。五十首の哥をよみて。遠所の御所に藤原友茂が候けるににおくりたりける
を。君きこしめして叙覽ありて。みづから十餘首の御點を下されける中に。

見ればまづ涙ながる、水無瀬川いつより月のひとりすむらん。
此哥を殊あはれがらせおはしましけりとぞ。さて御自筆に阿彌陀の三尊を文字にお
そばしてくだし給はせける。今に忝き御かたみとて。つねにおがみまいらせ侍となん。
法深房。そのかみ父の朝臣と不快の比。讓得たりける笛穴をとりかへされける時。う
れへなげきてよみ侍ける。

思出のふしもなきさにより竹のうきねたせぬ世をいとふかな。

勅祿、一本此上
有仍字

におくりたりけ
る、據一本稱

し、一本作事

事、一本作し

やがてその比出家をとげてけり。うきはうれしき善知識となりにけり。
家隆卿七十七になられける年七月七日。九條前内大臣の許へ遣しける。

おもひきや七十七の七月のけふの七日にあはんものとは。
定て返し有けんかし。尋てしるすべし。

寛元々年二月九日。雪三寸ばかりつもりける曉。冷泉前右府参内し給ける。雪の降
かゝりたる松の枝を折て。御硯の蓋におきて。御製を紅の薄やうにかゝせおはしま
して結び付て。大納言二位殿しておとくにたまひける。

九重にふりかさなれる白雪はこれやちとせの松の初はな。
おとこ中宮の御かたへまいりて。御硯を申いだして。尾張内侍をして御返事を奉ら
れける。

ふりかゝるかしの雪をほらはずばかゝるみことの色をみましや。
寶治元年二月廿七日。西園寺の櫻盛なりけるに。御幸なりて御覽せられけり。おとこ
さまの御おくり物を奉られけるうち。五代帝王の御筆をまいらせらるゝとて。
つたへきく聖の代々の跡みてもふるきをうつすみちならはなん。
御返し。

しらざりしむかしに今やかへるらんかしこき代々の跡ならひなば。

そ、一本作て

此事昔は天曆の御門いまだみこにておはしましける時。貞信公の御もとにわたらせ
おはしましたりける時。御あくり物に御手本まいらせられけるとき。

君がためいはふころのふかければ聖の御代にあとならへとぞ。
御返し。

をしへおくことたがはずば行末の道とをくとも跡はまどはし。

さも、據一本補

此御哥ども後撰に入たり。此ためしをおぼしめしけるにこそ。

に、據一本補

住の江に御幸なるべしとて。神主修理を加へけるに。大畧みな新造になしたりけれ
ば。昔より書付おける人々の詩哥みなあとかたなくなり^にたるをみて。たれかよ
みたりけん柱に書付侍ける。

かきつくる跡はちとせもなかりけりわすれずしのぶ人はあれども。

御原作き、今従一本

成源僧正は連哥をこのむ人にて。其房中のも共みなたしなみければ。中間法師常
在といふあやしのものまで。かたのごとくつらねけり。法勝寺の花の盛に。件常在法
師いと櫻のもとにたゞずみて侍けるを。わかき女房四五人花見て侍けるが。此法師
をみてあれも人なみに花みんとて有にやなんどあざけりつゝ。や御房此花一枝折て
たびてんやといへりければ。この法師うちあんどて。
山がつはありこそしらね櫻花さけば春かとおもふばかりぞ。

事、一本作し

といひかけたりければ。わらひつる女房共いらふることなし。あきれてぞたてりけ
る。
入道右大弁眞觀を仙洞の御會にたびく。召ありけれども。参らずして一首の哥を奉
ける。

勅なればそむくにはあらず捨はてし身をいでがてに思ふばかりぞ。
御返し。

このごろのならひそつらきいにしへは勅にぞ人は身をもすてける。
此御返事を給はりて。恐れ思ひてやがて其夜参りて。北面の邊にて少將雅定につけ
て申入侍りて。御返しをばうけ給はらずして出にけり。寛平の御時素性法師がほか
かゝるためしなきよし。入道うちく申侍けるとかや。

古今著聞集卷第五終

古今著聞集卷第六

管絃歌舞第七

管絃のをこり其つたはれる事久し。清明天にかたどり廣大地にかたどる。始終四時

久し、一本此下有く字

飯、集覽本作饗
○故に一本作
ひるかにへに

火、據一本補

延喜、據紀畧當
作延長○明原
作朝、據紀畧紹
運錄改

刑山、一本作刑
仙、恐當作刑仙

にかたどり固絃雨にかたどる。宮商角徵羽の五音あり。或は五行に配し或は五常に配す。或は五事に配し或は五色に配す。凡物として通ぜずといふことなし。又變宮變徵の二聲あり。合て七聲とす。又調子品その數おほしといへども。清濁のくらゐみな五音をいてず。讚佛敬神の庭。禮義宴餼の庭。この聲なければ其儀を調へず。故に興福寺の常樂會百花匂をくり。石清水の放生會黃葉衣におつ。しかのみならず清涼殿の御遊にはことごとく治世の聲を奏し。姑射山の御賀にはしきりに萬歳のしらべをあはす。心を當時にやしなひ名を後代に留る事。管絃にすぐれたるはなし。貞保親王桂河の山庄にて放遊し給けるに。平調にしらべて五常樂をなす間。灯火のうしろに天冠の影顯現しけり。人々おぢ恐れければ。所現の影みづからいはいはく。我は唐家の廉承武の靈也。五常樂急百反に及ぶ所には必ず來侍也とてうせにけり。延喜四年十月。大井河に行幸有けるに。雅明親王御舟にて棹をとめて万歳樂を舞ひ給ける。七歳の御齡にて曲節にわやまりなかりける。わりのたきためし也。寂感にたへず御半臂を給はせければ。親王給て拜舞し給けり。此日勅有て親王舞劔をゆづり給ふ。天曆聖主童親王の御時の例とて沙汰ありける。同廿一年十月十八日。八條大將保忠。中納言の時勅をうけ給ひて。日比奏せざる舞を御覽せられけり。貞信公右大臣にてまゐり給。參入音聲には聖明樂をぞ奏しける。刑山

樂、原作東、今從
一本○西河、恐
當作石河、
韻、據一本補
りけ、一本元○
せ一本作れ

けり以下廿字、
據一本補

正月十八日云々、
紀略曰二月
十八日召文人於
清涼殿前詠櫻花
獻詩又伶人奏歌
常陸、或當作常
明、或當作明
には、或當作明
脱文、按此下恐有

樂。西河。蘇志摩。傾坏樂。放鷹樂。弓士。採桑老。林歌。蘇莫者。泔洲。胡飲酒。輪臺。酬醉。これらを御覽せられけり。此中雅樂屬船木氏有は放鷹樂を奏しけり。帽子に摺衣をぞきたりける。舞の間に心にまかせて鳥をぞらせければ。見るもの目をおどろかしけり。又犬飼一人をぐしたりけり。これはもとよりあるべきものにはあらざる事とかや。この舞承和に奏したりける。其後聞へず。この裝束中納言に調せられける。舞ののち中納言庭にありて。氏有がどらする所の鳥をとりて膳部に給はせけり。其日の舞人百雄。氏有。峯吉。勸賞をかうぶりけり。峯吉はひちりきの上にて賞をかうぶり。おとしは和琴をぞしらべたまひける。延長四年正月十八日内裏にて梅花宴ありけり。主上清涼殿のまごびさしに出御有けり。文人詩を献じ伶人樂を奏しけるに。曉に及て常陸親王筭を彈じ。八條中納言保忠琵琶を彈ず。主上和琴をひかせおはしましける。目出かりける事也。同六年常寧殿にて三月盡の宴ありけり。右大臣定方には。笙四人。篳篥一人。唱歌のもの數人など有ける。又かならず絃をととのへねども。吹もの一兩にてもかやうのことありけるにこそ。同七年三月廿六日。踏歌後宴のまけわざ次第の事どもはて、御遊有けり。敦忠笛をふき。義方和琴を彈じけり。時々みきまゐりて彈正親王(聖)笙をふく。重明親王笛を

ふき給ひけり。又勅によりて和琴をも弾じ給けり。右中弁希世朝臣。左中弁淑光朝臣。たちて舞侍けり。

天曆八年正月五日。右大臣家にて饗をこなはれけるに。はてつがたに式部卿親王とおととと歸徳曲を唱へられたりけるに。右近將曹伴野貞行狛梓と思ひつゝ松をとりにてすゝみけるを。おととと歸徳のよしを告給ければ松をすてゝ舞けり。貞行は高麗舞人なりけり。此事不審。歸徳ならば松をばなど梓には用ひざりけるにか。

天曆元年正月廿三日内宴を行はれけるに。重明親王勅をうけ給はりて琴をひき給けり。一絃ゆるかりければ。右兵衛佐清正に仰てはらせられけり。先春鶯囀を奏し後に席田をとなふ。次酒清司をぞ奏しける。この間琴の武絃たえたりけれど猶弾じはて給ひけり。

同三年四月十二日。飛香舎にて藤花の宴有けり。右大臣(應)。左衛門督(應)。左兵衛督(應)。候給。和哥絲竹の興などはてゝ。女御御おくりものありけり。先皇の勤子内親王に給ひける箏譜三卷。貞保親王のもちるたりける笛螺鈿箏などをぞ奉り給ける。箏奇香あるよし李部王記し給たるとかや。いかなる句ひにてか侍りけん。ゆかしき事也。

同五年正月廿三日。宴おこなはれけるに。式部卿重明親王琴。左大臣(應)。中務大輔博雅朝臣和琴。侍從延光朝臣琵琶。散位朝忠朝臣。右近中將藤原朝臣笙。安名尊。春鶯

天曆、恐當作天曆

そ、原作は、據一本改

實、此上恐脱内、字

和、原作拍子二字、據一本改

扇、一本此下有子字

囀。席田。葛城などをぞ奏しける。其後平調曲も有けり。

同七年十月十三日内裏にて庚申の御あそびありけり。女藏人菊の花のゆわり子を奉る。大納言高明卿。伊與守雅信朝臣御前に候。樂所の輩は御壺にぞ候ける。大納言琵琶を弾じ。朱雀院のめのと備前命婦簾中にてことを弾じける。昔はかやうの御遊つねの事也けり。おもしろかりける事かな。

康保三年十月七日舞御覽有けるに。小野宮右大臣(應)。意童にておはしけるが。天冠をして納蘇利をつかうまつり給けり。舞をはりて御侍子のもとにめして。御柏を給はせければ。左大臣(清)。かしまり悦び給ひてたちてまひたまひけり。拜舞はなかりけり。ゆへありけるにや。

いづれの比の事にか。大宮右大臣(應)。殿上人の時。南殿の櫻盛りなる比。うへぶしより未だ装束も改めずして。御階の下にてひとり花をながめられけり。霞み渡れる大内山の春の曙のよにしらす心すみければ。高欄に倚かゝり扇を拍子に打て。櫻人の曲を數反うたはれけるに。多政方が陣直つとめて候けるが。哥の聲を聞て花のもとに進み出て。地久の破をつかうまつりたりけり。花田狩衣袴をぞきたりける。舞はてゝ入ける時。櫻人を改めて葦山をうたはれければ。政方又立歸りて同急を舞ひける。をばりに花の下枝を折て後おどりて振舞たりけり。いみじくやさしかりける事也。此

想、恐當作相
けり、據一本補

事いづれの日記にみえたるとはしらねども。古人中傳へて侍り。博雅卿は上古にすぐれたる管絃者なりけり。生れ侍れるとき天に音樂の聲きこえけり。そのころ東山に聖心上人といふ人ありけり。天をきくに微妙の音樂あり。笛二笙二箏琵琶各一鼓一聞えけり。世間の樂にも似ず不可思議に目出たかりければ。上人あやしみて庵室をいで、樂の聲につきてゆきければ。博雅の生るゝところにいかりけり。生れをはりて樂の聲はとゞまりぬ。上人他人に語るることなく。數日をへてまた彼所へ向ひて。其生兒の母にこの瑞想を語り侍れるにとなん。彼卿は子息二人有とぞ號しける。其故は式部卿宮時の管絃者伶人等を卒して河陽に遊給けるに。明月の夜曉にのぞみて川霧深きうち。雙調の調子を吹て過る舟あり。其舟やうくきたりちかづくをきくに誠に神妙なりけり。我朝に比類なき笛也。誰人ならんと人々あやしう思ひあへるに。舟は霧にこめられて見えす。うちかひの音ばかり聞えてすてに船と行ちがふ時。親王誰にかと問給ひければ。信義と名乗たりけり。宮感情にたへず雙調の君なりけりとの給はせけり。それより天下みな雙調の君と號しけるとぞ。殿上の其駒は知りたる人すくなし。能信大納言法成寺の修正に。南門を入れてまいり

て。退出の時西門へまはされける程。立やすらひける間に彼曲を唱られたりけり。大宮右府俊家の頭の中將にておはしけるが。ついがきにそひてひそかにたち聞給けるを。能信卿見付にけり。中將おどろきさはがれけるを。能信卿其志を感じて。扇を拍子に打て此曲を授られにけり。其後彼家に傳はれり。堀河院中御門右大臣尊成にならばせ給ける時申されけるは。一説は誠におぼしめす人あらばをしへさせ給て。今一説は教へ給ふまじくばさづけまいらすべきよし奏し給ければ。申旨にたがふべからずと勅定有て。兩説ながら傳へさせ給ひてけり。嘉承二年崩御の後。右府人々にたれか彼曲習ひ給はりたると尋られけれども。習まいらせたる人なかりけり。おとれる説をも猶秘せさせ給けるにこそとて悲涙をながされけり。中御門内大臣子息大納言宗家卿外孫同宗能卿に授られたりけり。六波羅の太政入道經國嚴島の内侍に傳ふべきよし宗家卿に示されければ。歎ながら世にしたがふならひ。力およびておとる説を傳へらにれけり。但他人に教ふべからざる由をまづ起請をぞかゝせられける。多好方これを聞てかの内侍にとひければ。しらざるよしをぞこたへける。此曲は宗家卿冷泉内府にもをしへられたりけるとかや。

嘉承以下一本爲
別行

猶、一本无

に、據一本補

管絃はよくく用心あるべき事也。前筑前守兼俊殿上に笙吹なきによりて。昇殿を免さるべきよし沙汰有けり。まづ試有ける日。きさき笛を給ひてふかせられけるに。

べき、一本此下有事字、或是

用心なくして吹出しける程に。管の中に平蛛の有けるが喉にのみ入られにけり。むせてはつきまどひける程に。主上羣臣も笑ひ給て腸を断けり。おほきに嗚呼を表して。昇殿のさたもとまりにけり。かゝるためしあれば事におきて能く用心あるべき事也。なかに御物のつねにもふかれざらんは。まづ小息にて心みるべき也。宇治殿平等院を建立させ給ひて。延久元年の夏の頃はじめて一切經會を行はせ給けり。法會儀式堂の莊嚴心ことばも及びがたし。大行道樂に澁河鳥を奏しける。多政資一者にて一鼓かけて池の邊をめぐるとて。鴨のむなざりといふ秘曲をつかうまつりける。ときにとりていみじくなん侍ける。

朱俊、或當作隨身、依訓讀相涉而誤者歟

後冷泉院御時。白河院に行幸有て花宴侍けるに。殿上人樂を奏して南庭をわたりけるに。笙にはかにさける事ありて參らざりければ。既に事かけなんとしけるに。大外記中原貞親は笙ふくものなりければ。もし笙や隨身したると御尋有けるに。すなはち朱俊の懷より取出して侍ければ。叡感ありて殿上人の奏樂につらなりて南庭をわたりける。時にとりてめづらしくいみじくなん侍ける。大貳資通卿。管絃者どもを友なひて金峯山にまうづる事ありけり。下向の時路次に古き寺あり。其寺にありてやすみけるつるに。其邊を見めぐりけるに。一人の老翁のありけるをよびて。此寺をば何といふぞと問ければ。翁これをは豊等寺と申侍

志賀僧正、一本旁書云道風孫兵庫頭泰時の子也、據一本補

るところたふ。又寺のかたはらに井あり。これ榎葉井といふ。又うしろの山はなに山といふぞととふ。此山は葛城山なりとこたふ。人々これを聞て感涙をたれて。をのをの堂に入て寺をうちはらひて。葛城を數反うたひて歸りけり。筆築吹遠理が父阿波守にて下向の時。遠理其ともにおなじく下向しけるに。其年早魃の愁ありければ。とかく祈雨をはげめどもかなはず。七月ばかりに遠理其國の社其神可（參りて。奉幣の後に調子を兩三反吹て祈請の間。俄にから笠ばかりなる雲社其神可）のうへにおほひて。たちまちに雨下りて洪水に及びにけり。神感のあらたなる事。秘曲の地におちざる事かくのごとし。

志賀僧正明尊。本よりひちりきをにくむ人なりけり。或時明月の夜湖上に三船をうかべて管絃和歌頌物の人を乗せて宴遊しけるに。伶人等其舟にのらんとする時はく。此僧正筆築にくみ給人也。まかあれば用枝はのるべからず。とにがりなんすとてのせざりければ。用枝さらば打物をもこそつかまつらめとてあゝりてけり。やうく深更に及ぶ程に。用枝ひそかに筆築をぬき出して。湖水にひたしてうるほしけり。人々見てひちりきかとしひければ。さにはあらず手あらずなりとこたへて。何となきていにて居たり。まばらくありてつるにねとり出したりければ。かたへの樂人ども。さればこそいひつれ。よしなき者をのせて興さめなんすと色をうしなひてな

ける、據一本補、集賢本作し

げきあへる程に。其曲めてたぐたへにしてまみたり。聞人みな涙おちぬ。年比是をいとはるゝ僧正。人より殊になきていはれけるは。正教に筆葉は伽陵頻のこゑをまなぶといへる事あり。此言を信ぜざりける口おしき事也。いまこそ思ひまりぬれ。今夜の纏頭は他人に及べからず。用枝一人にあるべしとぞいはれける。此事を後くまでいひ出してなかれけるとぞ。
後三條院は管絃をば御沙汰なかりけり。去ながら中御門大納言宗俊の筆をきこしめして。此卿が筆はたいものにあらず。道におるてうへなきもの也と。御顔色も變じましくて御感有けり。白河院も此人の筆をきこしめしては。御落涙有てかんせさせけり。按察大納言宗季に仰られけるは。我宗俊が筆をきこして。おほく滅罪障に非管絃者嗚呼の覺えとるべき也とぞ。御感有ける。さて殊に御憐愍有けり。知足院殿は彼卿參られければ。いかなる奏事有けれどもきこしめされず。御筆さた有て毎度興に入らせ給也。

滅、原作聽、據一本改、御感、一本此上有御字

御、據一本補

永保三年七月十三日。主上殿下南殿巽角御座ありて。藏人盛長をして御琵琶牧馬をめしよせらる。則錦の袋に入て参りたりけり。御覽ののち大納言經信卿に引せられけり。きこしめして玄象といかにと仰られければ。大納言申されけるは。むかし前二條院御時。信明信義等をめしてこの御琵琶どもをひかせられけるに。信明は玄象。

日の、據一本補

信義は牧馬を彈ず。牧馬すぐれて聞ゆ。其時とりかへて玄象をひかせらるゝに玄象すぐれたり。其時琵琶の勝劣あらず。彈人によりけりと奏せられけるを聞しめして。玄象をとりいでゝひかせられけるに。まことに勝劣なかりけり。此事彼卿たしかにしるしおかれ侍り。

ぞ以下廿二字、一本元

院禪、原作經、據一本改補

大宮右相府薨去の後。七々日の思はてゝ人々分散しけるに。大納言宗俊卿ひとり舊居にといまり居て。心ほそく思はれけるにや。鬢かゝれけるつゝあてに。草子篋のふたを拍子に打て。万秋樂の序を唱哥にせられける。一句をしめては涙をおととして居給たりける。ことに風病おもき人にて。笛のつかにも紙をまきてぞつかはれける。しかふして紫檀の甲の琵琶をよくさむき時もひかれければ。近習の者どもは此人はそら風をやみ給ふにこそなどぞいひあへりける。又物狂の氣のおはするにやなどいひける。琵琶は箏笛ほどの堪能にはあざりけるとぞ。さりながら白河院御とき承曆年中に。飛香舎にして琵琶の明匠八人をめしける中に。此大納言は入られけるを。不堪のよしを申て再三辭し申されけれども。猶その清撰に入にけり。其八人は經信。宗俊。政長。基綱。院禪。今三人たれくにて侍るにか尋べし。

源義光は豊原時元が弟子也。時秋いまだおさなかりける時。時元はうせにければ。大食調入調曲をば時秋にはさづけず。義光には慥にをしへたりけり。陸奥守義家朝臣

候、一本元

る、原作か、據一本改

あはれ、一本作あはれ

も、一本元

閑所、原作のどか、據一本改

り、一本作れ

永保年中に武衛家衛等を責けるとき。義光は京に候てかの合戦の事をつたへきしけり。いとまを申て下らんとしけるを。御ゆるしなかりければ。兵衛尉を辭し申て。陣につる袋をかけて馳下りけり。近江國鏡の宿につく日。花田のひとへかり衣にあをばかまきて。引入烏帽子したる男おくれじと馳きたるあり。あやしう思ひて見れば。豊原時秋也けり。あはれいかに何しに來りたるぞと問ければ。とかくの事はいはず。只御供仕べしとばかりぞいひける。義光此度の下向物さはがしき事侍て馳下る也。伴ひ給はん事尤本意なれども。此たびにおきてはしかるべからずとしきりにとむるを聞ず。しめてしたがり給ひけり。力及ばてもろとも下りて。つるに足柄の山まできにけり。彼山にて義光馬をひかへていはく。とめ申せども用ひ給はて。これまで伴ひ給へる事其志あさからず。さりながら此山にはさだめて關もきびしくてたやすくとをす事もあらし。義光は所職を辭し申て都を出しより。命をなき物になして罷りむかへは。いかに關きびしくとも憚るまじ。かけ破りて罷り通るべし。それには其用なし。すみやかに是より歸り給へといふを。時秋なを承引せず又いふともなし。其時義光時秋が思ふ所を悟りて。閑所に打寄て馬よりありぬ。人を遠くのけて柴を切はらひて。楯二枚をしきて。一枚には我身座し。一枚には時秋をすへけり。うつばより一紙の文書を取て時秋に見せけり。父時元が自筆に書たる大食調入調曲の

くだれ、原作ただ、據一本改

其書、據一本補

譜。又笙はありやと時秋に問ひければ。候とてふところより取出したりける。用意の程まづいみじくぞ侍ける。其時是まできたひ來れる心ざし。定て此れうにてぞ侍らんとて。則入調曲を授けてけり。義光はかゝる大事によりてくだれば身の安否未りがたし。万が一安穩ならば都の見參を期すべし。貴殿は豊原數代の樂工。朝家要須の仁也。我に志をおぼさば。すみやかに歸洛して道を全ふせらるべしと再三いひければ。理におれてそのほりける。

要書

宇治左府御記云。

保延五年六月十九日。依爲入學吉日。平調入調習畢。即吹十返。以時秋爲師所望也。昨以消息觸權大納言云。明日習入調如何。返報云。尤可然者。

同廿日。習大食調入調。習時秋也。習則吹十返。昨日以吉日習平調。仍大食調不尋日次。昨習平調入調訖。後申權大納言息中。曰。平調入調已習。此後經一兩月可習大食調。歟如何。返報云。只可任意者。仍所習也。召時秋於南庭。給栗毛之馬一疋。置鞍下。時秋一拜退出。伴馬并舍人等外宿也。然而予有篋中。給之。至入調者有緣云々。昔時光習平調入調於時信。時信云。入調者四天王之常所令守護也。仍必給祿。時光清貧無財。以古泥障一枚奉時信云々。習訖之

之、一本元、當行緣、據下文或當作祿

由告權大納言。相副返事。被送故左近將監時光自筆譜二枚。

一枚平調入調。一枚大食調。々々々々入調。奥書載二
黃鐘調々々秘説。予披見之。一拜捧持賞歎矣。

堀河院御時。六條院に朝覲行幸ありけるに。池の中島に樂屋を構へられたりけるに。御所水をへだて、はるかに遠かりけり。博定勅をうけ給て大鼓をつかうまつりけるが。壺よりもすゝめて撥をあてけり。後日に博定元正におひて昨日の大鼓はいかゞありしといひければ。元正めてたくうけ給き。但少し壺よりすゝみてぞ聞えしといひければ。又とひけるは。つぼはうち入たるたびやまじりたりし。はじめをはり同じ程にすゝみて侍しかといふ。元正始終すゝみて終りにきと答へければ。博定扱は意趣に相叶ひたり。其故は樂こそ引はなれぬ事なればかすみわたれ。とをくて物をうつはひゝきのおそくきたる也。されば御前にては壺にうち入てよくぞきこしめさんとぞいひける。この心ばせ思ひよらざる事也。めてたしとぞ元正感じける。

院、據一本補

ち、一本作り

前所衆延章は名譽の者也。白河院御時六條内裏に行幸有けるに。朱雀院大納言俊明。延章を頻に舉申されければ。はじめめてめされにけり。勅定によりて右大鼓をつかうまつりけるに。皇仁に拍子をあやまちにけり。笛は正清元正なりけり。元正が吹とるの皇仁年比きくに。延章が説にたがはざりければ。其旨を存ずる所に。今度異説を吹たりけるに。失度拍子をあやまちにけり。延章樂屋に入て元正をうらみていひけ

知、一本元

る。年比貴説をうけ給るに愚説にたがはず。それに此たびは異説を吹給て拍子おとさしむる事。いきながらくびをきらるゝ也といひければ。元正云。またくあやまらざる事也。申さるゝがごとく傳ふる所まことにかはらず。されども面笛正清也。その伏息のほど笛を元正にゆづる。吹出には彼人の説をふかずして。豈他説をもちるんや。大鼓の撥をとらるゝばかりにては。いつれの説をも慥にこそは存知し給はめとぞ云ける。なだらかに目出度ぞ侍ける。是笛吹を背て我がしこにもてなすがいたす所也。大鼓の撥をとる日は笛吹とよくいひあはせて存知すべき事也。古人の傳ふる所也。

祝は、一本元

嘉保二年八月八日。院に行幸ありて相撲を御覽せられける。江帥兼日に式をつくりて奉りける時。舞人狛光季申けるは。万歳樂をとめて賀殿を奏せんと思ふ。そのゆへは一には万歳樂は毎年に御覽せらるゝ曲也。一には祝は賀殿おなじかるべし。一には舞興賀殿まされり。一には此院新造たり。賀殿の儀あひかなへり。江帥このよしを奏せられければ。しかるべき由勅定ありてまづ賀殿地久を奏しけり。其時の内裏は堀河院。仙洞は閑院にて侍けり。程ちかければかちの行幸にてぞ侍ける。

けり、一本作り

長治二年正月五日朝覲行幸ありけるに。胡飲酒中院右大臣童にて舞給けり。左衛門督。右大弁宗忠。宰相中將忠教絲竹にたへたるによりて。樂屋の前に座を敷て着座せ

柏、一本旁書云
袍。

な、原作代、今暫
從一本

られけり。舞いまだをばらざりけるに。法皇の召によりて胡飲酒の童參りけり。靴をぬかず御前の簀子に候ければ。主上紅の御柏を給はせけり。右大臣傳へ給はせけり。童庭にありて舞てしりぞき入ければ。父の内大臣庭にありて拜舞し給ひけり。一家の人々みな下殿せられける。ゆゑしくぞ見え侍ける。御遊に忠教卿笛をふかれけるを。主上とめおはしまして。みづからふかせ給ひけり。胡飲酒のわらははふえふき給ひけり。めづらしくやさしくぞ侍りける。

嘉承二年三月五日鳥羽殿に行幸ありて六日和哥の興ありけり。序をば中納言宗忠ぞかしれける。次に御遊。主上笛をふかせおはしましてける。殿下箏。宗忠卿拍子。宗通卿付哥。新中納言基綱卿琵琶。左京大夫顯仲卿笙。俊頼朝臣篳篥。有賢朝臣和琴。家俊朝臣付哥。安名尊三反。櫻人一反。席田二反。鳥破急。賀殿急。律青柳二反。万歳樂。五常樂急。絲竹のしらべことに面白かりけり。法皇は籬中にてぞ聞しめしける。感興のあまり密々に北面の御所のかたに。中納言顯通卿以下をめされたりけり。殿下もまいらせ給ひけるとぞ。盃酌朗詠今様など有けり。八日主上御船にめして御遊有けり。その後舞樂御贈物勸賞などありて還御ありけり。

堀河院御時。節會につねよりもいそぎ入御ありけるを。人々あやしう思ひける程に。御膳宿のかたにて立樂の時になりて。皇帝を吹出させおはしたりけり。めづらしく

いみじかりける事也。彼右府のしるしをかれたるとかや。尋ぬべし。

季通のいはれけるは。非管絃者口惜事。堀河院御時平調にて御遊ありしに。物の音よくしみて漸曉に及ぶに。五常樂急百反に及べは。草木も舞なるものをあるべしとてあそばされ侍しに。五十反ばかりにて天明ければ。時元排て見るに。庭樹のうごくをみて。さて舞めるはと申けるを。目出たき心ばせかなと人々いひて感じ思ひけるに。顯雅卿いまだ殿上人にて。無能にてその座に候だにかたはらいたきに。奏云われは風の吹候へばうごくに侍りと申たりけるに。満座わらひけり。

同院の御時樂敵の事ありけり。殿上三臺を奏す。主上御笛あそばしけり。破二反。急三反。さらに又急數反あり。この答に地下五常樂を奏す。笛時元。序後詠の段々つねのごとし。破六反畢て急を奏するに。殊に徹感ありて樂をとむむべからずと天氣ありけり。其間に夜月窮鼻ぬ。地下の勝になりけり。樂所預小監物源頼能は上古に耻ざる數寄の者也。玉手信近に順て横笛を習けり。信近は南京にあり。頼能其道の遠きをいとせず。或は隔日にむかひ。或は二三日をへだて、ゆく。信近ある時にはをしへ。或時には教へずして遠路を空しく歸るありも有けり。或時は信近荒田にありてその虫をばらひければ。頼能も隨ひて朝より夕にいたるまでも共にはらひけり。扱かへらんとする時たましく一曲を授けり。ある時は又豆を荊所にいたりて又是を

敵、原作歌、據一本改○けり、據一本補
殊に、據一本補
けり、一本作け
れ○に、據一本
補○樂所以下恐
當爲別行
に、據一本補○
荒、原作武、據一
本改
所、一本作時

かり。剋をはりて後鎌の柄をもて笛にして教へけり。かくして其わざをなせる者也。更に下問をはぢず貴賤を論せず訪學しけり。天人樂をば八幡宮寺の橋上にて大童子に習ひたるとぞいひつたへたる。頼能は博雅三位の墓を知りて。ときく参向して拜しける。まことによく數寄たるゆへなり。

のぞみ、一本此下有事字、昨一本作昨

哉、一本无

知足院殿何事にてかさしたる御のぞみ。ふかきりける事侍けり。御歎の餘り大權坊といふ効験の僧の有けるに。陀祇尼の法を行はせられけり。日限をさしてしるしある事なりけり。責ての懇切のあまりに件の僧をめて仰合られけるに。僧の申けるは此法いまた疵つかず。七日が中にしるし有べし。若七日に猶しるしなくば今七日をのべらるべく候哉。それになはずはすみやかに流罪に行はれ候へかしときらびやかに申てけり。仍供物以下の事注進に任せて給てけり。さて始おこなふに七日に験なし。その時すでに七日に験なしにかにと仰られければ。道場を見せらるべくや。たのもしき験候也と申ければ。則人をつかはして見せられければ。狐一疋來て供物等をくひけり。更に人におそるゝ事なし。扱其後七日のべ行はるゝに。まんずる日知足院殿御晝ねありけるに。容顔びれいなる女房御枕をとをりけり。その髪かさねのきぬのすそより三尺ばかりあまりたりけり。あまりにうつくしうえんにおぼしけるまゝに。そのかみにとりつかせ給ひぬ。女房見かへりてさまあしう。いかにかくはと

えん、原作、かえん、一本改

房、據一本補

收、原作れ、今意

國成、一本此下有卿字

申ける聲はひかほのやう。すべて此世のたぐひにあらず。天人のあまくだりたらんもかくやとおぼえさせ給て。いよゝまのびあへさせ給はて。つよく取とめさせ給ひけるを。女房あしく引はなちて通りぬと覺しめしける程に。その髪きれにけり。かたはらいたくあさましくおぼす程に御夢さめぬ。うつゝに御手にものかにしてあるを御覽じければ狐の尾也けり。不思議に覺しめして。大權坊をめて其のやうを仰られければ。さればこそ申候つれ。いかにむなしかるまじく候。年比嚴重のしるし多く候つれども。是程にあらたなる事はいまだ候はず。御望の事明日午の刻にかならず叶ひ候べし。此上は流罪の事は候まじくやと狂申出にけり。かつとて女房の装束一襲かづけ給けり。申すがごとく次日午刻に御よろこびの事公家より申されたりけるとぞ。攝籙の一番の御まつりごと大權房をば有職になされけり。件のいき尾はきよき物に入てふかくおさめにけり。やがて其法を習はせ給て。さしたる御望などの有けるには。みづから行はせ給けり。かならず験ありけるとぞ。妙音院の護法殿に收られけるいかいなりぬらん。其いき尾の外も又別の御本尊有けるとかや。花園のおとこの御跡冷泉東洞院に御渡りありし時も。ほこらをかまへていはれたりけり。福天神として其社當時もおはしますめり。此福天神の不思議たほかる中に。寛喜元年の比七條院に式部大夫國成といふ者あり。越前の目代にて侍しかば。其時

目代入道とぞ申ける。其子息に左衛門尉なにがしとかやいひて。四條大納言家に祇公の間。夕暮にかの亭冷泉方里小路より退出の時。大炊御門高倉邊にて立とまりて。あなちもしろの箏の音やといひて。行もやらす打かたぶきて面白がりけり。そこにある男に是はきくかといふ。更にきかずとこたへければ。いかにや是程に面白き箏をばきかぬとて。猶ひとり心をすまして立たりけり。さて家に行つきて。やがて胸をやみ出して淺ましく大事也。其うへ物ぐるはしくて。西をさしてはしり出んとしければ。したゝかなる者ども六人して取といめけるに。其力のつよき事いふばかりなし。高くおどりあがりてかしらを下になして。肩を板敷につよくなげれば。只今に身もくだけぬとぞ見えける。其時法深房いまだ俗にて。大炊御門東洞院の山かの中納言局の家の北對をかりうけてゐられたりけり。此病者が家はたゞ東にてぞ侍ける。そなたへゆびをさしてゆかんとするを。父たがもとへゆかんと思ひてゆびをばさすぞ。西藤馬助こそおはすれ。かれへゆかんと思ふかと問ければ。病者うなづきけり。さらばよび申さんはいかにといへば。悦たるけしきにてうなづきけり。其時馬助のもとへ行て。此やうをいひければ。あやしき事也とて。則あひ共に病者のもとへ行ぬ。病者馬助を見て。さしも狂ひつるがしめくとしづまりて。みづから烏帽子をとて。打かつぎて。ふかくかしこまりたり。あたりに六七人ゐたりける看病の者ども

行、一本元

び、原作に、據一
本改
て、據一本補

を次第にらみけり。よにあしげに思ひたりければみなのかけてけり。父の入道ばかりかたずみに引入て居たりけるを。猶あしげに思ひてにらみければ。それをものけてけり。馬助と只一人むかひて。其けしき殊に事よく心ゆきたるけしき也。猶かしこまり恐れたる事限なし。扱馬助何しにめされ候けるぞといへば。いよくふかくかしてこまりて。始めて言葉を出していひけるは。御邊ちかく候物にて候。見參に入たく候てといふ。馬助さ候へばめしにしたがふて參り候。何事も仰られ候へといへば。病者あまりに御箏御琵琶御こゑわざなどの承たく候といふ。馬助やすき事に候。其道にたづさはりたる身にて候へば人をきらふ事なし。たゞ聞たがる人を悦びつかうまつれば仰に隨ふべしとて。則琵琶を取寄て引て聞するに。打うなづきく。て左右へ身をゆるがして。心とけたるさまあらは也。引はて、置ければ。又御箏の承たく候といふ。則いふがとくに引けり。面白がる事先のごとし。其後朗詠催馬樂などさましく。このゑわざども所望に隨ひてつくしければ。あさましくうれしげに思ひたり。扱馬助いひけるは。仰に隨ひて諸藝どもつかうまつりぬ。此御望は幾たびなり共やすき事也。聞度おぼさん時は懼り給べからず。かやうによのつねならぬ御けしきならて。今よりはのどまりて仰られよといへば。病者又かしこまりつく。かやうの身がらにては。かくうるはしからでは見參の便宜候はてといふ。馬助左候は、いとま給はり

て、一本作ん

のほり、一本作の外

て罷なん。ちと物をめし候へかしといへば承伏しけり。則白き米をかはらけに入たるを。うちあはびとををしきに入てとり寄すむれば。米をうちくみて。ことにはおとよげにからくひけり。打あわびをとりあはせて。只一兩口にやすくひてけり。其くひやうも普通の儀にあらす。さて酒をすむれば日來はすべて一かはらけだにもえのまぬ下戸なりけるが。大なりし大かはらけにて二度のみてけり。今一度とすめて又一度のみつ。此うへはさらばとて馬助は歸りぬ。さる程に曉に及て。父入道又來ていふやう。御歸の後又くるひ候也。さりとは今一度御渡り候て御覽せよといふ。すなはち隨ひて來ぬ。實も其くるひやうおびたしくおそろしかりけり。馬助來ていかにぎやうくに人をばすかさせ給ぞ。何事も仰らるゝに隨ひて。もろくの事ほどこして聞せ奉りぬ。今は御心ゆきていとまを給りて歸りつれば。心やすくこそ思ひ給に。やがていつしかかくおはすべき事かはとはしたなげにいひければ。その事に候。猶所望の事ども残て候也。琵琶には手と申て目出たき事の候ぞかし。それが承たく候てといふ。馬助やすき事さらば一どには仰せられでて。則風香調平一兩引て聞せけり。まめやかに面白げに思ひて。打かたぶきく聞けり。其時琵琶の手はきかせ給ぬ。箏の調子はいかに。これ程すかせ給たれば心おちて引てきかせ奉らんとして。三段のほりかきあはせ井梅花といふ撥合など引てきかせけ

候、一本補

れば。たな心合せて面白がりけり。かくする程に夜すてに明て。壁のくづれより日影のさし入たる穴より。犬の鼻をふきて内をかぎけるを此病者見て。扇をすへ顔の色かはり恐れちのきたるけしき也。こゝにかの福天神の所爲と悟りて犬を追ひのけつ。其後けしきなをりてけり。今は心ゆきぬらん。罷歸らん。見參に入候ぬるうれしく候。御社へも參りてものねあまたそろへて。樂してきかせまいらすべしといへば。昔つねに承る事にて。其御名残なづかしく候て。おそれながら申て候つる也とぞの給ひける。扱馬助歸りぬ。其後病者打ふし。申刻ばかりまではおきもあがらざりける。此事あはれに覺えて。尾張の内侍讃岐などさそひてかの社に詣て。箏琵琶引てきかせ奉りけるとぞ。

候、一本補

侍従大納言成通。雲林院にて鞠を蹴られけるに。雨俄にふりたりければ。階隱の間に立入て階にしりをかけて。しばしはれ間をまたれける程。雨ふれば軒の玉水つづくといはれや物を心ゆくまで。といふ神哥を口ずさまれける程に。格子の中よりをしあけて女房の聲にて。このほどこれに候人の物の氣をわづらひ候が。只今御聲をうけ給て。あくびてけしきかはりてみえ候に。いますこし候なんやとすめければ。沓をぬぎて堂の中へ入て木丁の外にゐて。

候、一本作ける
木丁、一本作几帳

いづれの佛のねがひより。千手のちかひぞたのもしき。
かれたる草木もたちまちに。花さきみなるとときたれば。
といふ句をくりかへしくりかへしうたひて又。

藥師の十二の誓願は。衆病悉除ぞたのもしき。
一經其耳はさておきつ。皆令満足すぐれたり。

これらをうたはれけるに。ものけわたりてやうくの事どもいひて。其病やみに
けり。かならず法験ならねども。道達せる人の藝には靈病も恐をなすにこそ。

天永三年三月十八日御賀の後宴に。舞樂はてし御遊の時。中納言宗忠卿拍子。治部卿
基綱卿琵琶。中納言中將(應)等。中將信通朝臣笛。少將宗能朝臣笙。伊通和琴。越後守
敦兼筆築。呂は安名尊。席田。鳥破。律は青柳。更衣。鷹子。万歳樂。主上催馬樂を付う
たはせ給ける。めづらしく目出たかりける事也。仰せによりてさらに又更衣鷹子な
ど數反ありける。興ありける事也。

京極太政大臣宗輔。内裏より罷出給けるに。月面白かりければ心をすまして。車の内
にて陵王の亂序を吹給けるに。近衛万里小路にてちいさき人の陵王の裝束をして。
車の前にてめてたく舞みえけり。あやしく覺えて車をかけはづして。榻にしりかけ
て一曲みな吹とをし給にけり。曲のをはりに此陵王。近衛より南万里小路より東の

破、據一本補

ける、一本元

作に、一本元、或當

すみなる社の内へ入にけり。笛曲も神感有けるにこそ。やむごとなき事也。

舞人多資忠死去の後。胡飲酒採桑老曲かの氏に絶にければ。久我太政大臣胡飲酒を
將曹多忠方にをしへ給ひけり。採桑老はをしふるものなかりけるに。天王寺舞人秦
公貞此曲を傳へたりければ。院の仰によりて右近將曹多忠方にをしへてけり。

保安五年正月朝觀行幸に。近方採桑老をつかうまつるべきにて有ければ。四年十二
月一日仙洞にて近方採桑老をつかうまつりて。一院新院御覽せられけり。能俊卿以
下御前に候けり。近方庭中に出ける時。樂人公貞扶持しけり。舞終りて公貞をも舞せ
られけり。太神元政多近方がもとへ早朝に來れる事有けり。近方いそぎ出合たりけ
り。元政八幡へまかる使にきと申へき事ありて詣てたるといひければ。しばらくと
どめて盃酌などすしめけるに。元政が云。八幡へは罷り侍らず。けふは元賢に拍ぶえ
ふかせんれうにまいれる也。百千の秘事を教へたりといふとも舞人の御心になは
ざらん笛吹何にてもあるまじ。元政年たけて命けふあすともしらず。しかれば是を
きかせ申さんと思ひて。けふはぐして參れり。大事ありともたがはずして聞給へと
いひければ。近方興に入て成方并近久がいまだ小童にてありけるを。よび出して舞
せて笛を聞けり。終日ふかせて拍子をあぐる所の事をしたしめき。近方ことに感じ
申けり。元政涙をながして悦事かぎりなし。扱元政が云。右の樂はけふしたまり

ぬ。秘曲をばみな傳教候。此うへはあつから不審ならん事をばいもうとの女房にいひあはすべしとぞいひける。件の妹は女房ながら元政におとらぬもの也。安井の尼とぞいひける。夕霧事か。

ぶ、一本作む
は、一本元

保延元年正月四日朝觀行幸に。多忠方胡飲酒をつかうまつりけるに。此曲たびく御覽せられつるに。今度ことに勝れたるよし。おほやけわたくしきたありけり。左大臣勅をうけ給りて一階をたぶよし仰下されければ。忠方再拜して舞て入けり。かゝる程に忠方右舞人たりといへども左舞を奏して勸賞をかうぶる。左かならず賞を行はれずとも何事かあらんや。又狛光則。多忠方。いづれ上臈たるぞやのよし議定ありければ。左衛門督雅定卿申されけるは。光則忠方同日に勸賞はかうぶりて叙爵す。多は朝臣なるによりて内位に叙す。狛は下姓によりて外位に叙す。忠方上臈たるべしとぞ申されける。よく舞によりて賞をかうぶる。光則よく舞はし行はるべし。幽ならずは行はるべからずと申けり。或は左右ともに行はるべきよしをも申けり。光則七旬に及べり。哀憐有けるにや。つるに散手を奏する時一階を給てけり。むかしはかく燕によりて賞のさたありけり。近頃より其善惡のさたまでもなくて。たゞ一者になりぬれば。左右なく賞を行はるゝ習になれば頗無念の事也。

かく、一本元

に、原作さ、據一
本改
取、一本作殿、恐
非

か、一本作此

に、一本元

て、據一本補

り、一本作ト

將にておはしけるが。すゝみ参りて輪臺の垣代の笙吹雅樂屬清方。左近將曹時秋。音取を相論のよし奏せられければ。殿下院に申させ給けり。院おぼしめしえざるよし仰ありけり。殿下左大臣に尋申されければ。左府申されけるは。笙との外に勝劣あり。先例官の上下臈によらず。譜代をえらひ用ひらるゝ事也。もし清方用ひられれば笙のためきたなき事也と申されければ。殿下此よしを樂行事の司に仰られけり。是を聞て中院右大臣の大納言にておはしけるをはじめとして。悦ぶ人々おほかりけり。かの右府は時秋が弟子にておはしける故也。

長五年正月廿七日に。八幡行幸の還御の次に鳥羽殿に入らせおはしまして。廿八日に朝觀の禮あり。垣代の笛雅樂大夫戸部政氏はふえの一にて侍れ共。左近將監大神正賢立よりてうたへ申て吹たりしは。保延のためしにて侍けるにや。戸部氏こそ本牀にて侍しに。近代大神氏にほかせをとられて。かやうに正賢にもこたへられけるにこそ。

同三年六月廿三日。宇治左府内大臣にておはしましける時。院御所ちかゝりける御宿所にて。大との箏を。おとゝ權大納言笙。六條大夫基通笛にて御あそびありけるに。孝博月にのりて参りて琵琶を弾じけり。天曙てぞ大納言かへり給ける。

同廿六日院御所にて御遊ありけり。大殿女房右衛門佐箏。新大納言宗能。孝博琵琶。内

大臣。權大納言雅實。笙。左衛門尉元正笛。能登守季行篳篥。宮内卿有賢拍子にて。盤調
盤涉調曲を奏せられけり。夜ふけて折櫃のうへに折敷をおきて。けづり火をすへて
公卿の前におかれけり。院には御臺にてぞ供せられける。寢殿の南面にて此あそび
は有ける。孝博元正はみぎりのもとにたゝみを敷て候けり。夜明る程にぞ出にける。
これほどに道にたれる人々のうちつゞき管絃の興ありける。いかにめてたかりけ
ん。ありがたきためし也。

同五年の宇治の一切經會に。雨ふりて四日行はれけり。大殿。尼北政所。内大臣殿御
わたりありけり。大殿弟の笛を清延に吹こゝろみさすべきよし仰られければ。内大
臣后宮亮顯親朝臣をして清延をめしてたびける。事はて返上すとて。所々こ
はき穴候へども。心えてつかうまつり候へば。神妙に候也とぞ申ける。つきづゝ志か
りけり。清延は清正が子。笛の一のものにてぞ侍りける。

或所にて會遊ありけるに。時元笛を吹けるが。しばらくやすみけるに時廉蘇合序を
吹けり。時元聞てあはれ正念なく吹もの哉。かゝらんには興なくやとて。笙をはりて
中間に兩所かさねておけて吹たりける。誠優美なりけり。侍從大納言のいはれける
蘇合序は廿拍子なり。しかある今の世には十二拍子を用ひて。殘る八拍子をばもち
ひぬ。いはれなき事也。舞又たらず。そのゆへは舞は手のあひかはる五拍子也。此五拍

第一本作才
后、據一本補

はしく、一本作
一字、亦似通

こそ、原作こそ、
據一本改

る、一本元

子をはじめは東にむきて舞。次第に南に向て舞。次に西に向てまひ。次に北に向てま
ひ。各五拍子を舞也。同じ手を方をかへて舞也。しかあるを近代は南に向て三拍子。
北に向て五拍子をまはざる也といはれければ。舞人光近聞て。五拍子方をかへて舞
事またくさる事なしとぞいひける。抑序奥八拍子はたえて久しくなれり。しかるを
かの亞相ひとり傳へられたる事もおぼつかなき事也。されば元正しくつたへたり
けるにや。此事覺束なし。蘇合三四帖共に奏する時。籠拍子兩帖にうたずして四帖に
用る事は。頼能是季時元等の説也。しかあるを季通朝臣いはれけるは。蘇合は三帖を
肝心とするが故に。かならず此帖に打べしとぞ侍ける。明暹宗輔等は兩帖共に打べ
きよし申されけり。堀河院御時御遊ありけるに。蘇合一具とをされけり。三帖を奏し
て後宗輔卿奏すべきよしを仰下しけり。これ天氣也けるにや。此時の樂人元正以下。
宗輔の與奪を聞て此人心ちとりすとぞつぶやきける。是は三帖にうたずして四帖に
うつべき由を思て。さらば三帖の時こそいはれめと思ひて。かくつぶやきけるなる
べし。此條はいはれなき事にや。兩帖共に打事は又正説也。妙音院殿も兩帖共に打べ
き由遣にみるしおかれたり。是によりて其御流をうけたるものみな兩帖にうち侍
り。寶治三年六月仙洞御講に蘇合一具侍しに。予大鼓つかうまつりしにも兩帖に打
侍き。且是法深坊に申あはする所也。

知足院殿仰られけるは。方秋樂はゆるらかに吹べしと人はみなしりけれども。しんじつはせめふせて吹べき也。頼能もさぞ吹ける。あひつぎて大納言宗俊卿もけすらふ時せめ伏せて吹也。

白河院御時。新院三條殿にわたらせ給ひしに。中門の廊にして新院件序吹せ給ふに。宗能卿御供してつかうまつる。其時も責伏せてぞふかせ給ひける。白河院寝殿の御儀を賽て再三御感有て。今^一度^一と仰らるゝ事五六度に及びけり。故實をしるしめして御感有けるこそいみじき御事なれ。

同院筆をひかせ給けるあり。初夜のかねはつきぬるかと御尋有けるに。聞たる者なかりけるに。釜殿が申けるは。御前のかたにこそかねのこゑは聞え侍つれと申けるを。人つたへ申ければ。我筆はいたりにけり。よき筆はかねのこゑに似たるなりとぞおほせられける。

鳥羽院八幡に御幸有て御神樂行はれけるに。みづから御笛をふかせ給けり。本拍子徳大寺左府納言にてとり給けり。末拍子按察資賢卿の殿上人にてとられけり。備後前司季兼朝臣庭火の本哥をとなへけるに。秦兼弘人長にてもろ哥を仰すとて。外山なるうたふ時おほせけるにも。末句をうたはて季兼朝臣しりぞきにける。其説をしらぬこそと世の人いひけり。櫛のふりに末句をうたはざるは故實にて侍るとなん。

一、據一本補
二、原作三、據一本改

柳、一本作柳

長、一本作ハ

颯、原作颯、據一本改

な、一本元

季兼朝臣歸洛しけるに。作道にてうしろのかたよりはせ來たるものありけり。見歸たれば多近方也。はせつきていひけるは。あながしこ此事ちんし給な。たゞしらざるよしにておはしますべし。若ちんじ給はゞ秘説あらはれぬべしとぞいひける。兼方がしらざりければ兼弘はしらぬはとほり也。拍子とりて出たつとき。人長輪を冠にかけて引とむむるとかや。是秘説にて侍り。

康治元年三月四日。仁和寺の一切經會に兩院御幸有けるに。入道殿下參らせ給けり。春鶯轉を舞ける時。行則申けるは。光時颯踏急聲二反を舞。行則一反を舞。第二の切絶たり。入道殿仰られけるは。第二反のたび則舞べからず。是によりて第二反の時はひざまづきて候けり。京極大相國宗輔其時大納言にて候はれけるが申されける。康和御賀に光時が曾祖父光季第二反たゆるよし申侍りき。いま光時二反をまふいか。もし光季秘藏しけるにや。宇治左府御記には。件の卿もとより光時をにくみていはれけるにやとぞかき給て侍るなり。

同二年八月。新院青海波を御覽じけり。垣代の不足に武者所をめしたてられけるに。胡籥をおはざりけるをみて。舞人光時申けるは。白河院御時此儀有しかば。武者所みな胡籥を負て侍き。今其儀なし。世の陵遅ことにおきてかくのごとし。其後又此舞を御覽じける時には。武者所に仰て胡籥をおふたりけるは。光時が一言上聞に及ける

にや。光時に御馬をぞ給はせける。

久安三年九月十二日。法皇天王寺へ御幸有けり。内大臣御供に候はせ給ひけり。十三日念佛堂にて管絃有けり。歌并笛資賢。笙内大臣。箏樂俊盛朝臣。但不堪のよしを申てふかざりけり。琵琶信西。第六波羅別當覺暹。法皇笛をふかせおはしますとて。沙門の身にて此事あざけりあるべしとて。障子にみかくれさせおはしますけり。御出家の後此たびはじめてふかせおはしますけり。先雙調。鳥破。同急。賀殿急。安名尊。妹與我。次平調。万歳樂。慶雲樂。三臺破。同急。五常樂。同急。扶南。老君子。廻忽。甘州。陪臚。伊勢海。我門。更衣。淺水。稍鴛鳥。盤涉調。秋風樂。初三帖鳥向樂。万秋樂。一帖蘇合帖。三五急。採桑老。蘇莫者破。青海波。竹林樂。三三柏柱。千秋樂。此外催馬樂ありけるとかや。朗詠今様風俗など數反ありけり。資賢朝臣ぞつかうまつりける。朗詠は法皇御發言有けるとぞ。其後としもりあそん讀經つかうまつりけり。人々興にせうじて覺暹信西揚眞操彈けり。法皇のおほせに。資賢は催馬樂のみちの長者なりとゑいかん有けるは此たびの事也。いかにめんぼくに思ひけん。

同三年十一月卅日。院にて舍利講を行はれけり。人々參りて後。信西をもて平調盤涉調のあひだ定め申べきよしおほせられければ。内府は此道にふかゝらずとて定め申されず。左大將雅定。中御門大納言宗輔。ぞ平調よろしかるべしと申されける。侍從中

等、一本元

更、一本脱〇三
一本元
柏悉當作白

こや、一本作
にや、
より、原作より、
據上文及一本改

左、據補任當作

面、一本脱

納言成通。は盤涉調たるべき由申されけるとかや。平調たるべきよし勅定有けり。内大臣。左大將笙。侍從中納言。左衛門督ふえ。季行朝臣ひちりき。讀經ありけり。大納言伊通卿朗詠せられけり。右衛門督公教。季兼朝臣いまやうをうたふ。次壹越調。又盤涉調曲などもありけり。左大將多近方に命じて國風をうたはせられけり。扱も今度万歳樂三反ありけるに。その第三反に雅樂大夫清延なを半帖をもちみたりける。人あやしみとしけり。

同六年十二月。大宮大納言隆季卿殿上人の時。左近府の拔頭の面形を借請ておかれたりけるに。八日の夜の夢にかちかぶりしたるもの來りて。彼面形はやく府にかへすべし。久しくわたくしにをく事なかれといふと見てさめにけり。おどろきて其面形を見ければ。裏の銘に右相撲司延曆廿一年七月一日造と書たり。をそれおのゝきてやがて府にかへされにけり。

古今著聞集卷第六終

古今著聞集卷第七

能書第八

尺牘の書疏は千里の面目なりといへり。凡六女は跡のすがたをあらはす輩。驚懸反
鵠のいきほひをならふ人。わづかに一字の跡をのこして。はるかに万代のほまれを
いたす。もろくの藝能の中に手跡まことにすぐれたり。

御、據一本補

も、據一本補

御、一本元、當行

日、集覽本作月

て、據一本補

せと有けるは。是は唐人の手跡なり。其名をしらず。いかにもかくはまなびがたし。
目出たき重寶なりとしきりに「御」秘藏ありけるを。大師よく「い」はせまいらせて
のち。是は空海がつかうまつりて候物をと奏させ給たりければ。天皇さらに御信用
なし。大きに御不審ありて。いかでかさる事あらん。當時かゝるやうにはなはだ異す
るなり。はしたて「も」及ぶべからずと勅定有ければ。大師御不審まことに其いはれ
候。軸をはなちておはせ目を「御」窺覽候べしと申させ給ひければ。則是なちて御覽
ずるに。その年その日青龍寺に於て書之沙門空海と記せられたり。天皇此時御信仰
有て。誠にわれにはまさられたりけり。それにとり「て」いかにかく當時のいきほひに
はふつとかはりたるぞと尋ね仰られければ。其事は國によりて書かへて候也。唐土
は大國なれば所に相應していきほひかくのごとし。日本は小國なればそれにしたが
ひて當時のやうをつかうまつり候也と申させ給ひければ。天皇大きにはぢさせ給ひ

ける、一本此下
有ふり二字

中、據一本補

て。其後は御手跡あらそひもなかりけり。
大内十二門の額。南面三門は弘法大師。西面三門は大内記小野義材ヨシキ。北面三門は但馬
守橘逸勢。をのく勅をうけ給て垂露の點をくだしけり。東面三門は嵯峨天皇かゝ
せおはしましける。まことにや。道風朝臣大師のかゝせ給たる額を見て難じていひ
ける。美福門は田廣し。朱雀門は朱雀門と畧頌につくりてあざけり侍ける程に。やが
て中風して手わなゝきて手跡も異やうに成にけり。かゝるためしをそれられけるに
や。寛弘年中中に行成卿美福門の額の字を修飾すべきよし宣旨をかうぶりける時は。
弘法大師の尊像の御前に香花の具をさゝげて。驚覺して祭文をよまれけり。件の文
は江以言ぞ書たりける。

今蒙明詔而欲下墨。則疑有黷聖跡之冥譴。更憚聖跡而將闕筆。亦恐
拘辭明詔之朝章。晋退慙心。胡尾失步。伏乞尊像示以許否。若可許可。請
者。尋痕跡而添粉墨。若不許不請者。隨形勢而廻思慮。王事靡盬。盍
鑿於此。尙鑿。

とぞかゝれて侍りける。此門ども或は焼失しあるひは顛倒して。今はわづかに安嘉
待賢門のみぞ侍りける。實にや此安嘉門の額はむかし人を取りける。をそろしかり
ける事かな。

今は、據一本補

延喜の聖主醍醐寺を御建立の時。道風朝臣に額かき參らすべき由仰られて。額二枚を給はせけり。一枚は南大門。一枚は西門の料也。眞草兩様にかきて奉るべき由勅定有ければ。仰にしたがひて兩様に書てまいらせたりけるを。眞に書たるは南大門の料なるべきを。草の字の額をはれの門にうたれたりけり。道風是を見ておはれ賢王也とぞ申ける。其故は草の額殊に書すましてもほえけるが徹慮にかなひて。かく日比の義あらたまりてうたれける。まことにかしこき御はからひなるべし。それをほめ申なるべし。

知足院入道殿。法性寺殿と久安の比より御中心よからずおはしましける時。法性寺殿まいらせ給たりけるに。こゝろみ申されんれうにや。四枚屏風を一帖めしよせさせ給ひて。是に物書て給へと申されたりけるに。御硯引よせさせ給て。墨をしばしすらせ給て。中にもちいさかりける筆をとらせ給て。紫蓋之峯嵐疎と三句を大文字にて四枚に書みてさせ給てまいらせられたりければ。禪閣御覽じて。これは重物なりとて。やがて寶藏に收られけるとぞ。

大納言なる人の若公を清水寺の法師に養はせけり。父もしらざりければ母のさたにてやしなはせけるに。乳母法師になして清水寺の寺僧になして。名をば大納言大別當とぞいひける。こちなかりける名なりかし。件の僧以外の能書を好みて。心ばか

蓋、一本作監

大、據一本及下文補、原作の、今從一本

つた、據一本補

りはたしなみてわれはとぞ思たりける。當寺の額は侍從大納言行成の書給へる也。年ひさしく成て文字みなきえてかたばかり見ゆるに。此大納言大別當文字のみな消うせぬとき我修復せんといへば。古老の寺僧等さしもやんどなき人の筆跡をば。いかいたやすくとめ給はんとかたぶきあひければ。いかなる聖跡重寶なりとも。あとかたなく消うせんには何の益かあらん。別してわたくしの點をもくはへばこそ憚もあらめ。かたばかりも其跡のみゆる時。もとの文字の上をとめてあざやかになさんは何の難かあらん。ふるき佛にもはくをばあすぞかしなどいへば。誠にさもありとてゆるしてけり。其時額をはなちてあらたに地彩色して文字の上とめてけり。かゝる程に次の日俄に雷電おびたしくきて。その額を雨そそぎてみな墨を洗ひて。只もとのやうになしてけり。ふしぎの事也。いかなるよと雨にもかく額のぬるゝ事はなきに。そのうへたとひ雨にぬれんからに。やがてすこしももとにたかはず。さいしきも文字も消うすべき事かは。是はたゞ事にあらずあそろしきわざなりといひてのゝじる程に。四五日をへてかの大納言大別當天亡しにけるとなん。

法深房が持佛堂をば。樂音寺と號して管絃の道場として。道をたしなみける輩たへず入來の所也。後には阿釋妙樂音寺と三字をくはへて。ちいさき額を書てほとけの帳に打たる也。あみだ尺迦妙音天などを安置して。常に法花經を轉讀して。音樂を供

その、據一本補

も、據一本補

たは、原作を、
據一本改
ら、據一本補
かゝる、原作今
日、據一本改

猶、一本无

する故にかくは名付たる也。件の額誂へ申さんが爲に。建長三年八月十三日綾小路
三位入道行能のもとへむかはれたりければ。禪門日來所勞にて侍けるが。其比こと
に大事にて。立居る事だにかなはざりければ。ふしたる所へ請入て。ねながら對面せ
られけり。所勞の躰まことに大事げなりけり。腹ふくれていきたはしきとて。物いは
るゝも分明ならざりけるが。か^らくしていはれけるは。かゝる病床へ入申てねなが
ら見參する事は其憚侍れども。かつは最後の見參なり。御わたりめづらしくうれし
く侍る。さるにても來り給へるゆへ何の料にて侍るぞとはれければ。法深房こた
へられけるは。凡かく程の御事にておはしましける。つや／＼しり奉らず。いさ／＼か
所望の事侍りてまうてつれども。此御やみ見まいらせては更に其事思ひよるべから
ず。今御平愈の時こそ申さめといはれければ。禪門所勞はさる事なれども只仰られ
よ。たま／＼の見參にかでかとしるていはれければ。法深房此額の事をいはれて
けり。その時禪門大におどろきて。掌をあはせ涙をながして。不可思儀の事に侍りと
てかたられけるは。先年近江國より僧來りて申事侍き。あさましく古く成たる寺あ
り。其寺を少しもわがめ興隆すれば。魔妨をなして住僧も怖畏をなし。田園をも損亡
せしむる事。年をおつてはなはだしき也。此事をまのあたりみればそのをそれ侍れ
ども。たちまちに荒廢せん事かなしく侍れば。猶興隆の思ひあり。額かきて給へと申

り、一本作に

べる、據一本補
ケ、原作十、據一
本改、下同
に、一本作を

侍りしかは。則かきてあたへ侍き。其後四五年をへて件の僧又來て申侍しは。此額を
打てより魔の妨なし。住僧も安堵し寺領も豊饒也。喜悅の思ひをなすところに。此額
のゆへなりと夢想のつげあり。此事のかたじけなさに。參りて事の山を申入侍也と
て。掌を合せてさり侍りき。然るに去八日此病につかれてふしたるに。あかづきに及
びて夢に見るやう。天人と思しき人。額をもちて來りて此額の文字損じたる。なをし
て給へとてたぶと見れば。先年かきたりし近江國の額也。げにも文字せう／＼消たる
所あり。夢の中になをして奉りつ。天人悦^{べる}けしきにて歸り給はんとするが。見
かへりて今五ケ日がうちに又額あつらへ奉るべき人あり。必ずかき給べし。一佛淨
土の縁たるべき也とてさりぬと思ふ程に夢さめぬ。此事によりて心の中に日とに相
待ところに。けふ五ケ日満也。然るに此額あつらへ給ふ。是一佛淨土のえん也。やが
て書侍べきにこの額にをきては精進して書侍べし。いかにもこれ書はてんまではよ
も死侍らじとて。なく／＼随喜せられける也。抑天下に道にたづさはる人おほけれ
ども。御邊の道におきては又對揚なし。それにつきては我道こそ侍けれ。其故は今度
閑院殿遷幸に年中行事障子をかくべきよし宣下せられたりしを。入道は此所勞の間
かなはず。經朝朝臣は訴訟によりて關東に下向す。これによりてふるき障子を用ら
るべきよし其さたありけるを。武家より其儀不可然いかやうなりともかの家の子

淨、今悉補

孫かき進ずべき也と申によりて。經朝朝臣が子生年九才の小童かたじけなく勅定をうけ給て書進せをはんぬ。これをもて是を思ふに。御邊の道と入道が道とこそならぶ人なかりけれと自讃せられ侍也。世に管絃者おほかれども。誰か御邊とひとしき人ある。手かき又おほけれ共朝の御大事にあふもたゞこの家ばかり也。さればかゝる夢想もありて。一佛淨土の縁となり申べきにこそとて。感涙をたると事かぎりなることさし。こちらにうけるとにあらざ。法深房かたり申されしうへ。三位入道このことをしるしたる狀に判を加へて。法深房のもとへおくりたる狀をかき侍也。

り、原作る、今從一本

行成卿いまだ殿上人の比。殿上にて扇合と云事ありけるに。人々珠玉をかざり金銀をみがきて我おとらじといとなみあへりけり。かの卿はくろくぬりたるほそぼねに黄なるかみはりて。樂府の要文を眞草に打ませて。ところ／＼かきて出されたりける。御門御覽せられて。此扇こそいづれにもすぐれたれとて。御前にとゞめられけるとかや。彼卿の孫に帥中納言伊房とておはしけるもいみじき手書也けり。春日大明神の示現によりて御經藏といふ額を一枚かきておき給たりければ。只今うつべき經藏もなければ。いまあるやうあらんずらんとて置たりける程に。帥もうせ給てのち遙に年月へだよりて。思の外に公家より一切經を安置してまいらせられる時。たれか額をば書べきとさた有けるに。彼帥の子孫の中より。かゝる事有てかの帥書を

ける額ありとて出されたりければ。うたれけるこそ神慮に叶ひて有ける事。やんごとなくおぼゆれ。

むかし佐理大貳任はてゝのぼられけるに。みちにて伊與の三島明神の詫宣ありて。かの社の額かゝれたりけるも目出たかりけり。

弘法大師は筆を口にくはへ。左右の手に持。左右の足にはさみて。一同に眞草の字をかゝれけり。さて五筆和尚とも申なるとかや。ふしぎなることなり。

術道第九

術道一にあらざ。その道まち／＼にわかれたり。推古天皇十年百濟國より曆本天文地理方術書を奉りてよりこのかた。道をならひ傳て今にたゆる事なし。其中に秘術しるしをあらはして奇異多く聞ゆ。くはしくしるすにいとまわらず。

御堂關白殿御物忌に。解脱寺僧正觀修。陰陽師晴明。醫師忠明。武士義家朝臣參籠して侍けるに。五月一日南都より早瓜を奉りたりけるに。御物忌の中に取入れん事いかゞあるべきとて。晴明にうらなはせられければ。晴明うらなひて。一の瓜に毒氣さぶらふよしを申て。一をとり出したり。加持せられば毒氣あらはれ侍べしと申ければ。僧正に仰て加持せらるゝに。しばし念誦の間に其うりはたらきうごきけり。其時忠明に毒氣治すべきよし仰られければ。瓜を取まはしく見て。二所に針をたて

傳、一本作侍、同
一本與此同

義家、一本旁書
曰時代不審也

けれ、據一本補

てけり。其後瓜はたらかず成にけり。義家に仰て瓜をわらせられければ。腰刀をぬきてわりたれば。中に小蛇わだかまりて有けり。針は蛇の左右の眼に立たりけり。義家何となく中をわると見えつれども蛇の頭を切たりけり。名をえたる人々のふるまひかくのごとし。ゆゑしかりける事也。この事いづれの日記にみえたりといふ事をしらねどもあまねく申傳へて侍り。

陰陽師吉平晴明子。醫師雅忠と酒をのみけるに。雅忠盃をとりてうけてしばしもたれけるを。吉平みて御酒とくまいり給へ。只今ないのふり候はんずるぞといひけり。其ことばたがはずやがてふりければ。酒がぶときてこぼれにけり。ゆゑしくぞかねていひける也。

九條大相國淺位の時。なにとなく后町の井を立よりて底をのぞき給ける程に。丞相の相あひ見えける。うれしくおぼして歸りて鏡をとりて見給ければその相なし。い加成ことにかとおぼつかなくて。又大内にまいりて彼井をのぞき給ふに。さきのごとく此相見えけり。其後しづかにあなじ給に。かゝみにてちかくみるにはその相なし。井にて遠くみるには其相あり。此事大臣にならんずる事とをかるべし。つるにむなき相人にておはしましけり。宇治のおともわざと相せられさせ給けるとかや。

上原作人、據一本改

宇佐大宮司ながしとかや。癩病をうけたる山開へありて。一門の者ども改補せらるべきよし訴へ申ければ。大宮司はせのぼりて醫師にみせられて實否をさだめらるべきよし奏し侍ければ。和氣丹波のむねとあるともがらに御尋有けり。中原貞説もおなじく召に應じて御尋に預りけり。各自らといふ病のよしを奏しけり。療治すべきよし勘文を奉るべきよし仰下されければ。めんく罷出てしるして参らすべき由申けるに。貞説申けるは。非重代の身にて一卷の文書のたくはへなし。知りて侍る程の事は當座にて勘がへ申べしとて則し申けり。もろくの醫書ども皆悉く引のせてゆゑしく注申たりければ。叙感有て申うくるに隨ひて和氣の姓を給はせける。後には諸陵正になりて子孫いまにたえず。

野々宮左府(註)おさなくおはしける時。母儀さまをやつしてぐし奉りて。播磨の相人として名譽の者ありけるにゆきて。相を見せさせられけり。相人よく見申て必一にいたり給べきよしを申けり。母儀あらがひて。是はさ程の位にいたるべき人にあらず。さぶらひ程のものゝ子にて侍なりとの給ひければ。相人申けるは。まことに侍にておはしまさば檢非違使などに成給べきにや。いかにも大臣の相おはします物と申けり。後徳大寺左大臣の末の子にておはしけるが。このかみみなうせ給て家をつぎて。大將をへて左右大臣従一位にいたりて天下の權をとり給ける。ゆゑしく相

見せ、一本元、一本元見字

し申たりける。此事をおと聞たもち給て。相をならひて目出たくし給ひけるとぞ。わがすがたなどをかゝみを見て相してかねてしり給たりけるとぞ。後鳥羽院御熊野詣有けるに。陰陽頭在繼をめしぐせられけるに。毎日御所作に千手經を被遊ける。件の御經を御經營に入れたりけるをとり出されけるに。その御經見へず。いかにもとむれどもなかりければ。在繼をめしてうらなはせられけるに。いかにもうせざるよしを申て。猶よく／＼もとめらるべし。あやまりていまだ箱の内候ものをと申けり。其後又もとめられければ御經箱のふたに軸つまりてつきたりけるをえ見ざりけり。敬感ありて御衣を給はせけるとなん。

古今著聞集卷第七終

古今著聞集卷第八

孝行恩愛第十

宜、一、本作誼○
矣、原作實、據一
本改

孝者天之經也。地之宜也。人之行也。故有天地人民以來。斯道著矣。蓋乃立身揚名之本。五常百行之先也。父雖不可。父子不可。以不子。孝之至深尤可貴焉。式部大輔大江匡衡朝臣息式部權大輔舉周朝臣。重病を受てたのみすくなく見へけれ

衛門、一本此上
有右字

ば。母赤染・衛門住吉にまうて、七日こもりて。此度たすかりがたくばすみやかにわが命にめしかふべしと申て。七日にみちける日御幣のしにかきつけ侍ける。

かはらんといのる命はちしからてさてもわかれんことぞかなしき。

かくよみて奉りけるに。神感有けん舉周が病よく成にけり。母下向して悦びながら此やうを語るに。舉周いみじく歎て。我いきたり其母をうしなひては何のいさみかあらん。かつは不孝の身なるべしと思て。住吉に詣で、申けるは。母われにかはりて命をふるべきならば。すみやかにもとのとくわが命をめして母をたすけさせ給へと泣々祈りければ。神あはれみみて御たすけや有けん。母子共に事ゆへなく侍けり。六條右大臣隆俊中納言と大内を見ありき給ひけるに。大内には子孫の殿上人・ぐせざる人ははだしにて庭をあゆむ所のあんなるに。久我大相國(應)幼少の時。兩人の沓を懷中してかの所にてはかせられけり。幼少の人外祖父をも思ひすてられざりける事有がたき事也。隆俊卿感涙をながして。母儀のもとにゆきてよろこび申されけるとなん。

をふる、一本作
なほる
泣々、原作段々、
據一本改
殿上人、一本此
下有な字

られ、一本此下
有たり二字

京極大殿(應)の北政所例ならぬ事おはしましけるに。六條右府(應)御とぶらひに参り給て。則院へ参り給ひけるに。御對面有て世間に何事かあると仰られければ。關白の北政所の不例のとぶらひに罷向ひて候つるに。病者のかたはらなげしのしりに大臣

三人候つる。以外の事也と申されければ。これらにさほどの事は有がたしとぞ御返事ありける。まことにゆゑしかりける事なり。堀河左大臣(四)六條右大臣は北政所の御せうと也。後二條殿は御子にておはします。其時は内大臣にてぞおはしける。輦人監物頼能重病をうけたりける時。大納言重通卿みづから行向てとぶらはれけり。大方精進せられざりける人の。頼能早世の後は其忌日ごとに魚肉を食せられざりけり。夢中に頼能清談する事其數をしらず多かりけり。

後白河院在藩の御時。保延五年十二月廿七日。待賢門院の御所三條殿にて御元服有けり。仙院も御座ありけり。左大臣(五)ぞ加冠はし給ける。御遊の笙の事内大臣に仰られけるに。去四日春宮大夫頼卿うせられにし。いく程もなくて笙を吹ん事は、かりありとて。手に所勞のよしを申されて吹給はざりけり。漢書説は近代よみ傳へたる人まれに侍に。かの大夫江家の説をつたへられければ。内府習給けり。師をおもんずるれいみじくぞ侍る。

師能弁漢書の文帝紀おきうしなひて歎き思ひけるに。先親春宮大夫頼卿。夢の中にかの書のあり所を告られたりけり。次日其所より求め出して侍りけり。あはれなる事也。

愛、原作蹟、據一本改、二本作受

宇治左府御記に。頼長初以母賤、無寵愛。而及長誦習九經。嗜好五音。不愛酒。

て、一本元

不事遊戯。是以禪閣及予以為家寶。尊重甚云々。かゝる御もぼえにておはしましける。ゆゑしき御孝養なりし。御母は陸奥守信雅女也。御童名太郎御前とぞ申ける。久安のころ法性寺どの攝籙にておはしましけるを。宇治左府にゆづり奉るべきよし。知足院殿御結構ありけれども申ゆるさゝりけり。氏長者には左府つゝに成給ぬ。内覽の宣旨もかうぶらせ給てゆゑしかりけり。法性寺殿御うらみふかくて兄弟の御中心よからざりけりとなん。其後殿下左府院の拜禮にまいりあひ給ひたりけり。人めをおどろかしてけり。

建春門院は兵部大輔時信が女也。小弁とて後白河院にさぶらはせ給けり。御寵愛ありて高倉院をうみ奉らせ給にけり。東宮にたせ給て仁安三年御讓位有けり。御即位の日女院皇太后宮に立給ひて後朝觀の行幸有けるに。宮籙中におはしますを主上拜し参らせさせ給けるを。むかし肩をならべまいらせられたりける上臈女房たれとかや宮の御そばへ参りて。此御目出たさをばいかおぼしめすと問まいらせられれば。さきの世の事なれば何とも覺えずとぞ仰られける。ゆゑしかりける御心なるべし。

法深房當道の秘事口傳故實のこる事なく書て。二女尾張内侍にさづくとておくにかくぞかきつけ侍ける。

道、原作公と二、字、據一本改、按、依草体誤者

忘るなよわが四の緒はよるのつるの子の道にこそねをばおしまね。
是以後抄入之。

昔元正天皇の御時。美濃國にまづしくいやしきものこ有けり。老たる父をもちたりけるを。此男山の本草をとりて其あたひをえて父を養けり。此父朝夕あながちに酒をあひしほしがりければ。なりひさごといふものをこしにつけて酒うる家へのぞみて。つねにこれをこひて父を養ふ。ある時山に入て薪をとらんとするに。苔ふかき石にすべりてうつぶしにまるびたりけるに。酒の香のまければ。思はずにあやしくて其あたりを見るに。石の中より水ながれ出る所あり。その色酒に似たりければくみてなむるに目出たき酒也。うれしく覺て其後日々是を汲てあくまで父をやしなふ時に。みかど此事を聞し召て。靈龜三年九月日其所へ行幸ありて。殿覽ありけり。是則至孝の故に天神地祇あはれび其徳をあらはすと感ぜさせ給て。美濃守になされにけり。家ゆたかに成ていよく孝養の心ふかくりけり。其酒の出る所を養老の瀧と名づけられけり。これによつて同十一月に年號を養老とあらためられけるとぞ。
白河院御時天下殺生禁斷せられければ。國土に魚鳥の類たえにけり。其比まづしかりける僧の年老たる母をもちたる有けり。其母魚なれば物をくはざりけり。たまよく求めえたるくひ物もくはずしてや。日數ふるまゝに。老の力いよくよはりて。

是、原作この、今
従一本
元正天皇、一本
旁書云女帝文武
姉草壁皇子女

び、一本作み

え、一本作へ
あひ、一イ本作つ
け
な、一本元

たへず、一イ本作
たらず

今はたのむかたなく見えけり。僧かなしみの心ふかくしてたづね求むれども得がたし。思ひあまりてつやく魚とるすべもまらねども。みづから川の邊にのぞみて衣にたまだすきして魚をうかひひて。はえといふちいさき魚を一つ二つとりてもちたりけり。禁制おもき比なりければ。官人見あひてからめとりて。院の御所へゐて参りぬ。先子細をとほる。殺生禁制世にかくれなし。いかでか其由をまらざらん。いはんや法師のかたちとして其衣をきながらこの犯をなす事。一かたならぬ科のがるゝ所なしと仰含めらるゝに。僧涙を流して申やう。天下に此制おもき事みな承る所之。たとひ制なく共法師の身にて此ふるまひ更にあるべきにあらず。但し我年老たる母をもてり。只われ一人の外たのめる者なし。よはひたけ身おとろへて朝夕の喰たやすからず。我又家まづしく財もたねば心のとくにやしなふに力たへず。中にも魚なれば物くはず。此ごろ天下の制によりて魚鳥のたぐひよく得がたきによりて身力すではりたり。是をたすけん爲に心のをき所なくて魚とる術もしらせれ共思ひのあまりに川のはたにのぞめり。罪におこなはれし事案のうち侍り。但此とるところの魚今ははなつともいきがたし。身のいとまをゆりがたくばこの魚を母のもとへつかはして。今一度あざやかなる味をすゝめて。心やすくうけ給ひをきて。いかに罷ならんと申に。是をきく人々涙を流さずといふ事なし。院聞しめして老

び、一本作み〇
ほ、一本作も
さなり、一本元

武則公則、一本
勞書云法興院殿
隨身御鷹飼
皆、一本作見る、
似是

にや、一本作な

高一、本作尊

養の心ざしあきからぬをわはれば感ぜさせ給て。さま／＼の物共を馬くるまにつみ
給はせてゆるされにけり。とほしき事あらば。かさねて申べきよしをぞ仰られける
となり。
武則公助といふ隨身父子ありけり。右近馬場の賭弓わろくつかうまりたりとて。子
公助をはれなる所にてうちけるを。にげのく事もなくてうたれければ。皆人いかに
にげずしてかくはうたるゝぞといひければ。もしにげ侍なば衰老の父をはんとせん
程に。たふれなどし侍らばきはめて不便なりぬべければ。かくのごとく心のゆくほ
どうたるゝ也と申ければ。世の人いみじき孝子なりといひて。世のおぼへこれより
ぞ出きにける。聖徳太子用明天皇の御杖の下にしたがはせ給ひけるを思ひいれたり
けるにや。孔子の弟子曾參といひけるは。父のいかりて打けるに。にげずしてうたれ
けるをば。孔子聞給ひて。もしうちもころされなば。父の悪名をたてん事ゆゝしき不
孝也といましめ給ける。これもことわり也。親の氣色によるべきにや。凡父母につか
うまつるべき道くはしく孝經に見えたり。二十二章のをはりの段を喪親章と名づけ
て喪禮の儀式までしるせり。是等も見るべし。聖教には孝養父母奉仕師長をもて往
生のもとしせり。身體髮膚を父母にうけたり。生のはじめなれば恩徳の最高なる父
母にすぐべからず。凡人は上には忠貞のまことをつくし。下には憐愍の思ひをふか

を、據一本補
ら、據一本補〇
信原本及一本
作臣今從一本
本改
峽、原作秋、據一
本改

くし。父母親類には孝行の心をむねとし。友にあらそはず人を^をかろしめずして。仁
義禮智信の五常をみだ^らざるを徳とすべし。又夫婦の中をば忠信の道にたとへた
り。女はよく夫に志を致すべき。さればかしこき女はたがへにそなへる日謹みし
たがふのみにあらず。なき跡までもひとり貞女峽の月を詠めながら。燕子樓の中
とちこもるたぐひあまた聞ゆ。又此世一ならずおなじ道にともなふためし多かり。
委しくしるすに及ばず。
中納言顯基卿は。後一條院ときめかし給て。わかくよりつかさ位につけてうらみな
かりけり。御門におくれ奉りにければ。忠臣は二君につかへずとて天台楞嚴院にの
ぼりてかみをおろしてけり。御門かくれ給へりける夜。火をともしさかりければ。いか
にとたづぬるに。主殿司新主(繁)の御事をつとむとて参らぬよし申けるに。出家の
心つよくなりけるとかや。あなたこなたにて行はれけるが。大原に住ける比。宇治
殿かの庵室に向ひ給て終夜御物語ありけり。宇治殿後世はかならずみちびかせ給へ
などしめし給て。曉歸なんとし給ける時。俊實は不覺の者にて候と申されけり。其時
は何共おもひわかさせ給はて。歸りて後しづかにあなじ給ふに。させるつゝあてもなき
に子息の事よあしきさまにはいはれじ。見はなつまじき山之けりと思ひとりて。
世をのがるといへども恩愛は猶すてがたき事なれば。思ひあまりていひいでられけ

りとあはれにおぼして。事にふれて芳志を出されければ。大納言までなられにけり。美濃大納言とは此人の事也。

好色第十一

伊奘諾伊奘册二の神。磯取サシ虚島コボにありてともに夫婦となり給時。陰神先よきかなととなへ給。一書云。鶺鴒飛來て其首尾をうごかすを見て。二神まなびてまじはる事をえたり。それよりこのかた婚嫁の因縁あさからず成にけり。

中關白馬内侍に忍びてかよひ給ひけるを。父成忠卿うけぬ事に思ひけるに。或時出給ひけるをうかひひみて。かならず大臣にいたるべき人なりと相して。その後・ゆるし奉てけり。

一條院御時。三條后宮のぼり給ひけるに。御あくりの女房あかづきに及て罷出けるを。儀同三司みちびき給とて。佳人盡筋ニ於晨粧。魏宮鐘動。遊子猶行ニ於殘月。函谷鷄鳴と詠じ給けるに。人みなめであへりけるとぞ。

道命阿闍梨と和泉式部と一つ車にてものへゆきけるに。道命うしろむきて居たりけるを。和泉式部などかくはるたるぞといひければ。

よしやよし昔やむかしのえみもあひなばあちもこそすれ。

刑部卿敦兼はみめの世にくさげなる人也けり。その北の方ははなやかなる也ける

後、二本此下有は字

於、據一本補

よしやよし昔やむかしのえみもあひなばあちもこそすれ。むかしも又一本作むかしも

わろきを、一本作わろさ、亦似是〇も二本元、當衍

が。五節を見侍りけるにとりくにはなやかなる人々のあるを見るにつけても。先わが男のわろきを心うく覚えけり。家に歸りてすべて物を「も」だにいはず。目をも見合せず。打そばむきてあれば。まばしは何事の出きたるぞやと心もえず思ひわたるに。まだいにいとひまさりてかたはらいたき程也。さきくの様に一處にも居ず。方をかへて住侍りけり。ある日刑部卿出仕して夜に入て歸りたりけるに。出居に火をだにもともさず。装束はぬきたれ共た、む人もなかりけり。女房共もみな御前のまひきに隨ひてさし出る人もなかりければ。せんかたなくて車よせの妻戸をおしあけて獨ながめ居たるに。更闌夜しづかにて月のひかり風の音物ごととに身にしみわたりて。人のうらめしさもとりそへておぼえけるまゝに。心をすまして筆策をとりいで、時のねにとりすまして。

ませのうちなる白ぎくも。うつろふみるこそあはれなれ。

我らがかよひてみし人も。かくしつゝこそかれにしか。

とくりかへしうたひけるを。北の方きして心はやなをりにけり。それより殊になからひ目出たくなりけるとかや。優なる北の方の心なるべし。左大弁宰相經頼卿。さきの妻の腹に最愛の小むすめ有けるを。車にのせて行幸を見物すとして。供奉の人の中にいづれをか殿にせんずるといひて。人ごとこれはと

か、據一本補

な、據一本補

將、一本作酒、恐
非是、〇兎、據一
本補、
非是、一本作脚、恐

か、一本元、管衍

ひければ。みなかしらるをふりけるに。隆國卿字大納言のわたるを見て是をせんといひければ。まことにこれに過たる人はあらじと思ひて聾にとりてけり。北方わがむすめには隆國よりもよからん人をあはせよとせめければ。それよりまさらん人はありがたければ。才學に付て資仲卿をあはせてけり。彼卿しきりに隆國をあらそひ思けれ共昇進及はず。其子息にて隆俊卿にさへ従上の四位の所ををはこえられてけり。隆俊中納言の時は資仲卿はいまだ藏人頭にだにもならざりけり。妙音院のおと(璣)。しのびたる女をむかへさせ給て。尾張守孝定に。夜のあけん程はからひて中せと仰られたりけるに。やうくよく成にける時。將軍在座。兎園之露未晞。僕夫待菴。鷄籠山欲曙。この句を朗詠に志たりけり。孝定が所爲かくこそあらまほしき事なれ。いといみじきことなりかし。後白河院御所いつよりものどかにて。近習の公卿兩三人女房少々候てさうだん有ける時仰に。身にとりていみじく思ひ出たる志のびと何事かありし。かつは懺悔の爲をのくありのまゝかたり申べしと仰られて。法皇より次第に仰られけるに。小侍従が番にあたりていかにもこゝにぞ優なる事はあらんずるなど人々申ければ。小侍従打わらひて。多く候よ。それにとりて生涯の忘れがたき一ふし候。げに妄執にもなりぬべきに。其前にて懺悔候なば罪かるむべし「か」しとて申けるは。そのかみある所

たまはせ、原作
あはせ、據一本
改〇おぼえ、原
作月さへ、據一
本改
まよひ、一本作
まよひ、似是

よりむかへにたまはせたる事ありしに。すべておぼえぬ程にいみじく執し侍し事に。心とにいかにせんと思しに。月さへわたり風はださむきにさ夜もやゝ更ゆけば。ちいと思ひくだけで心もとなさかぎりなきに。車の音はるかに聞えしかば。あはれこれにやあらんとむねうちさはぐに。かゝりとやりいるれば彌心まよひせられて人わろき程にいそぎのられぬ。さて行つきて車よせにさしよするほどに。さてみすのうちよりにほひとにてなべらかになづかしき人出て。すだれもてあげておろすにまづいみじうらうたくおぼゆるに。立ながらきぬごしにみしといたきていかなるをぞさぞとありし事から。何と申つくすべしとも覺へ候はず。扱まめやかにうちかたらふに長き夜もかぎりあれば。鐘の音もはるかにひいき鳥のねもはや聞ゆれば。むつごとにまだつきやらで。あさをく霜よりもなをきえかへりつゝおきわかれんとするに。車さしよするをとせしかば。玉しるも身にそはぬ心ちして我にもあらずのり侍ぬ。歸りきても又ねの心もあらばこそあかぬなごりを夢にも見ぬ。たゞよにしらぬにほひのうつれるばかりをかたみにてふししづみたりしに。その夜しも人にきぬをきかへられたりしを。朝に取かへにをこせたりしかば。うつりがのかたみさへ又わかれにし心のうちいかに申のぶべしとも覺えず。せんかたなくこそ候しかと申たりければ。法皇も人々も誠にたへがたかりけん。此うへは其ぬしをあらはすべしと

は、一イ本元

仰られけるを。小侍従いかにも其事はかなひ侍らじと深くいなみ申けるを。扱は懺悔の本意せんなしとしてしるてとはせ給ければ。小侍従打わらひて。さらば申候はん。覚えさせおはしましませぬか。君の御位の時その年その比。たれがしを御使にてめされて候しは。よも御あらがひは候まじ。もしむねたがひてや候と申たりけるに。人々どよみにて法皇はたへかねさせ給てにげいらせ給にけるとなん。

紫金臺寺御室に千手といふ御寵童有けり。みめよく心さま優也けり。笛をふき今様などうたひければ。御いとをしみはなはだしかりける程に。又參川といふ童初て參じたりけり。箏ひき哥よみ侍りけり。是も又寵有て千手かざらすこしをとりければ。面目なしとや退出して久しく參らざりけり。或日酒宴の事ありて。さまぐの御あそび有けるに。御弟子の守覺法親王なども其座におはしましけり。千手はなど候はぬやらん。召て笛ふかせ今様などうたはせ候はとやと申させ給ひければ。則御使をつかはしめされけるに。此程所勞の事候とて參らざりけり。御使再三に及びければ。さのみは子細申がたくて參りにけり。けん紋紗の両面の水干に袖にむばらこき〔雀の居たるをぞぬふたりける。紫のすそこの袴をきたり。ことにあさやかにさうぞきたれども。物を思入たるけしきあらはにて。しめりかへりてぞ見えける。御室の御前に御盃をさへられたる折にて有ければ。人く千手に今様をすゝめければ。〕

に、據一本補

過去無數の諸佛にも。
現在十方の淨土にも。
たとひ罪業おもく共。

すてられたるをばいかいせん。
往生すべき心なし。
引攝し給へ彌陀佛。

とぞうたひける。諸佛にすてらるゝ所をばすこしかすか成やうにぞいひける。思ひあまれる心の色あらはれておはれなりければ。きく人みな涙をながしけり。興宴の座も事さめてしめりかへりければ。御室はたへかねさせ給て。千手をいだかせ給て御寢所に御入有けり。満座いみじがりのゝじりける程に其夜もあけぬ。御室御寢所を御覽じければ。紅のうすやうのかさなりたるをひきやりて。哥かきて御枕屏風にをしつけて有たりける。

尋ぬべき君ならませばつけてまし入ぬる山の名をばそれとも。
あやしくてよく御覽じければ參河が手也けり。今様にめてさせ給て。又ふるきにうつる御心の花をみてかくよみ侍けるにこそ。扱御尋ね有ければ行方をしらず成にけり。高野に上りて法師になりけるとかや聞えけり。
ある宮ばらにしのびて參りかよひ給しかるべき上達めおはしけり。君もしのびわれも人目をつゝみ給とて。うとくや御中のなりにけん。宮より。
しのぶかなたか野の山のみねにいる雲のよそにてありしむかしを。

給、據一本補
いみじかり、一イ
本作いみじかり
哥、一本此下有
て有、一本元
せ、一イ本作さ
け、原作ら、據一
本改○手、原作
筆、今從一本
うつる、據一イ本
補○な、一本元

督典侍、一本旁
書云法性寺執行
能因法師女

いとあはれにおぼしたりければ。さだめて又心あらたまりにけんかし。
頭中將忠季朝臣。督典侍を心がけて年月をかざねけれども。いかにもなびかざりけるに。或夜雪のいたくふりたりけるに。家より馬に乗りて参内しける。みちのありさま雪の面白さなどをはじめより繪にかきて。六位をかたらひて彼局へなげ入させたり。督のすけ取見てあはれとや思ひけん。又繪にやめでけんそれよりあひにけり。其後久しくかよひて少將親平は彼腹になんまうける。

大宮権亮といひける人あり。宮ばらの御方違の御車よせに参りたりけるに。女房の局へしのびて入にけり。還御のよしをきいてあはてまどひておきてなをしをきけるほどに。何としたりけるにや前をうしろにきてけり。いかにあかしう見えけんとおしはからる。

野々宮左大臣わかちおはしましける時。内裏の女房に物いひわたり給けれども打とけざりけるに。或夜ほいとげてつぼねよりいづとて。我願既満衆望亦足と誦せられけるを。局ならびに「すみけるふるき女房これをきいて。女房にあひてはやこよひ打とけ給にけるな」と問ければ。さなきよしあらがひければ。さるにては此文を誦せらるべしやはとて。文のころをいひければあらがはずなりにけり。
宮内卿は甥にてある人に名だちし人之。男かれくになりける時よみ侍ける。

に、據一本補
る、一本无、當衍

か、據一本補

付、一本作す、同
イ本與此同

ち、一、本作り
な、一、作り
本、作、なし、二、字
は、一、本、補、心
心、地、一、本、作、心
た、ち

都にもありけるものをさらしなやはるかにきしおぼすてのやま。

ある人大原の邊を見ありきけるに。心にいきいほりありけり。立入て見ればあるととおぼしき尼たゝ獨あり。すまひよりはじめて事にきて優にはづかしきけしきたり。しかるべきさきの世のちぎりやありけん。又此人をたぶら「か」さんとて魔や心にかはりけん。いかにも此あるじをみすぐして立かへるべき心地せざりければ。ちかくよりてあひしらふに。此人思はずげに思ひてひきしのぶをしるてとりとめてけり。あさましう心うげに思ひたるさまいとことほり也。何とすとも只今は人もなし。あたりちかく聞おどろくべき庵もなければ。いかにすまふともむなしからじと思て。ねん比にいひてつるにほいとげてけり。力及ばで只したがひ居たるけしきひとへに我あやまちなれば。かたはらいたき事かぎりなかりけり。したしく成て後「は」いよく「思そふ心地まさりてすべきかたなかりけれども。さてしもやがてこゝにといまるべき事ならねば。よくくこしらへをきて男歸りにけり。扱又二三日ありて尋ねきてみればもとのすみかもかはらであるじはなし。かくれたるにやとあなぐりもとむれ共終に見えず。さきにあひたりしところに哥をなんかきつけたりける。

世をいとふつるのすみかと思ひしになをうき事はあほはらのさと。

かた、一イ本此下有字〇兼ての縁、一本作悪縁
二字、原作の、今従一本

で、據一本補

せん、一イ本元、或衍

り、一本作る

さきだち、一イ本此下有て字

つるに行がた。しらず成にけり。兼ての縁にひかれておもはざるふるまひをしたれども。實に思ひ入たる人にこそ侍けれ。山に慶澄注記といふ僧有けり。件の僧が伯母にて侍ける女は心すきくしくて好色はなはだしかりけり。年比のおとこにも少しも打とけたるかたちをみせず。事にきていろふかく情ありければ。心をうごかす人おほかりけり。病をうけて命をはりける。念佛すゝめけれども申に及ばず。枕なるさほにかけたる物をとらんとするさまにて手をあはせけるが。やがて息たえにけり。法性寺邊に土葬にしてけり。其後廿餘年をへて建長五年の比。改葬せんとて墓をほりたりけるにすべて物なし。猶ふかくほるに黄色なる水のおぶらのごとくにきらめきたるぞ涌出ける。汲ほせどもひざりけり。其油の水を五尺ばかりほりたるに猶物なし。底に棺せんと覺ゆる物鋤にあたりければ。堀出さんとすれどもいかにもかなはざりければ。其あたりを手を入れてさぐるに。頭の骨わづかに一寸ばかりわれ残りて有けり。好色の道罪ふかきことなれば。あとまでもかくぞ有ける。其女の母をも同じ時改葬しけるに。遙にさきだち。死にたりける者なれども。その體かはらでつゝいながらにありける。第八十七代の皇帝後嵯峨天皇と申は。土御門天皇の第三の皇子。父の御門寛喜三年遠所にて崩御の事有し後は。御めのと大納言通方卿のもとにかすかなる御住居に

さ、據一本補
再、一本元、同、本與此同

の事、一イ本元

に、據一本補
ば、據一本補

てわたらせ給へば。御位の事おぼしめしもよらず。大納言さへ身まかりにければ。仁治二年の冬の比八幡へ参らせ給て。御出家の御いとま申させ給ひけるに。曉御寶殿の内に。徳是北辰。椿葉影再改と鈴のこゑのやうにてまさしく聞えさせ給ひければ。是こそ示現ならめとうれしく思召て還御有けり。もとの通成中將の亭へは入らせ給はで。御祖母承明門院の土御門の御所へ入せ給て其年もくれにけり。同三年正月九日。四條天皇十二歳。禁中にして崩御の事あるよしの、じりければ。後堀河院の御方には御位につかせ給ふべき宮もおはしませず。定めて佐渡院の宮達ぞ踐祚あらんずらんとてきゝわきたる事はなけれども。時の卿相雲客四辻の修明門院へ参りつどふといへども。天照太神の御はからひにや侍けん。同十九日關東より城介義景早打にのぼりて。ひそかに承明門院へ参りて。御位は阿波院の宮と定め申侍之。公家にはいかゞ御はからひも侍らんと申て。やがて法性寺殿一條大相國へも申入てくだりぬ。京中の上下あはてさきぎて。今更に土御門女院へ我もくとまいりつどふ。ある人御なをしを取あへず参らせたりければ。このなをしはとの外にちいさし。と人のれうにやあらんとぞ仰られける。佐渡院の宮へ参らせんれうにてこそありつらめと思召しらせ給ひけるにやと。涙をおさへてとかく申人なかりかり。同廿日の夜御元服。やがて内裏へ入らせ給ふ。四條大納言隆親卿の家冷泉万里小路の里内裏へ。三月十

八日御とし廿三にて太政官廳にて御即位あり。六月六日前右大臣實公のむすめ女御に参り給ふ。後には大宮女院と申て。二代の國母におはします。女御にも可レ然人レの加ざりまいり給ふ。いやしき女などは御目にだにもかゝらず。昔に立かへりて御政と目出たく。御心もちるもよろづたくみにおはしますあまり。大井の山庄を仙宮にうつしおはします。造營の事は權大納言實雄卿のさととぞ聞えし。水の心ばへ山のけしきめづらかに面白き所がら也。東は廣隆寺ときはの森。西は前の中書王のふるき跡。小倉山の麓。わざと山水をたゞへざれども自然の勝地也。南は大井河遙に流れて。法輪寺の橋なめらか也。北は生身二傳の釋尊清涼寺におはします。眺望よもにすぐれて佛法流布の所也。かゝるはこやの山をしめ給御事も此院の御時也。いづれの年の春とかや。やよひ花のさかりに。和徳門の御つぼにて二條前關白。大宮大納言。兵部卿。三位中將など参りて御鞠侍しに。見物の人々に交りて女共あまた見え侍。る中に。内の御心よせにおぼしめすありけり。鞠は御心にも入させ給はで。彼女房のかたをしきりに御覽すれば。女わづらはしげに思て。打まぎれて左衛門の陣のかたへ出にけり。六位をめして此女のかへらん所。見をきて申せと仰られければ。藏人追付てみるに。此女房心えたりけるにや。いかにも此男すかしやりてんと思て。藏人を招ぎよせうち笑ひて。なよ竹のと申させ給へあながしこ。御返事承らん程はこゝに

なめらひ、一日本作斜

侍、一日本此下有け字

所、一日本此下有な字

さ、據一本補

て待参らせんといへば。すかすとは思ひもよらず。只すきあひ参らせんとするぞと心へて。急ぎ参りて此よし申せば。定めて古哥の句にてぞあるらんとて御尋有ければ。其座にては知る人なかりければ。爲家卿のもとへ御尋有けるに。とりあへぬ程にふるき哥とて。

たかしとてなに、かはせんなよ竹の一よ二よのあだのふしをば。

と申されければ。いよ、心に、おぼしめして御返事はなくて。只女のかへらん所をたしかに見て申せと仰有ければ。立かへりありつる門を見るに。何かはあらん見えず。又参りてしかく、と奏するに。御けしきあしくて尋山さずば科あるべきよし仰られける。藏人あをさめ「に」て罷出ぬ。此事によりて御鞠も事さめていらせ給ぬ。其後はにがく、しくまめだ、せ給て。心ぐるしき御事にぞ侍ける。ある時近衛殿。二條殿。花山院大納言定雅。大宮大納言公相。權大納言實雄。中納言通成などまいり給て御遊有けれ共。さきく、のやうにもわたらせ給はず。物をのみ思召さまにて御ながめがちなれば。近衛殿御かはらけをす、め申させ給ふつゝに。戯やちかき比ゆくかたしらぬやどのかやり火にこがれさせおはします聞え侍り。高力士にみことりして尋させ給はんかくれあらじ物を。蓬萊までもかよふまぼろしのためしも侍り。まして都の内の事なればさすがやすかりぬべしとてみきまいらせ給に。内

何、一本作なり、似是

に、一本元、當衍

き、一本元

いらせ、原作わ
らばせ、據一本
改
なれ、一本此下
有は字

も少しわらはせ給へども。さして興せさせ給はず。そいろかせ給ていらせ給ぬ。其後
藏人はいたらぬくまなく。もしやあふとて求めありきつ。佛神にさへいのり申せ
どもかひなし。思わびて文平と申陰陽師こそ此頃掌をさして推察まさしかなれ。此
事うらなはせんと思ひて罷向ひてとひければ。是は内々承及べり。ゆゑしき大事之。
文平が占は是にて心み給べし。火のようをえたり。神門之。今日は巳の日之。巳はく
ちなは也。此事を推するに一旦のかくれ也。つるにはあはせ給べし。但火のようは夏
の季に至りて御悦あるべし。くちなはなればもとの穴に入てもとの所に出べし。夏
のうちにかくれけん所にて。かならずあはせ給ふべしといひけり。文平も凡夫なれ
ば一定たのむべきにはあらねども。むげにうはの空なりつるよりは。たのもしきか
たいできぬる心ちして。常は左衛門の陣・の關白の日。此女有しさまをあらためて五
人つれてふと行合ぬ。藏人あまりの嬉しさに夢うつとも覺えず。あやしまれじと
思て人にまぎれて見ければ。仁壽殿の西のひさしにみるてちやうもんす。講はて
てひしめかん時。又見うしなひてはいかせんと思て。經任の殿上の口におはする
所にて。此事しかく奏し給へとかたらへば。只今宮ひと所に御聽聞の程也。うちた
しと申ければ力及ばず。傳奏の人やおはすると見れどもおはせず。一位殿我御局の口
に女房と物仰らるゝを見あひまいらせて畏りて申けるは。推參に侍れども天氣にて

常は以下恐有
誤、恐陣字下脱
文獻〇關、或當
作開

經、據一本補

し、或當作ん

て、イ一本元

ける、一本作給
〇して、一本作
し、くして、イ一本作
に、して、イ一本作
今、從一本

侍り。しかくの事いそぎ奏し給へと申ければ。かねて聞えある事なれば。やがて奏
し申させ給に。女房して神妙也。かまへて此度は不覺せて行かたをたしかに見をき
て申せと仰らるゝ程に。講はつれば夕暮にも成ぬ。此女共ひとつ車にて歸り。藏人
我身はあやしまれじと思て。さがくしき女をつけてみいれさすれば。三條白川に
なにがしの少將といふ人の家之。此よしを奏するにやがて御文あり。
あだにみし夢かうつゝかなよ竹のをきふしわぶる戀ぞくるしき。
此暮にかならずとばかりあり。藏人此書を給てかの所にもてゆくに。男ある人なれ
ば。わづらはしうてなげくに。御使心もとなくて返事をせむれば。いかにもかくれあ
らじと思てありのまゝにかたれば。少將さすがにわづらはしげに思ひて。おとこの
身にて左右なく參らせんもはかりあり。あながしこといさめんも便なかるべき事
之。人によりて事ことなる世なれば一つは名聞之。人のそしりはさもあらばあれ。と
くくまいらせ給へとすゝむるに。女うちなげきてかなふまじき山返くいなびけ
れば。少將申けるは。此三とせが程をろかならず思かはして過ぬるも。世々の契りな
るべし。今まためされけるも淺からぬ御契ならんかし。やうくしてまいり給はず
ば定めてあしざまなる事にて。我身もをき所なきことにも成ぬべし。よもあしくは
はからひ申さじ。とくくまいり給へとすゝめければ。女うち涙ぐみて御文をひろ

か、據一本補○
達、一本此下有
な字

さ、據一本補

いらへに、一本
此下有は字

よる以下八字、
據一本補

げて。此暮にかならずとある下に。をといふ文字を只一つ墨ぐるに書て。もとのやうにして御使に給はせてけり。御文もとのやうにてたがはぬを御覽むて。むなしくかへりたるよとほひなく思しめすに。を文字あり。とかく御思案有けれどもおぼしうるかたなかりければ。女房達・少々召て。このを文字を御尋ありけるに。承明門院に小宰相局にて家隆卿の女のさぶらひけるが申けるは。むかし大教通公二條殿小式部内侍のもとへ月といふ文字を書てつかはされたりければ。さるすきもの 和泉式部がむすめなりければ。やすく心得て月の下にをといふ文字ばかりを書て参らせたりける其心なるべし。月といふ文字はよさりまつべし出よと心えけり。又人のめす御いらへに。男はよと申。女はをと申也。されば小式部内侍其夜上東門院にさぶらひけるが参りたりければ。いよ／＼心まさりしてめて思召けり。是も一定参り侍なんと申ければ。御心よげに思召てしたまたせ給けり。夜もやう／＼更ぬれどよるのちといへも入らせ給はず。とのる申の聞ゆるはうしに成ぬるにやと御心をいたましむる程に。藏人しのびやかに此女房参り侍るよし奏し申ければ。うれしく思しめされてやがてめされにけり。漢武の李夫人にあひ。玄宗の楊貴妃をえたるためしも是にはまさり侍らじと。御心の内もかたむけなくさま／＼かたらひ給程に。あけやすきみじか夜なれば。曉ちかく成ゆくに。此女房身のありさまをかきくとき。こまやかにあ

れ、據一本補

者、原作去、據一
木補

らねど心にまかせぬことのさまを申ければ。まづかへしつかはされてけり。御心ざし淺からねば。やがて三千の列にも召をかれて。九重のうちのみかをも御はからひ有べきにてありけるを。まめやかになげき申て。さやうならば中／＼御情にても侍らじ。淵瀬をのがれぬ身とも成ぬべし。たゞ此ま／＼にて人のいたくしらぬ程ならばたえずめしにもしたるがふべきよしを申ければ。つるにもとのすみかへかへされて。時々ぞしのびてめされける。彼少將は隠者なりけるを。あらぬかたにつけて召出されて。よろづに御情をかけられて。近習の人数にくはへられなどして。程なく中將になされにけり。つゝむとすれどをのづから世にもれ聞えて。人の口のさがなさは其比のとわざには。なるとの中將とぞ申ける。なるとのわかめとてよきめののぼる所なれば。かゝる異名を付たりけるとかや。をよそ君と臣とは水と魚のごとし。上としておどりにくまらず。下としてもそねみみたるべからず。もろこしには楚の莊王と申君は。寵愛の後の衣をひくものをゆるして情をかけ。唐の太宗と申かしこきみかどは。すぐれて思召ける后をも臣下の約束ありとてくだしつかはされけり。我朝にもかゝる古きためしもあまた聞え侍にや。今の後嵯峨のみかどの御心もちるのかたむけなさ。彼中將のゆるし申けるなさけの色。何れもまことに優にありがたきためしに申傳ふべきものをや。君とし臣としては何事もへだつる心なくて。たがひになさけふ

り、一、本作る
男、一本旁書曰
忠度の事、
今物語曰薩摩守
忠度云々、原作
おろふし、
一本改

われたに以下十
三字、
れも物をばいで
はこそおもへ

かきを木とすべきにこそと。むかしより申傳へたるもことほりにおぼえ侍り。
いつの比のことにか男ありけり。内の女房をしのびて物いひわたりけるが。ある夜
局のあたりにたゞずみてこゝにありとしられんとて。あふぎのかなめをならしてつ
かひければ。女房きゝてありふし便宜あしき事やありけん。何となきやうにてつぼ
ねの内にて野もせにすだくむしのねよとうちながめたりければ。おとこ聞てあふぎ
をつかひやみてけり。

かしがまし野もせにすだく虫のねよわれたにながく物をこそ思へ。
このこゝろなるへし。おとこも女もいと優にありけるにや。

古今著聞集卷第八終

古今著聞集卷第九

武勇第十二

武者禁暴。戢兵。保大。定功。安民。和衆。豐財。是武七德也。臨征戰之場。去
死於一寸。振阻鑠之勇。貽名於万代。蓋此道也。

嵯峨の天皇をば人思ひかけまいらせたりけるに。田村丸を近衛將監になし給ひて御

を、一、本作に

侍れば、一、本作
侍るべければ
也、一本元

る、一本作り

間、一本此下有
に字

に、據一本補

身ちかく候ければ。此官のきて退出の時を待ける程に。少將になしてなを祇候す。四
位してのかん時を待に。中將になり大將に成て御身をはなれ奉らざりければ。逆臣
思ひよらざりけりとぞ申傳て侍る。又白河院御代を薙のとくにまきてもたせおはし
ましたりしが。猶武者をたて、凡たゆませおはしまさざりけり。仰事ありけるは。小
一條院は世のをこの人にて有けるが。頼義を身をはなたてもたりけるが。きはめて
うるせくおぼゆる也。今はわれが侍ればとこそ忠盛朝臣には仰事有けれ。さもあら
ん。武士一人をばたのみてもたせおはしますべき事也とぞ。九條大相國の二條院へ
は申給ひける。

頼光朝臣。寒夜に物へありきて歸けるに。頼信の家ちかくよりたれば。公時を使にて
只今こそ罷過侍れ。此寒さこそはしたなけれ。美酒侍るやといひたりければ。頼信朝
臣折ふし酒のみてゐたりける時なりければ。輿に入て。只今見ん様に申給べし。此仰
殊によるこび思ひ給候。御渡り有べしと云ければ。頼光則入にけり。盃酌の間。頼光
廐の方を見やりたりければ。童を一人いましめてをきたりけり。あやしと見て頼信
にあれにいましめてをきたるものはたぞと問ければ。鬼同丸なりとこたふ。頼光驚
ていかに鬼同丸などをあれていにはいましめ置給たるぞ。をかしあるものならばか
く程あだには有まじき物をといはれければ。頼信實にさる事候とて郎等をよび

金、一本作銀、或
鐵、一本此與此
同、下倣此○し
た、い、め、一本此
下有て字
て、據一本補○
も、原作ぞ、據一
本改
夜、一本此下有
の字

参り、一本此下
有たり二字

り、一本作る
通、一本作道

て。猶したゝかにいましめさせければ。金鏢をとり出てよくにげぬやうにしたゝめ。けり。鬼同丸頼光の宣ふ事を聞てより。口惜物かな。何ともあれ今夜のうちに此恨をばむくはんずるものと思ひるたりけり。盃酌數献に成て頼光も酔て臥ぬ。頼信も入にけり。夜ふけしづまる程に。鬼同丸究竟のものにていましめたる細金鏢ふみ切てのがれ出ぬ。狐戸より入て頼光のねたる上の天井にあり。此天井引はなちて落かかりなば勝負すべきに異儀あらじと思ためらふ程に。頼光も直人にあらねばはやくさとりにけり。落かゝりなば大事と思ひて。天井にいたちよりも大きにてんよりもちいさきもゝ音こそすれといひて。誰か候とよびければ。綱名のりて参りけり。明日は鞍馬へ参るべし。いまだ夜をこめて是よりやがて参らんずるぞ。それがしこ供すべしといはれければ。綱承りてみな是に候と申てゐたり。鬼同丸此事を聞てこにては今は叶まじ。醉臥たらばとこそ思ひつれ。なまざかしき事し出てはあしかりなんと思ひて。明日の鞍馬の道にてこそと思ひかへして。天井をのがれ出てくらまのかたへむかひて。市原野の邊にてびんぎの所をもとむるに。立かくるべき所なし。野飼の牛のあまた有ける中にことに大き成を殺して。路次に引ふせてうしの腹をかきやぶりて。其中に入て目ばかり見出して待けり。頼光あんのごとく來りけり。淨衣に太刀をぞはきたりける。綱公時定通季武等みな共にありけり。頼光馬をひか

誠、一本作實

ゆす、一イ本作や
す

す、一本作で

に、一本作り

雪、一本此下有
はだれに四字
冒、一本作甲
な、據一本補

へて野のけしき興あり。牛その數あり。をのゝ牛追物あらばやといはれければ。四天王のともがら我もゝどかけて射けり。誠に興ありてぞ見えける。其中に綱いかが思ひけん。とがり箭をぬきて死したる牛にむかつて弓を引けり。人あやしと見る所に。牛の腹のほどをさして箭をはなちたるに。死たる牛ゆすゝとはたらきて腹の内より大の童打刀をぬきて走出て頼光にかゝりけり。見れば鬼同丸也けり。箭を射たてられながら猶事ともせず敵に向ひけり。頼光は少もさはがず太刀をぬきて。鬼同丸が頭を打おとしてけり。やがてもたふれず打刀をぬきて鞍のまへつばをつきたり。さて頭はむながいにくいつきたりけるとなん。死ぬるまでたけいかめしう侍りける山語りつたへたり。まとなりける事にや。扱頼光はそれより歸にける。伊與守源頼義朝臣貞任宗任等をせむる間。陸奥に十二年の春秋を送りけり。鎮守府をたちて秋田の城にうつりけるに。雪ふりて軍のおのこ共の鎧みな白妙に成にけり。衣河の館岸高く川ありければ。楯をいたゞきて冑にかさね。箆をくみて責戦に。貞任等堪ずしてつるに城のうしろのがれ落ける。一男八幡太郎義家衣川に追たてせめふせて。きたなくもうしろを見するものかな。しばし引かへせ物いはんといはれたりければ。貞任見かへりたりけるに。衣のたてはほころびにけり。

といへりけり。貞任くつばみをやすらへ。しころをふりむけて。

年をへし糸のみだれのくるしさに。

と付たりけり。其時義家はげたる箭をさしはづして歸りにけり。さばかりのたゝかひの中にやさしかりける事かな。

同朝臣十二年の合戦の後。宇治殿へ参りて戦の間の物語申けるを。匡房卿よく聞て。器量はかしこき武者なれ共。猶軍の道をばしらぬと獨ごといはれけるを。義家の郎等ききて。けやけき事をの給ふ人かなとちもひたりけり。さる程に江帥出られけるに。やがて義家も出けるに。郎等かゝる事をこそ給ひつれと語りければ。さだめて様あらんといひて。車にのられける所へすゝみよりて會尺せられけり。やがて弟子に成てそれよりつねにまうて、學問せられけり。其後永保の合戦の時金澤の城をせめけるに。一行の鷹飛さりて菊田の面におりんとしけるが。俄におどろきてつらをみだりて飛び歸りけるを。將軍あやしみてくつばみをおさへて。先年江帥の敵へ給へる事あり。夫軍野に伏す時は飛鷹つらをやぶる。此野にかならず敵ふしたるべし。からめ手をまはすべきよし下知せらるれば。手をわかちて三方をまく時。あんのとく三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣みだれあひて戦ふ事かぎりなし。されどもかねてさとるぬる事なれば。將軍の軍勝に乗て武衛等が軍やぶれにけり。江

こそ、據一本補

かく、原作で、據一本改

の一言なからましかばあぶなからましとぞいはれける。十二年の合戦に貞任はうたれにけり。宗任は降人に成て來にければゆるしてつかひけり。嫡男義家朝臣のもとに朝夕祇候しけり。或日義家朝臣宗任一人具して物へ行けり。主従共に狩裝束にてうつばをぞおへりける。ひろき野を過るに狐一疋走りけり。義家うつばよりかりまたをぬきてきつねをおひかけり。射ころさんはむざんなりと思て。左右の耳の間をすりざまにしりへ射たりければ。箭は狐の前の土にたちにけり。狐其箭にふせがれてたふれてやがて死にけり。宗任馬よりありて狐を引あげて見るに。箭もたゝぬに死なるといひければ。義家みて臆して死たる也。殺さじとてこそ射はあてね。今いき歸りなん。其時はなつべしといひけり。則箭を取りてまいらせければ。やがて宗任してうつばにさゝせ給けり。他の郎等はを見て。あぶなくもおはする物かな。降人に参りたりとも本の意趣は残りたるらんものを。脇をそらして矢をさゝする事あぶなき事也。ちもひきる害心もあらばいかとぞかたぶきける。され共義家はほとんど神に通じたる人也けり。宗任いかにと思ひよるべくもなかりければ。たがひにかく身をまかせけるにや。或夜又宗任ばかりを具して女のもとへ行たりけり。家ふるくなりて築地くづれ門かたぶけり。車寄の妻戸をあけて其内にてあひたりけり。宗任は中門に侍りけり。五月闇の空墨をかけたるとくにて。雨ふり神なりておそろし

は、一本元、恐衍
の、據一本補
を、一本作に

き事限りなし。いかにもことあらんずらんと思ひたる所に。案のごとく強盜數十人
きほひ來にけり。門の前によりそ「ば」ひてあり。火をともしたるかげより見れば卅
人ばかりあり。宗任いかゞはからふべきと思ひ^るたるに。中門の下より犬一疋はし
り出てほえけるを。宗任ちいさきひきめをもて射たりけるに。犬いられてけい
となきて走るを。やがて同じさまに矢つぎばやに射てけり。其時義家朝臣誰候ぞと
問たりければ宗任となりたり。矢つぎのはやきこそはしたなけれといはれけり。
強盜共此こと葉をきして。八まん殿のおはしましけるぞ。あなかなしとて。はふく
にげうせにけるとなん。

り、一本作る

ける、一本作ら
る、恐非是、同
本與此同

同朝臣若さかりにある法師の妻を密會しけり。件の女の家二條猪隈へん也けり。築
地に棧敷をつくりかけて。棧敷のまへに堀ほりて。其はたに^{そと}をうへたりけり。
すこぶる武勇たつる法師なりければ用心などしける所也。法師のたがひたる隙をう
かいひて。夜ふけてかの堀のはたへ車をよせければ。女棧敷のしとみをあけてすだ
れを持あげゝる。其時とびの尾より越入にけり。堀のひろさもまう也けるに。こへざ
まにとび入けんはやわざの程凡夫の所爲にあらず。此事たびかさなりにければ。法
師聞つけて妻をさいなみせためて問ければ。ありのまゝにいひてけり。さらばれい
のやうに我なきよしをいひて。件の男を入よといひければ。のがれがたなくていふ

まゝにことうけしぬ。棧敷をあけてれいのやうに入らん所をきらんと思ひて。此法
師其道に固基盤のあつきを楯のやうにたてし。それにけつまづかせんとかまへて。
太刀をぬきてまつ所に。案のごとく車をよせければ。女れいの定にしけるに。とびの
をの方よりとび入さまに鳥のとぶがごとく也。ちいさき太刀をひきそばめて持たり
けるをぬきて。とびさまに基盤のすみを五六寸計をかけて。といこほりなく切て入
にけり。法師たゞ人にあらずと思ひて。いかにすべしともなくおそろしく覺えけれ
ば。はふくくづれたちてにげにけり。くはしくたづねきけば八幡太郎義家也けり。
いよ／＼おくする事限なかりけり。

後、集覽本作緩、
一本亦似緩字、
或當作小歟

九郎判官義經。右大將の勘氣の間。都をおちて西國のかたへ行ける時。渡部の後源次
馬允番がもとによりて事の由を云ければ。いたうあはれみて道おくりけり。後に其
事聞へて番關東へめされて。梶原に預けられにけり。十二年までをかれたりけるに。
番毎日本鳥をとりにて今日やきられんずらんとぞまぢける。去程に右大將高麗國を責
し時の追討使に天野の式部大夫遠景むかひけり。大將家のきり物にて次官藤内とい
はれし藤内は是也。西國九國を知行の間そのいきほひいかめし。高麗國打しなへて
上洛の時。わたなべにて番が妹にとつぎにけり。相具して關東に下向しければ。番が
親類郎等共悦びをなして。さりともし今は馬殿の召籠はゆるされ給ひなんと悦あへり

召、一イ本作因

けり。遠景も宿縁淺からず。此上はかの御氣色にをきてはいかにも申ゆるすべし。御承引なくば遠景申預るべしといひければ。彌悦ぶ事限なし。扱關東に下りつきて。いつしか使を番がもとへ遣はしていひけるは。思ひがけずかゝるゆかりに成參らせて候。今にをきてはひとへに親とも頼み奉るべし。内外に付て疎容を存ずべからずといひやりたりけり。番多年の召人にて今日切らるべしといひて十餘年に及びけれども。かたう一人もなければ申なだむる者なし。たま／＼かゝる縁出來る事はいかばかりかはうれしかるべきに。番がいひけるは。弓箭とる身のかゝるめにあひて召籠に預る恥にてあらず。さこそ無縁の者なれ共わながちに其ぬしこひねがふべき聲にあらずとて。返事にいひけるは。よろこびてうけ給はりぬ。誠に傍輩として申承らん事本意候。但またしくならせ給。のよしの事存知しがたく候。番は獨身のものにて候へば。御ゆかりに成參らすべき事候はずと。あら／＼かにかいひたりければ。遠景大きにいきどほりやすからぬ事に思ひて。ともすれば大將に番はきはめたるまれものにて候。いかにも猶あしき事さいださんずる者にて候。はなちたてらるまじき也と申ければ。彌をもく成まさりにけり。されども番は少しもいたまず。をのこの身はいつかいか成べしとて。人わるかるべき事はなしとて物ともせざりけり。かゝる程に大將康衡をうたんとて奥責を思ひ立て。兵をそろへらるべき事出來にけり。

承、一本作奉、恐非〇給、一イ本作給なる三字

候、一イ此下有へば二字〇はなり、一イ本此上有ぬかり三字

誠、一本作質

に、一本无

鯉、原作鮪、據一本及下文改り、一本作る

苑、一本作園

其時番を召ての給ひけるは。汝をとうにいとまとなすべかりしか共。此大事を思ひてけう迄いけて置たる也。身の安否は此度の合戦によるべしとて鎧馬鞍など給ければ。かしくまり悦びて向ひけり。誠に身命をおしまずゆゝしかりければ。勘氣ゆるされて本領かへし給りて二度舊里に歸りき。此番は無雙の手きゝにて侍にけり。渡部にて志かるべき客人の來りける時。鯉はせをしけるには。箭をたばさみておどる鯉を一つもはづさす射けり。網に入にはもるゝ方もおほし。是は一つももらさずいとめければ。みな人目をおどろかしけり。

強盗入りけるに。貞綱は酒に酔て自拍子玉壽と合宿したりけり。思ひもよらぬにね所に打入たりければ。貞綱太刀をぬきて打はらひて。玉壽を引立て後苑へまりぞきて。檜垣より隣へこして我身も共に逃にけり。其事世に聞えて。強盗に逃たるわろしなどさたしけるを。貞綱かへり聞て。今より後なりとも強盗にあひて命うしなふまじ。幾度も君の御大事にこそ命をばおしむまじけれといひけるにあはせて。和田左衛門尉義盛が合戦の時。晝は紅のほろをかけて黒き馬にのり。夜は白きほろをかけて葦毛の馬に乗て軍のさきをかけける。誠に一人當千とぞ見えける。日來の詞に合せてゆゝしくぞ侍りける。つゝあにくみあふ者なかりければ自害してけり。

承久三年のみだれに。宇津宮越中前司頼業いまだ無官なりけるが。宇治川をわたす

とて押ながされて水の底へ入たりけるに。石にかきつけて鎧をぬかんとしけるが。上帯まめてとけざりければ。引ちざりぬきておよぎわがりたりける。さしもはやき川の底にてかくふるまひたりける。ゆゑしき事也ける水練なりけり。

弓箭第十三

弓箭之藝。其勢專一也。只省上弦之月。當心。弦不再控。矢不虛發。百中。古之上手多傳芳譽。

箭、一本作矢。○
省、一本作考。同
一本與此同。此下
恐有誤脫
まけわざ、一本
作勝負也

り、一本作る

々、一本元

延長五年四月十日。彈正親王内裏にて小弓のまけわざさせ給ける。酒肴などはて夕べになりて。清涼殿の東の廂にて又小弓有けり。前には彈正親王重明のちには三品親王。清貫民部卿。此外の人々も仕まつりけり。女裝束一がさねかけ物に出されたりけるを。彈正親王の宮とり給ひにけり。勝方の拜など有けりとかや。そのまけわざは廿三日にこそ給けれ。長曆二年三月十七日。殿上人十餘人野々宮へ参りたりけるに。御殿の東庭に疊を敷て小弓の會有けり。又蹴鞠も有けり。夕に及て膳をすゝめられけるあひだ。籠中より管絃の御調度を出されたりければ。則絲竹雜藝の興も有けり。又和歌も有けるとかや。むかしはかく期せざる事もやさしく面白き事常のことなりけり。いみじかりける世也。

等、一本作樂、
草林相似

寛治八年八月三日。瀧口大極殿にて賭弓の事有けり。前の方は退紅の狩衣をぞきたりける。うしろは心にまかせたりけり。故人等も催し有ければ。公清卿等衣冠にて参たりけり。七雙はて、虎皮をかけ物にて一度射させられたりけるにあたらざりけり。本意なかりける事也。

頼光朝臣の郎等季武が従者究竟のもの有けり。季武第一の手きゝにてさげ針をもはづさず射ける者之けり。件の従者季武に云けるは。さげ針を射給ふ共此男が三段ばかりのきて立たらんをばえ射給はじと云けるを。季武やすからぬ事云やつかなと思ひてあらがひてけり。若射はづしぬる物ならば汝がほしく思はん物を所望にまたがひてあたふべしと定めて。おのれはいかにといへば。是は命を参らするうへはといへばさいはれたりとて。さらばとてたてといへば。此男いひつるがごとく三段のきて立たり。季武はづすまじき物を従者一人うしなひてんずる事は損なれども。意趣なればと思ひてよく引てはなちたりければ。左の脇の志も五寸計のきてはづれにければ。季武まけて約束のまゝにやうくの物共とらすいふにまたがひてけり。其後今一度射給べしといふ。やすからぬまゝに又あらがふ。季武初めこそふしぎにてはづしたれ。此度はさりとると思ひて。まばし引たもちて真中にあてゝはなちけるに。右の脇下を又五寸計のきてはづれぬ。其時此おとこさればこそ申候へ。え射給ふま

りけり、一本作さ
りつ

共、一本无
て、一本无

じきとは。手き、匠てはあはすれ共。心ばせのをくれたる人の身ふときといふ共。定めて一尺には過ぬ也。それを真中をさしてい給へり。つるをときして。そとそばへおどるに五寸はのく也。まかれはかく侍る。かやうの物をば其用意をしてこそ射給はめといひければ。季武理にをれていふ事なかりけり。

むつる、一本旁
書曰作渡邊源五
右馬允

一院鳥羽院にわたらせおはしましける比。みさご日毎に出きて池の魚を取けり。ある日はを射さ甘んと思召て。武者所にたれか候と御尋有けるに。折ふしむつるが候けり。召に随ひて参りたりけるに。此池にみさごのつきてもほくの魚を取。射といむべし。但射ころさん事は無慙也。鳥もころさん魚をもころさんと思召之。あひはからひてつかうまつるべしと勅定ありければ。いなみ申べき事なくて則罷立て。弓矢を取て参りたりけり。矢はかりまたにてぞ侍りける。池の汀の邊に候てみさごを相待所に。案の如く来て鯉を取てあがりけるをよく引て射たりければ。みさごはいられながら猶飛行けり。鯉は池におちて腹白にてうきたりけり。則取あげて徹覽にそなへければ。みさごの魚をつかみたる足をいきりたりけり。鳥は足は切たれ共たうちにならず。魚もみさごの爪立ながらまなず。魚も鳥もころさんやうにと勅定有ければかくつかうまつりたりけり。凡夫のまわざにあらずと感感のあまりに祿を給はりけるとなん。

て、據一本補

不足し、一本作
足らざり

河より、一本作
あさり、恐非

は、一本无當衍

る、一本作り

此むつるの兵衛尉。懸矢をはかすとて。とうの羽を求めけるが。不足しければ郎等共にもしや持たるとたづねければ。上六大夫といふ弓の上手聞て。此邊にとうやはみ候見よといひければ。下人立出てみて。只今河より北の田にはみ候といふを聞て。則弓矢を取て出たるに。とう立て南へとびけるを。上六矢をはげて左右なくも射ず。いづれかはこかれたるといひければ。まりに飛をこかれたるといふを聞て。なをにいそがずはるかに遠く成て。河の南の岸のうへ飛ほどに成にける時。よく引てはなちたるに。あやまたず射ちとしてけり。むつる感興のあまり不審をいたして問けるは。など近かりつるをば射ざりつるぞ。はるかに「は」とをくなししては射るぞ心得ずと尋ねければ。其事に候。近かりつるを射落したらば川に落て其はねぬれ侍りなん。むかひの地に付て射おとしたればこそかくはねはそんなとぞいひける。心にまかせたる程誠にゆしかりける上手なり。

同人のもとに又賀次新太郎といふ弓の上手ありける。年の始に弓を射けるに。九度の弓はつるたひ今矢三あまりたりけり。賀次が矢は。一すぢ也。あたらん事は不審なけれども今二の矢がかずあまりぬれば。射ても川事なしと左右ともにいひけるを。賀次がいはく。かりまたをゆるされ給たらば緒付をつかうまつり。持にし侍らんといふを。主人あしくいふものかな。若はづる、事も有にと思ひけれ共。諸人目をすま

さんがためにゆるしてかりまたをとらせてけり。賀次よく引てはなちたるに。いふが如く緒付を射きりて的土におちにけり。緒付いつれば矢かず三にもちあるならひなれば。三のかずを矢一すぢにて持になりけりとなん。

に、據一本和
三、一本元、或衍

或所に的弓射けるに。晩に及びければ。明日や勝負すべきなど人ぐいひける所^に。源三左衛門尉翔來りけり。此きたを聞いていひけるは。翔はいづかたのかたう人もすまじ。矢を一手給へかし。その的申のまへうしろを射ん。あたりたらんかたを勝にし給へといへば。人ぐも興に入て則矢をとらせたりければ。ついたちてはやを射るにまへの申にあたりぬ。方の人のじりあへりけるに。をとやにて又うしろの串をいてけり。此うへはさやうにてこそ候はめとてやみにけり。かやうに名を得たる上手のふるまひ目^を「おどろく事なりとなん。

を、一本元、當衍
りけ、一本元

左衛門尉平助綱は。つやぐ弓引はたらかす事叶はざりけるもの也けり。家の棟にとうの飛きてゐたりけるを。是は忌なる物と思て立出てみるほどに。下人左右なく弓矢をとりてあたへたりければ。なをざりにとりていたりける程に。あやまたず射おとしてけり。上手すら猶大事なり。さしもの弓ひかずの^{身にて}射あてたる事身の冥加のいたり。さればつゝがなかりけりとなんいへり。

補身にて、據一本

古今著聞集卷第九終

古今著聞集卷第十

馬藝第十四

神事の庭には競馬を先とし。公事の砌には青馬をはじめとす。まかのみならず武徳殿に御幸なりて。さまざまの馬藝をつくさる。又信濃の駒を引て左右の察に給て。禮儀にそなへらる。をよそ此藝は乗尻の所好之。隨身の所專之。

よ、原作、據一本改

正曆二年五月廿八日。攝政殿右近馬場にて競馬十番を御覽じけり。山井の大納言儀同三司共に中納言にておはしける。左右にわけて公卿おほく參られけり。一番左將曹尾張兼時。右將曹同敦行つかうまつりけるが。兼時が轡たひぐぬけたりけれども。おつる事はなかりけり。さりながらもつるに敦行勝にけり。兼時敦行にむかひて。まけてはいづかたへ行ぞといひたりけり。人ぐその言葉を感じて纏頭しけるとなん。いまだ競馬にまけざりけるものにてかくいひける。いと興あるいひやうなるべし。

移、一本作鞍

寛治五年五月廿七日。二條大路にてはなちがひしける馬をとりて。移を置いて競馬六番ありけり。殿上人ぞつかうまつりける。東の陣のまへより西の中門にむけてぞ馳ける。主上大鼓をうたせ給ひけるに。たはぶれごとなれどもめづらしかりけること也。

いづれの攝祿の御時にか。東三條にて雲分といふあがり馬をのられけるに。中門の廊の中に爪がたを付て。車寄の戸のそとへとび出たりけり。其足の跡のごひなうしなひそと仰られて。ちかくまで侍りけるとかや。

一、一本元、據百練當衍

わさ、原作さ、據一本改

天治元年十一月廿一日。鳥羽院寛治の例をたづねて高野に御幸有けり。道の程おぼつかなく思召て。白河院よりひまなく御使有けり。廿七日にぞ中院につかせおはしましける。廿八日に奥院にまいらせおはしましける。晦日還御のみち長坂の東野にて。御馬をおさへて競馬の事有けり。一番左兵衛督。權右中弁顯頼朝臣。左勝。二番修理大夫。左近將曹公俊子。右馬いでず左勝。三番美作守顯輔朝臣。左近府生秦兼信。兼方勝負いかなりけるやらん。いと興あることなり。

内、二本作日

こ、原作さ、據一本改

一、原作へ、今從一本

保延三年八月六日。仁和寺殿の馬場にて日吉御幸の内くらべ七番有けり。一院鳥羽女院待賢。今宮五宮前齋院御覽せられけり。左大臣以下參給ひけり。一番左院將曹秦兼弘。兼久。右府生下野敦延。敦高。つかうまつりけるに。三遅の後敦延が馬のひざより血はしりければ。他の馬をのせかへられんがためにいれられにけり。二番左府生下野敦方。敦利。右府生秦兼則うちいでける程に。兼則おこり心地おこりて。勝負の心なかりければ。追入られて兼弘敦延又打出にけり。左の馬もとより口をうちけれども。兼弘ならびなき上手なりければ。馬の失をかへり見ず。ちかくまうけておりかゝる事

十度にあまりけれ共敦延追はざりけり。兼弘をはんとしければ敦延ちかくよせず。かくて時を送る程に。かならず勝負すべきよし仰下されける時兼弘をひてけり。敦延がかちの袖をとりて引ほころばかしたりけれども敦延勝にけり。兼弘はじめて負にけり。大かたのりやう上下目をおどろかしけり。院殊に御威有て兩人共にめされけれども。兼弘あとをくらみて失にけり。敦延に方人纏頭せざりければ。院しきりに方人をめされけれども參るものなかりけり。右方の奉行の將にて大炊御門右大臣の中將にておはしけるぞ。女郎花の織ひとへをなまじるに打かけられける。敦延其祿を鞭にかけて肩にはかけざりけり。またしきもの共の有ける所にて。師子にや似たるといひたりければ。誰にてか有けんなど、問たりければ。くれぬ物をこひとりたればよといひける。にくながら興ありとも沙汰有けり。

の、一本元

後鳥羽院の御時の競馬に。院の左番長秦頼次。兼平。府生下野敦近つかうまつりけるに。頼次が乗たる馬の鞭を打たりけるに。馬場もとへ走り歸りけるに敦延勝にけり。勝負普通ならずとさた有て。程へて敦延をめされけるに。保延の敦延が事を思ひ出て。祿を鞭の前にかけてまたしきもの共に向ひて。師子にや似たるといひたりければ。御けしきあしく成て。所帯も相違してけるとかや。かやうの言葉は人によりていふべきなり。

承安元年小五月會にて侍けるにや。秦公景。公正下野敦景。敦則あはせられたりけるに。公景はまうけ上手。敦景はをひ上手なりければ。案のごとく敦景追て。とりくみて馬場末までとほりにけり。ともに興有ければ兩人めされにけり。公景はもとより院の召次所に候けり。敦景叡感のあまりに。次日召次所に候べきよし。大宮大納言隆季卿奉行にて仰下されけり。公景此事を聞て。院の中門に主典代應官などが候ける中にて。誠にや敦景公景に持したりとて御所へめされ侍る也。公景に勝たらんものはいか程の目にかあふべきといひたりける。いと興ある中事也。

リ、一本作る

侍、一本此上有見字。

小松の内大臣右大將にておはしける時。佐伯國方。重文一座にて侍けり。治承元年三月五日内大臣に成給ける時。番長になされにけり。拜賀の夜くせもなき馬を移馬にひかれたりけるに。國方近習の者をよび出して申けるは。今夜國方さだめてくせ物に乗侍らんざらんと。近衛の舍人等目をすまして侍らんずるに。無念の馬を仕まつらん事。なげき思ふよしを申ければ。おとこよひは祝の夜にてあるに。もし不慮の事もあらば公私いまはしかりぬべし。後くのせらるべきよし仰られければ。國方かさねて申けるは。若落馬仕て侍らば。國方が怪異になし侍りていとまを給べし。猶くせ物にのせらるまじくば。番長にはすみやかに他人をなさるべしと志るて申ければ。おとこ力及ばであがり馬をひかれにけり。なかみちにくちはづさせてあげけ

に、一本无

り。誠に違失なし。おとこ感にたへず歸り給ひて纏頭せられけるとぞ。

播磨の府生貞弘が家ちかく陰陽師ありけり。馬をまうけたりけるを。貞弘をよびてのり心見るべきよしひければ。貞弘奇怪に思ひながら行て乗てけり。打まはしてやがて乗ながら家へ歸にけり。陰陽師こはいかにとて馬をこひければ。さもあらず汝ほどの者が貞弘をよびて庭乗せさせてみるべき事かは。馬をとらせんと思へばこそそのせつらめとて。やがて領してければ力及ばでぞ有ける。

後白河院の御時。鎌倉前右大將御馬を百疋参らせたりける。下野敦近召次所に候けるをめしてのせられけるに。冬の事なりければ。いと寒かりけるに。敦近はだかにかたびらばかりをきて参りたりければ寒げに見えけるが。御馬の數つかうまつりにければ汗ぐみにけり。兼て用意したる程いみじく見えけり。叡感ありて御馬一疋系りて給べきよし仰られければ。うけ給はりける時乗たりける御馬をさうなく申給にけり。乗はて、後中門に候けるに。宿衣一領賜せければ肩にかけて出けり。ゆゑしくぞ見えける。

りけ、一本无

勢、一本補

面く、一本此下有に字

武藏の國の住人つゝきの平太經家は高名の馬乗馬飼なりけり。平家の郎等なりければ。鎌倉右大將めしとりて景時に預けられにけり。其時陸奥より勢大きにしてたけき惡馬を奉りたりけるを。いかにものる者なかりけり。聞えある馬乗どもに面く。

召一イ本作四

のせられけれ共。一人もたまるものなかりけり。幕下思ひわづらはれて。さるにても此馬にのる者なくてやまん事口惜き事之。いかゞすべきと景時にいひあはせ給ひければ。東八ヶ國に今は心にくき者候はず。但召人經家ぞ候と申ければ。さらばめせとて則召出されぬ。白水干に葛の袴をぞ着たりける。幕下かゝる悪馬あり。仕りてんやとの給はせければ。經家かしてまりて。馬はかならず人にのらるべき器にて候へば。いかたけきも人にまたがはぬ事や候べきと申ければ。幕下入興せられけり。さらばつかうまつれとて則馬を引出されぬ。まことに大きにたかくしてあたりをはらひてはねまはりけり。經家水干の袖くくりて。袴のそばたかくはさみて。ふぼうしがけまて庭におりたちたるけしき。まづゆゑまきぞ見えける。かねて存知^レたりけるにや。轡をぞもたせたりける。其轡をはけてさし繩とらせたりけるを。少しも事ともせずはねはしりけるを。さし繩にすがりてたぐりよりて乗てけり。やがてまかりあがりて出けるを。少しはしらせて打とめて。のどぐとあゆませて。幕下の前にむけてたてたりけり。見る者目をおどろかさずといふ事なし。よくのらせ今はさやうにてこそあらめとの給はせける時ありぬ。大きにかんじ給て勘當ゆるされて厩別當になされにけり。後經家が馬飼けるは。夜半ばかりにおきて。なにゝかあるらん白き物を一かはらけばかり。手づからもて來りて必ず飼けり。すべて夜ゝばかり物をく

し、據一本補

を、一本无
ひ、一本作い

はせて。夜あくればはだけ髪をゆはせて。馬の前には草一把もおかず。さはゝとはかせてぞ有ける。幕下富士川あひざはの狩に出られける時は。經家は馬七八疋に鞍置て。手細むすびて人もつけずうち放して侍ければ。經家が馬の尻にまたがひて行けり。さて狩場にて馬のつかれたる折には。召にまたがひてぞ參らせける。か様に傳へたるものなし。經家いふがひなく入海して死にければ知るものなし。口おしき事也。

一條二位の入道のもとに高名のはね馬出來りけり。秦頼久をめしてのせられたりけるに。ひとたまりもせずはねおとされけるを。父敦頼が七十有餘にて候けるが。是を見て。わろくつかうまつる物かな。敦頼はよもおちじとぞ申けるを。老後にいかゞとは思ひながら。さらばのれかしといはれたりければ。やがてのりて少しも落ざりけり。人々口をまどろかしけり。

建仁三年十二月廿日。北野宮寺に御幸ありて競馬十番有けるに。五番めに左院の右番長秦久清。右に大將花山院右府入道忠經公。下^毛野敦文つがはせられにけり。久清は上手之。敦文は不堪の者之ければ。久清合手をきらひて辭し申けれども叶はざりければ。心地あしく覺えながらつがふべきになりたりけるに。さても中々不堪の仁にまけなば。猶本意なかるべしと思ひけり。かくて久清北野の宿所にて出立つ程に。僧一人來

毛、據一本補